佐々木龍一の日常は非日常

ピポゴン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

佐々木龍一の石矢魔での教師生活。問題だらけな石矢魔だが、本人は特に気にした様子もない

目次

この春着任。 1
入学 7
佐々木の日常 19
ｖｓ．男鹿 27
ｖｓ．ヒルダ 51
烈怒帝瑠、帰還 66
男鹿ｖｓ．邦枝 84
最強の起源 106
家庭訪問ｉｎ神崎 134
家庭訪問ｉｎ姫川＆邦枝宅 157
家庭訪問ａｔ東条 176
自宅訪問ｉｎ男鹿家 196
最強 218
語られる伝説 231

この春着任。

石矢魔高校。泣く子が黙るどころか一周回って泣きながら絶叫をあげる程の超不良校。

に、在籍する男が1人。

名を佐々木　龍一。

彼は石矢魔高校で生徒としてではなく教師として働いている。

これは、そんな彼を取り巻く非日常の物語。

春、石矢魔に着任して1日目。俺は基本事項の説明の為校長室に呼ばれた。不良校を納めているのが生粋の超不良だと思ったら大間違い。この校長、石矢魔には似合わないほど大人しい。しかもヒョロい。身体つきや纏う雰囲気でわかるがこのタイプは今まで喧嘩なぞ一回もしたことのないくちだ。

とまあ、校長の話は置いておいて、俺も教師としてはまだまだ新人。多少経験は積ん

だが至らない点は多々ある。基本事項の説明をちゃんと記憶しようと気合を入れた。しかし。

「くれぐれも怪我をしないように気を付けてください。」

校長はそれだけ言うと頭を下げて窓側を向いた。

いやいや、絶対におかしいだろう。それは小学生が遊ぶときに先生がかける言葉であって、教師に校長が言うことではない。

というかまず基本事項ではない、忠告だ。

知ってはいたが改めて思う。石矢魔を普通の高校と思っては行けない。まあしかし、来ている奴らは所詮は高校生。まだまだガキだ。特に石矢魔の連中は大海を知らない。小山の大将気取りだ。

だから教える。だから俺が来た。

いっちょ、やるとするか。

なるほど流石は石矢魔だ。教室に入ってくれりゃああとは強制的に授業を受けさせるだけなんだが、奴ら教室にさえこない。しょうがないので1時間目を生徒捕獲とし、学校中に散らばったうちのクラスの生徒を集めることにした。

特に困ることもなく割と早くに集めることができた。しかし見れば見るほどガキだ

な。

とりあえず授業を行う。話を聞いてない奴も多いが初っ端から注意してばっかだと効率が悪い。

何処かに真面目な生徒はいないものか……。

いた。俺が受け持った数クラスの中で、女子は割と真面目な部類に入った。が、彼女は特別真面目だった。

邦枝　葵。

彼女はいい。すごくいい。1年生ながらしっかりしていて、成績もいい。他校と比べても遜色のない委員長タイプだ。

だからこそ、そんな彼女が勉強している最中に騒いでる奴は気にくわない。てか俺の授業の最中だしな。少し注意したら黙ってくれたが毎回やられちゃ世話無い。

現在の石矢魔の勢力図が理解できた。大体の派閥があって、2年の神崎、姫川、1年の邦枝をそれぞれ頭にしている感じだ。ちなみに全員知った顔である。邦枝は元から女子のリーダーぽかったし、神崎、姫川に関しては2年の中でもかなりの自由奔放ぶり

だったから”やっぱりな”という感じである。
まあ授業の邪魔をしなければ特にどうということはしない。

校舎を壊しやがったあいつら。コロス。

学期も終わるということで生徒たちの成績を処理していたとき、
「ああ? 何だこいつ。出席日数が極端に少ない。つかほぼ来てねえじゃねえか。」
名簿にあるのは東条英虎の文字。
「東条……えいこ?女か」
今度会ったときに注意しとかないとな。

どうやら邦枝　葵は現レッドテイルの総長らしい。もちろん俺も知っている。聞いた話だと関東最強のレディースだそうだ。
まあ石矢魔でも1部（特に男子）から恐れられてる雰囲気はあったし、特に驚きはしない。
そういえば常に木刀を帯刀していた気もする。

担当科目が増えた。今まで国語と生物と物理以外の全てを教えていた俺にとっては、新しく物理が増えることにさして抵抗はない。

しかしだ、だんだんと受け持つクラスが多くなり始めているのはいただけない。まだそういう段階じゃないと思うからだ。

東条英虎。これで〝とうじょう　ひでとら〟と読むらしい。もろ男だった。

というのも彼が学校に来たという噂を聞き、久しぶりに1時間目を急遽生徒捕獲にして東条を捕まえに行った。

学校の生徒達に聞いて回り、やっとそれっぽいところにたどり着いたとき、その場所にいたのはマッチョな男。

そいつ以外は何故かみんな気を失っているので、そいつに『東条はどこだ？』と聞いてみたところ『俺がその東条だ』と言って殴りかかって来た。ずっと女だと思ってたのでかなりの衝撃だったが、とりあえず東条には落ち着いてもらった。

あとで話を聞いてやっとそこで名前が〝えいこ〟ではなく〝ひでとら〟と知った。考えてみれば〝えいこ〟はなかったかもしれないな。

東条はバイトに忙しいが故になかなか学校に来れないんだそう。まあ教師としては勉学を優先しろと言いたいが、家庭の事情とかもあると思うので学校に来たらちゃんと

授業を受けるということにした。

そろそろ俺が着任して1年が経つ。思えば色々なことがあったが、過ごしてみるとあっという間だった。最初は授業を妨害してた奴らも、今はおとなしくしている。校舎の破壊も減った方だ。環境としてはだいぶ教えやすくなったが、これから入ってくるのは何の常識もない無法者の1年生。また1から教えなければならないが、それが教師だ。頑張って行くとしよう。

教師という立場が極端に低いここ石矢魔。授業など存在しない。今まで我こそはと意気込んで来た教師はことごとく辞めていった。そしていつか石矢魔はすべての教師に恐れられる高校と化していた。

そんな高校に突如彗星の如く現れた新人教師、佐々木。彼が着任してから1年経たずして、石矢魔では〝校舎を壊すと死ぬ〟や、〝東条が負けた〟などという奇妙というか、信じられない噂が飛び交うようになった。

入学

邦枝　葵にとって、佐々木というのは、真面目で、頼り甲斐があって、石矢魔の男子で唯一まともな存在だった。自身が石矢魔に来て初めての担任がこの佐々木であった。最凶の不良校と恐れられるこの石矢魔に在籍している教師など、まともなわけがない。

と、葵は思った。しかし接すれば接するほど評価は変わっていき、やがて葵の中での佐々木の評価は前述した通り”真面目で頼り甲斐があって石矢魔で唯一のまともな男”というものになっていた。

しかしある日のことだった。

「えー、そして因数分解をすることにより」

いつもの通り授業を行っている佐々木。それを真剣に聞いている葵。

葵にとって佐々木の授業はとてもわかりやすく受け甲斐があった。しかし

「おーい、数学なんてどうでもいいんだよぉ。んなことより俺と殺し合いしようぜ?」

この日はいつにもまして一部の生徒達が騒いでいた。佐々木は『分からない』という指摘に対しては丁寧に答えるが、適当な茶化しや挑発は意に介さなかった。

しかし、今日は流石にそれが酷すぎる。
今まで我慢して来た葵も流石に限界が来たのか、思いっきり机に手をつき立ち上がったそのとき。
「ぐっはあ!!!!」
野次を飛ばしていた不良の1人が盛大に壁際まで吹っ飛んだ。それを皮切れに次々と吹っ飛んで行く不良達。それを行っていたのはまぎれもない佐々木だった。ほぼ無表情で作業のように黙々と不良を鎮圧して行く佐々木。
「よし、じゃあ再開するぞー」
ものの数秒で騒いでいた不良共を全滅させた佐々木が最初に放った言葉である。
この時から葵の中の佐々木の評価は、真面目で頼り甲斐があって石矢魔の中で多分唯一まともな男で、そして”怒らせたらやばい奴”というものになった。
佐々木のやばいエピソードはそれから度々目撃し、時には耳にした。
ある日葵が廊下を歩いていると、視線の先に佐々木が10人くらいの生徒を担いでいるのが見えた。そしてさらに3人の生徒と対面している。
何が何だか全く分からなかった葵は暫くその様子を静観しようと決めた。
一言二言言葉を交わし、次の瞬間3人の生徒が佐々木に殴りかかった。
しかし佐々木はその3人を蹴りで打ち上げ、そのまま担いでいる10人の上に重ね

た。

そしてまたどこかへ歩き始めた。

後で聞いた話によると佐々木が受け持っている何個かのクラスのうち、生徒が全くいないクラスがあったらしい。そしてそのクラスの1時間目を生徒捕獲にしたそうだ。つまりあの現場は、絶賛生徒捕獲中であったわけである。

またある時、葵が廊下にて生徒同士の喧嘩に遭遇した。石矢魔ではいつも通りの日常的な風景なので葵は特に意に介さず横を素通りすることに決めた。一見危険なこの行動だが葵にとってはなんら問題のないことだった。

そう、生徒同士の喧嘩ならば。

片方の生徒がフルスイングしたバットが相手を空振りし、そのまま窓へと直撃した。無論窓がその衝撃に耐えられるわけもなく、無残に四散する。

その直後である。

「おい……」

地獄の底まで響きそうな低い声。いつの間にかバットを持った生徒の後ろには佐々木が立っていた。

「うわあ!!なんだてめえゴラァ!!」

突然のことに驚嘆した生徒は思いっきりバットを振りかぶるが、
「ゴッパァー・」
次の瞬間には廊下を水平に飛行していた。言うまでもなく佐々木にぶっ飛ばされたのである。
「校舎を壊す奴は許さねえ」
鬼のような表情でそう言った彼にもう一方の生徒は全力で土下座して許しを乞いた。
他にも石矢魔最強と噂される東条を倒したとか、実は悪魔と契約しているだとか、人を殺したことがあるだとか、様々な噂が石矢魔内で飛び交っている。それほどまでに、今石矢魔で彼は大きな存在になりつつあった。

破茶滅茶な1年もあっという間に終わり、俺が石矢魔に来てから2度目の春がやってくる。そして、今日は入学式だ。
案の定というかなんというか、本来新入生と在校生で溢れているはずの体育館はすっからかんだ。何人か生徒の姿は確認できるが、だからといって真面目なのかというと全

然そんなわけではない。今は校長のお話の途中であるのに、携帯やゲームをいじったり、友達と駄弁ったりと相変わらずの自由奔放ぶりだ。

おかしいな、今は起立するべき時なのだが、立ってる奴は1人としていない。はて、着席を許した覚えはないはずだが？

「てめえらゴラァ!!!校長がお話中だぞゴラァ!!!真面目に聞かねえとぶっ殺すぞ!!」

おっと、そんなことを考えていると横合いから怒号が飛ぶ。

今叫んだ彼は今年から石矢魔で働く新任教師の鮫島さんである。フルネームは鮫島宇垣　らしいが俺が彼のことを宇垣と呼ぶことはないだろう。

彼とは少し話したが、曰く石矢魔に来る前にも似たような不良校に勤めてたらしい。だからか知らないが校長に安全第一でお願いしますと恒例の言葉を言われた時に、ドヤ顔で

「大丈夫っすよ。これでもああいう奴らの扱いはわかってるんで」と言っていた。だから少しその扱いとやらを気になっていたのだが、今のがそうらしい。

確かに鮫島さんの顔は厳つい。怒鳴ればそれなりの迫力が出るし、前の不良校では通用したかもしれない。しかし、ここは天下の石矢魔である。新任のまだよく知られていない教師がそんなことを言えば

「ぷっ……ぎゃはははははは!!お、おいこいつ、俺らのことを殺すだってよー」

「おかしくってはらいたいわー!!」
まあこんなことになるのは予想の範疇である。横目で鮫島さんを見てみれば顔を真っ赤にしてプルプルと震えている。あれは完全に怒ってるな。まあ、もし鮫島さんが超ド級の強さとカリスマ性を持っていれば3日で馴染むだろう。
とりあえずこのまま全員爆笑状態じゃ校長が話すに話せないのでどうにかする。
「おいてめえら、流石にうるせえよ」
途端に静まり返る体育館。こいつらの扱いなら1年間で熟知した。大きく怒鳴るより静かに訴えかけるのが大事なのである。
まあ、自慢じゃないが俺も高校の時はそれなりにカリスマ性が必要とされる立場にいた。その経験がここで発揮されてるのかもしれない。
「校長、お願いします」
続きを校長に促す。校長は顔を引きつらせながらまた読むのを再開した。
今日の予定はこの後各クラスでショートホームルームなのだが、多分ほとんどの生徒が帰ると思う。まあ学校内にいれば回収すればいいのだが、家に帰られてはどうしようもない。まあせいぜい家に連絡するくらいである。
「はあ…」
俺は今年3年と2年と1年のクラスを持つことになっている。もうほぼ意味わから

ないがやるからにはしっかりやる。
しかし、これからのことを考えるとやはり少しめんどい……

「おい男鹿、もっと急げよ。遅れるぞ入学式」
「うるせーぞ古市。俺はジャンプのせいで寝不足なんだ、殴るぞ。ジャンプで殴るぞ。」
「ジャンプそんな時間かかんねえだろうが。どんだけ念入りに読んだんだよ」
「元はといえばお前が俺のジャンプ借りてたのが悪いんじゃねえか。なんで買った俺が読むのお前より後なんだよ」
「よし、急ごうぜ男鹿」
「おいコラ古市ぃ!!」
ダッシュしだす古市を男鹿が全力で追いかける。
彼らの言う入学式とはもちろん石矢魔の入学式である。先の会話通り、男鹿が寝坊したことにより現在入学式に間に合うか間に合わないかの瀬戸際なのだ。
急ぐ気はさらさら無かった男鹿だが、結果的には古市をダッシュで追いかけたことにより間に合うことになった。

「うおお…流石石矢魔…。本当に高校かよここ…」

式場である体育館に来て古市が真っ先に思ったことである。まず人がいない。明らかに用意された席分うまっていない。というかガラガラである。しかしじゃあ来てる少人数は真面目なのかと言ったらそんなわけない。礼儀なんてあったもんじゃない。もう式が始まると言うのに黙ってる奴が1人もいない。それどころかそこら中で携帯やらゲーム機やらの操作音が聞こえる。

古市が小中と見て来た式典とは雲泥の差だ。

間も無く式が始まった。簡単な教師の挨拶から始まり、校長の話へと移る。

ーーしかし起立してる奴が1人も見当たらねえぞ…

校長の話の前に教師が起立と言ったはずなのだが当然のごとく誰も立たない。それどころか校長の話など気にせず駄弁りまくっている。この事実に呆れる古市も、この場で立つことはできなかった。完全に浮くからである。横の男鹿を見れば既に爆睡である。いっそのこと自分も寝てしまえばいいのではないかと思った瞬間。

「てめえらゴラァ!!校長がお話中だぞゴラァ!!真面目に聞かねえとぶっ殺すぞ!!」

体育館中に怒号が響いた。寝る体勢を探していた古市もその怒号により強制的に一時停止させられた。

一瞬静まり返る体育館内。

ーーう、うおおおこええええ!!流石石矢魔!教師まであんなんばっかかよ!なんだよあの顔の傷!ヤーさん確定じゃねえか!!

流石の石矢魔の不良もこれにはビビるか。とそう古市が思った時。

『ぎゃはははははは!!』

体育館内が爆笑の渦に飲み込まれた。少人数とは思えないほど響き渡る笑い声。古市はそれを見てこいつらがビビるなんてありえないか…と思う。笑い声は段々と大きくなっていき、ついには涙を流す者まで出てきた。

何がそんなに面白いのか理解できない古市。

古市は決めた。この横で爆睡しているバカを置いて自分は帰ろうと。

古市がそう決めて席を立とうとした時。

「おいてめえら、流石にうるせえよ」

それはまたも教師の声だった。しかし今度はさっきとは違う声。その声は静かなものだったが不思議と体育館内によく響いた。じっとりと、重くのしかかるような声。今更この不良達に何を言っても変わらないと思っていた古市だが、結果は全くの予想外だった。

ピタリと、笑い声が止まった。途端に体育館内は水を打ったように静かになる。
しかし少しだけヒソヒソ声が聞こえる。
ーー古市イヤー
古市はとりあえず耳を澄ましてその声を聞いてみた。
「お、おい、あれ佐々木だろ。いつからいたんだ？」
「わからねえ……さっきまではいなかった気がするが…」
「お、おい黙れ、殺されるぞ」
大体内容は以上の通り。皆一様に1人の人間のことを話している。
ー佐々木ー
見れば舞台の上にいつの間にか男が立っていた。古市は直感的にこの男が佐々木であり、先程の声を発した人物だとわかった。
しかし同時にわからないこと。
ーーなんで皆あの教師を知ってるんだ？ここにいるのはほとんどが新入生だろ…。
古市はとりあえず聞いてみることにした。二個横の席に黙って座っている男。この男も先程は駄弁っていたわけだが、今は口を噤んで姿勢を正している。額には汗が滲み出ている。
「あ、あの、すいませんっす」

古市はとりあえず敬語で行く。
「な、なんだよ」
相手は答えてはくれたもののかなりの小声で、目線をちらほら佐々木に向けている。
「えっと…なんで皆さん急に黙ったんですかね。あの佐々木先生って有名なんですか？」
その古市の問いにその不良は目を見開いた。
「おいお前、名前は、知らねえが時に無知は身を滅ぼす。この高校に入る、時点で東邦神姫と佐々木の名は知っておくべきだ」
男はたどたどしく話す。古市はぶっちゃけ東邦神姫なる存在も知らないのだが、聞くとまためんどくさそうなのでそこは流すことにした。
「石矢魔のカースト制度のトップが東邦神姫なら、佐々木は言うなればカースト制度の外側の人物。佐々木は東邦神姫と同じくらいか、それ以上に怒らせちゃいけねえ人物だ」
段々と舌の滑りが良くなってきた男。しかしやはり小声なのには変わらない。
「えっと、佐々木先生ってそんなにやばいんすかね」
見たところは普通だ。確かに目つきは鋭い気がしないでもないが、それだけ。高身長と灰色の髪が多少目立つ程度である。

「や、やばいなんてもんじゃねえ！俺が知ってる噂だけでも石矢魔生徒１００人を相手に３０秒で終わらせたとか、刃向かった不良を半殺しにしたとか、鬼とやりあったとか、そんなんばっかだ！東条ともやりあったって噂があるしよ…。実力は東邦神姫以上って言われてるぜ。しかもよ、あいつ去年から入ってきた新任教師なんだよ。つまりたった一年の間にこれだけの噂が生まれてるんだよ…。

あまりの恐ろしさから龍が人の皮かぶって歩いているっていう奴もいる…」

一気にまくしたてられ古市は途中の内容が頭に入ってこなかった。ただわかったのは、あの佐々木という人物は1年で石矢魔のレジェンドになるくらいやばい人物ということである

「な、なるほど。ありがとうございました」

「おう……おめえも気をつけろ…」

未だ佐々木を恐れているその不良を見て、古市は佐々木には極力近づかないように決めた。

そんな彼が担任が佐々木と知って絶望するのはこの少し後の話である。

佐々木の日常

最近校内でやたらと問題を起こす生徒がいる。今年から入ってきた1年、男鹿辰巳だ。

勢いだけで言ったら神崎や姫川すら越えるかもしれない。

どうやら中学のころからそのやんちゃぶりは有名だったらしく、なんだっけか、『あばれおーが』だのの呼び名で知られてたらしい。そんな男鹿辰巳だが、現在俺が担任を受け持っている。当初は何か授業妨害でもするんじゃないかと思っていたが、なんてことはない。ただの間の抜けた奴だ。特に授業を邪魔したりしなければ構わない。

それともう1つ。鮫島先生が辞任した。これについて俺がどうこう言う気は一切無い。ただ、圧倒的強さとカリスマ性を備えてなかったと言う話だ。

男鹿は俺の思ってた以上に不良界隈では有名だったらしい。聞けば起こしていた暴力沙汰のほとんどが売られた喧嘩を買っただけという。そしてその喧嘩を売った連中は口を揃えて『男鹿を倒して名をあげたかった』とぬかしている。はあ…今年入ってきたばかりの1年を倒して名をあげたいとは……聞いてて虚しくなってくる。

とりあえず今日個人面談して見た限りはそんなに悪そうな奴にはみえなかった。そんなに注視しなくても良さそうだ。
それにしても男鹿と聞くとアイツのことを思い出す。

最近授業をしていて思うことがある。
古市　貴之
奴はいい。すごくいい。授業も真面目に聞いていて成績も悪くない。今年の1年は2年や3年に比べればまだ大人しい方だが、その中でも奴はダントツの普通ぶりを発揮している。
幸い古市のクラスは授業を妨害してくるようなアホはいないので教育的指導をしなくて済んでいる。これからもこの風潮が続けばなお良い。

以前俺は男鹿を注視する必要はない的なことを思ってたりしたかもしれないが、あれは嘘だ。男鹿の野郎、学校に赤ん坊連れてきやがった。いや、今まで俺も大概ぶっ飛んだ奴ってのを見てきたが、あそこまでぶっ飛んでる奴は初めて見たかもしれねえ。
それと最近3年の、特に神崎の動きが活発になってきてる。男鹿と神崎……。まあ、何が起きても俺は知らんが。学生のうちは少しはやんちゃしたくなるもんだ。いちい

ちそんなことに目くじらを立てていたらきりがない。

確かに俺は学生のうちは多少のやんちゃはしょうがないと思って目を瞑るが、流石に校舎を破壊するのは許せねえよな？たとえガラス1枚だとしても学校の備品だ。無断で生徒が壊すなんてこと、あっていいわけがねえ。まあ、俺の言えた事じゃないんだけどな。

なんでこんな話をするかというと、とうとう男鹿と神崎がぶつかったらしく、そん時にガラスやらなんやらが破損した。その際神崎が入院もんの怪我を負ったらしいが、それはまあ当人達の責任というものだ。それに関して俺がとやかくいうつもりはない。しかし器物破損はゼッテー許さん。ガラスを割った男鹿と神崎にはそれなりの罰を与えた。つっても、神崎はもう重症だったのでそれをもって今回の件は不問とした。

妙な女に急に喧嘩を売られた。はて、金髪ゴスロリなんて学校にいただろうか。というか今校内の女子は全員いないはずなんだが…。まあこの人生どこで恨みを買ってもおかしくないので適当に対応しておいた。

昔からだが女を相手にするのは苦手だ。だからといって対応を間違えると男子から『贔屓だー！』という声が上がるだろう。……これもこれからの課題だな。

話は変わるが最近校内の男子が妙に浮ついている。あまりにも浮ついていて、授業にすら身が入っていない古市に聞いてみたところ、もうそろそろ『れっどている』が帰ってくるらしい。なるほど、確かに邦枝が学年の女子を連れて遠征していたせいで、男子達は女子に触れ合う機会はなかったな。しかもその『れっどている』の現総長の『くいーん』の良さとやらを熱弁された。適当にそれを聞き流し、一応授業には集中するようにと注意しておいた。

そういえば、姫川の無断欠席が最近続いている。しょうがないので探ったところ、いつの間にか入院していた。とりあえず神崎と姫川の見舞いも兼ねて話を聞きに病院まで行った。その際病室で城山と夏目に遭遇したが、特に驚きはしない。城山と神崎と夏目はいつもセットってイメージだしな。

姫川の話では男鹿にやられたらしい。最初なかなか口を割らないので神崎に聞いたところ事細かく事情を話してくれた。まあ、なぜ神崎が知っているかはおいといて、この事件も完全に姫川に非があるので男鹿のお咎めはなしとすることにした。

そしてここでもやはり『れっどている』が遠征から帰ってくる話題は話されていた。まあ、姫川は以前1度邦枝に言い寄って手痛いしっぺ返しをもらってるから大口は叩けないらしい。神崎も似たようなものだが。

今朝からやけに古市がうるさいと思ったら、れっどているが今日帰ってくるらしい。北関東制圧だかなんだか知らないが、帰ってくるならちょうどいい。割と長い間無断欠席しているれっどているの方々を注意しに行く。

まあ、適当に校内を歩いていたら思いの外早く見つかったので声をかけようとする。が、見たところ大森と下川が今まさにやり合うところだ。とりあえず静観していると案の定邦枝が止めた。

し　か　し　ガ　ラ　ス　を　割　っ　た

一気に頭のネジがぶっ飛びかけたが、反対側の廊下から男鹿と古市が駆け寄ってくるのが見えたのでなんとか抑え込む。

男鹿と邦枝が向かい合う。男鹿が邦枝の突きを躱す。そして

邦　枝　が　校　舎　を　大　破　さ　せ　た

すげえ技を使っていた気がしないでもないがそんなことはどうでもいい。大事なのは校舎を破壊したというたった1つの事実だけだ。これは流石に怒っていいよな。これ以上黙って見ているのは無理だと判断。即説教にはいる。

すこし聞き分けの悪い奴もいたが、口答えはしなかったのでまあいいだろう。

そろそろ夏休みだ。石矢魔の生徒供は大半が年中夏休みモードの自由ぶりだが、それでもやはり夏休みは楽しみらしい。校内中に浮ついた雰囲気が滲み出ている。かくいう俺も夏休みは楽しみだ。普通教師は夏休みも部活の顧問やら学校の書類整理やらで忙しいが、石矢魔に限ってはそういうものは一切無い。あるとすれば少し問題がある生徒の家庭訪問くらいだ。石矢魔で問題のある生徒など、言ってしまえば全員なのだが、その中でも俺や、もしくは校長がピックアップした生徒の下にだけ家庭訪問に行くことになっている。まだ決まってはいないが神崎、姫川あたりには行うことになるだろう。

多分だが家庭訪問の件に男鹿と邦枝が加わる。てか絶対加えてやる。あいつらが喧嘩しようが俺の知ったことでは無いが、立ち入り禁止の屋上で決闘した挙句、またもや器物破損という……。とりあえず立ち入り禁止を破った2人には軽くお説教。地面をバッキバキにした男鹿には少しきつく説教しといた。

”少しきつく”というのは何も贔屓じゃない。奴も校舎を壊してはいけないということはわかっている。しかし忘れてしまう。もしくは突発的にやってしまうのだ。悪気がない以上そこまで強くも怒れないというのが教師というものだ。しかし流石に今回の件は見過ごすわけにはいかないので家庭訪問というわけだ。邦枝の真面目ぶりもよく知っているが、2年になってれっどているに本腰をいれたのか少し不真面目になり

つつある気がしないでもない。

まさかの邦枝がれっどているの総長をやめるという。まあ、だからなんだと言われればそれまでだが。４代目を務めるのはいつも邦枝と一緒にいた大森らしい。奴も俺がよく知る生徒の１人だが、悪い奴じゃない。それを分かって邦枝も大森に総長を任せたのだろう。

しかし４代目か……。随分と代を重ねたものだ…。

ま、とりあえず色々あった１学期が無事に終わる。

何故かは知らないが終業式にはほとんどの生徒が出席していた。俺が石矢魔に着任した時には既に体育館の窓やらドアやらはぶっ壊されていた。そのおかげで冬は寒いがこの時期は通気性抜群で涼しい方である。もし現場に俺がいれば窓を壊した奴の身体を壊してやったものを。

なんだかんだこの１学期は楽しかった。しかしやはり夏休みのほうが胸は踊る。家庭訪問などちゃっちゃと終わらせて後は休みにつぎ込むとしよう。

ちなみにだが、最終的に家庭訪問することになったのは、神崎、姫川、邦枝、東条、男鹿である。

名前は上がったが結局行かないと決定したのは、下川、大森、花澤、真田、阿部……

いや、やめよう。挙げだしたらきりがないことを思い出した。

まあ、要は特に問題を起こしている奴が対象というわけだ。ぶっちゃけめんどい。だが、それが終わればパーリー。何をしよう。海などもいい。山もいい。今から楽しみである

ＶＳ．男鹿

強者が集まるここ石矢魔で、今最も最強の位置に近いと言われている男がいる。
名を佐々木。
東条や大型ルーキーである男鹿を差し置いて何故彼の名が上がるかというと、それは『東条が佐々木に敗北した』という噂にあった。
元々”東条＞男鹿”の力関係で考えていた石矢魔の生徒はもれなく”佐々木＞東条＞男鹿”という構図に考えを変えたわけだ。
実はこの噂、多少の尾ひれは付いているものの概ね事実である。そのせいか今では東邦神姫の勢力に続いて佐々木の勢力ももう既にでき始めている。
これは異例のことであった。
長い石矢魔の歴史上、度々抗争や統一の為の戦いが起こってきたが、それに教師が加わったことは一度もない。当たり前といえば当たり前である。ほとんどの教師は石矢魔で幅を利かせられるほどの実力など持っていない。仮に持っていたとしても教師という役職柄なかなかその力を振るうことができない。
しかし佐々木は違った。あらゆる猛者を拳１つで下していき、今では佐々木一派なる

ものまでで始めていた。
しかし重ねて言うように、これはとても異例なことだ。いくら教師が圧倒的な力を持っていようと、普段の彼らなら教師の下につくなんてことはまずない。
では、何故か。
それは今年に石矢魔に入ってきた大型ルーキー、男鹿の存在が深く関係していた。
強者こそ正義であるここ石矢魔において、何故か彼らは年功序列の意識が高い。男鹿に石矢魔を統一されるのはその理念に背くのである。
簡単に言ってしまえば、年下に占められるのが我慢ならないということだ。
なんてことはない単純な理由。しかしこの単純な理由が彼らが佐々木に下る行動理念となっていた。
1年に従うくらいなら、まだ教師の方がマシだ。
そういうことである。
ちなみに、だが。このことを当人である佐々木は一切知らない。

不良界に、未だ伝説として語り継がれている名がある。ほとんどの不良がそれを知り、恐れ、そして憧れるという名
神龍の爪痕（ドラゴンズクロウ）

数年前、当時最強を誇った不良グループである。
メンバー1人1人が屈強な猛者で構成されており、敗北はなく、すべての敵を圧倒的実力差で蹂躙した。
中でも”四天王”と呼ばれた男達は一線を画して強者であった。
そして、グループとしての名よりも、はるかに知られている名。
【神龍（ナーガ）】。
又の名を【ドラゴンヘッド】。
その名の通り、神龍の爪痕（ドラゴンズクロウ）のリーダーである。
その実力は一騎当千。
拳の一振りで千を圧倒し、
脚の一振りで万を蹴散らす。
その名の由来ともなった背中の3本の傷は最強の証。
当時新進気鋭だったこの男だが、成し遂げた偉業の数々は未だ塗り替えられていない。
そんな彼等だが、今はもう存在していない。不良グループの中ではかなり短命な方だったと聞く。
故に伝説。

この男を超える者は、後にも先にも存在しないと言われている。

ある日、友人が家に何処ぞの赤ん坊を連れてきた。
「河原で赤ん坊を拾った。何を言っているかわからねーと思うが俺も何をしたかイマイチ理解していない。」
「そりゃあれだ。お前が有史以来ダントツの生粋の最強のウルトラスーパーバカだからだ。」
「いや…まあね」
「褒めてねえよ！」
古市としてはこの日は厄日そのものだった。いや、正確にはこれから始まる厄日の連続の最初の日だった。
急に友人……というよりは腐れ縁が赤ん坊を連れて家へやってきた。それならまだ、まだ良かった。古市家の古市の部屋にて男鹿とその赤ん坊について話していたところ、急にその赤ん坊の保護者らしき女が来襲。しかも窓から。交渉、話し合いの余地はなく古市の部屋は大破した。何故だ、と思う暇もなく男鹿と共に逃走。唯一いいことと言っ

たらその保護者らしき女ーーヒルダのパンツを見れたことくらいである。
この日以来、男鹿の異名に新たに『子連れ番長』というのが加わった。
石矢魔の生徒も当初は赤ん坊をつれた男鹿の存在にだいぶ困惑したが、1週間経ってみれば違和感を抱く者の方が少なくなってきていた。馬鹿が良い方向に働いてるのか知らないが、石矢魔の生徒達は順応性が高い。

少しずつ、少しずつだがベル坊の扱いに慣れてきた。と思っていた矢先に盛大な電撃を浴びせられた男鹿。黒焦げのまま登校してきたせいで絶賛不機嫌中である。
また泣かれでもしたらたまったものではないので右ポッケにはベル坊専用ガラガラが入れてある。
男鹿としてはもうこれ以上厄介ごとに巻き込まれたくはないのだが、大型ルーキー男鹿がそんな情けない姿を見せていると知って黙っている石矢魔ではない。
「へっへへー男鹿のガキ、捕らえたぜ」
「案外余裕だったな」
早速事案発生である。
ベル坊が蝶々に夢中になり男鹿から離れた隙をついて、不良3人組がベル坊を人質に

とった。名も知られていない完全なモブ達。
「おい男鹿、少しでも動いてみろ。このガキ、殺すぜ?」
そう言った不良の顔は喜色満面だった。このまま男鹿を倒せると信じ込んでいる様子。
だが、
「おいおい、男鹿をやるのは俺らだぜ?」
「どのみち貴様らじゃ手も足もでねーだろ」
「おっと、俺を忘れてもらっちゃ困るぜ」
そうはいかないのがここ石矢魔。
不幸なことに2年幹部連合と恐れられる竜一、竜二、阿部、下川が男鹿の首を巡ってこの場に集結した。
こうなってしまってはもはや小者の彼等にはどうしようもない。はては男鹿にベル坊を奪還され、そのまま逃げる形となってしまった。
無理もない。ここにいるのは2年生の顔である面々。普通ならば恐れをなして尻尾巻いて逃げるべきなのだが
「なんだお前ら。俺になんか用か?」
鼻をほじりながら、間の抜けた顔で男鹿はそう言った。

その一言で怒り沸点を超えた阿部と下川が殴りかかるが。
「ぐっは」
「ぱぅ!!」
男鹿の腹への一撃によりノックダウンさせられる。
「へー、やるじゃねーかよ。」
「だが、俺らまで簡単にいくかな?」
「つーか、お前ら誰だよ…」
本当にめんどくさそうに男鹿がいう。
男鹿としては今日は喧嘩をする気分ではないらしい。だから阿部も下川も瞬殺したのだが。まだ真田兄弟が残っていた。
ナイフ使いの竜二はナイフを取り出し、敵刺すチェーンソーの異名を持つ竜一はチェーンソーをふかしはじめる。
「ひひ、こいつは弟の竜二。んで俺は竜一ってんだ。ドラゴンヘッドと同じ名前にやられるんだ。あの世で土産話にでも、しやがれ!」
男鹿の前後から挟み撃ちの要領で竜一と竜二が飛びかかる。
見ている誰もが流石の男鹿もやられたと思ったが、
「ドラゴンヘッドと同じ名?·てめえじゃ役者不足だよ」

男鹿が竜一を、ベル坊が竜二を。圧倒的なコンビネーションで下した。
「さーて、帰るか。」
男鹿は何事もなかったかのように去っていく。

少しして、同じ場所にて
「うぅ、ぐっ、男鹿の野郎、次会った時こそ」
「やられっぱなしは性に合わないしね」
やっと回復した阿部と下川が体を起こす。
「おいてめーら、やっと見つけたぞ。」
そんな彼等に背後から声がかかった。
２人はその声にら聞き覚えがあった。顔を見たわけでもないのに２人の顔はみるみるうちに青くなっていく。
そう、彼等はその人物を知っている。
「さ、佐々木…」
ゆっくりと振り返り、そういう阿部

「先生をつけろよデコ助野郎」
に一瞬でチョップが叩き込まれる。
「おめえら、別に俺ぁ喧嘩するなとは言わねーよ。だがよ、もう授業始まってんだよ。おめーらのせいで俺は授業の時間を削られてるわけだ」
汗が噴き出す。2人は腕を組んで佇む佐々木の目を直視できないでいた。
「おら、わかったらさっさといくぞ。って、そこで気を失ってるのは真田兄弟か。ついでだ、奴らも奴らの教室に届けてやるか。」
真田兄弟の首根っこを掴み、下川と阿部を連れて去っていく佐々木。
「そういや、阿部と下川」
再度名前を呼ばれ2人の肩が跳ねる。
「てめーら、なに私服で学校来てんだよ。制服はどうした」
「……いや、その……カレーうどんが跳ねてよ…」
「お、俺も、クリーニングに出してて…」
嘘である。この2人、制服など邪魔と言ってとうに捨てていた。しかし佐々木の前で「制服捨てた」などと言えばどうなるかわからない2人ではない。
「……そうかよ。これからそういうのは予め報告しろ。捨てたとか抜かすようなら半殺しだったが、まあそれならいいだろう。来週までに制服整えとけよ」

「おう……はいっす」
「はい…」
　この次の日、制服カツアゲ事件という事件が起こったとかなんとか。

「決めた。俺よりクソ野郎で強い奴を見つける。そしてベル坊を押し付ける。」
「できるわけねーだろ…」
　先ほど急に現れたおっさん。アランドロン曰く、ベル坊はより凶悪かつ強靭な人物に惹かれるらしい。
　それを聞いてからの男鹿のテンションは妙にハイだった。
「古市馬鹿め。そんなんだからお前の母ちゃんはでべそなんだ」
「でべそじゃねえけどな」
「ここは天下（の不良校）の石矢魔。俺以上に凶悪な奴を探すことなんてわけねーよ」
「……ま、頑張れよ」
　これ以上関わると面倒なことになると判断した古市。即座に撤退を試みる。
「つーことで、いくぞ古市」

「は!?いやちょ、まっ！」
それも無駄に終わるのだが。

「おい、あれ3年の神崎だよな?なんで1年校舎に?」
「決まってんだろ、男鹿を締めに来たんだよ」
「なーる。流石の神崎も男鹿が怖いわけだ」
1・2年校舎にて、やけに目立つ集団が闊歩していた。その姿を見た1年は即座に黙り、存在感を極力消す。
それもそのはず、この集団を仕切っているのは『東邦神姫』の1人である『神崎　一』。目をつけられたらたまったものではない。
故にこそこそ話も極限まで声を抑えて話してるのだが、神崎の横を歩く城山にはしっかりと聞こえていた。
「神崎さん。いいんすか?このまま放っておいて」
「あん?なにがだ」
「いや、1年の男鹿とかいう奴っすよ。最近やけに勢いがあるって話で、このまま野放し

にするのも……」
「あ、俺も聞きました男鹿って奴。なんでも超つええとかで。」
「一発ここらで締めといたほうがいいんじゃ…」
「城山ぁ…」
瞬間、２メートルを超える巨体を持つ城山の顔面に踵落としが直撃する。たまらず城山はその場に倒れる。
「俺が1年坊に負けるとでも言いてえのか、あぁ？てめーらもだ。気合い入れてやる」
次いで先ほど城山に同調した人物を外に放り投げた。窓を割って。

同時刻。
「おーい、せんせー。佐々木せんせー。」
「どうしたよ、急に固まって。因数定理がどうしたんだよ」
「もしかして先生自身が授業内容忘れたとかか？」
「それ笑うわー」
「……わりい皆。この時間は自習時間とする」
「ファッ!?まだ問題の途中だぜ？」
「なんか用事でも思い出したのか先生」

「いや、そういうわけじゃねえんだが。

……ちょっと馬鹿どもに教育しなきゃらならなくなった」

「神崎くんいるぅーー？」

「……俺がそうだが？」

やけに快活な声がここ３―Ａに響いた。見ると入り口には先ほど話題に上がった男鹿が満面の笑みで立っていた。

「君が神崎くんかー」

「神崎さんだ、１年坊」

高圧的に言う神崎。並みのものならその一挙手一投足に恐怖するが、逆に今のその態度は男鹿を満面の笑みに変えた。

その笑みをマイナスのイメージで取ったのか、何人かの不良が戦闘体制に入ろうとする。

が、すかさずフォローを入れる男。

「いやーすみませんねこいつ口下手で！俺ら実は神崎先輩に憧れてまして。この度手下になれたらなーと…」
瞬間男鹿が反発しようとするが、「まずは近づくことが第１優先」と古市が小声で言うと驚くほど簡単に納得した。
「手下……ねて。ククッ、いいぜ。つぇーやつは大歓迎だ。ようこそ３―Ａへ。」
古市としてはもうちょっと何か押し問答でもあるかと思っていたが、神崎の返答は意外にもあっさりとしたものだった。
あまりの無用心さに、逆にこちらが疑ってしまうほど。
しかし仲間に入れてもらえるのなら御の字だ。その後ゆっくり様子をみればいい。
ーー神崎の警戒心がゆるゆるで助かったぜ…
ほう、と息を吐き、とりあえず安堵しようとした古市だったが、
「待ってください神崎さん。俺は反対です」
その行動にストップがかかる。古市は緩みかけた思考を一気に締め直した。
「何を企んでるかわからないような奴らを下に置くなんて危険です」
まともな意見だ。仲間になってくれるのならばこれ以上に心強い奴はいないが、同時にそれは巨大な爆弾を背負いこむことになる。もしこの爆弾が爆発すれば神崎陣営は壊滅的な傷を負うだろう。

「……ならよ、城山。てめーがその男鹿とバトって、勝ったら聞いてやるよ。お前の意見を。」

城山は暫くしてから黙って頷いた。

そして拳を鳴らしながら男鹿の前に立つ。

神崎にこのような危険な男を近づけるわけにはいかない。城山の思考はそれ一色だった。

誰が言ったわけでもなく、戦いはスタートする。

先に手を出したのは城山だった。2メートルの巨漢から繰り出される突きが男鹿の顔面に迫る。

が、

スパァンッ！

男鹿が振り抜いた拳が城山の顎に当たる。

たったそれだけ。その一発で、城山は敗北した。

「すげえな。晴れて俺らの仲間だ。よろしく男鹿く…」

男鹿に近寄り肩を叩いた状態で神崎が止まる。自らの足元を見ると城山がすがりついていた。

「待って…ください。神崎…さん。俺はまだ……負けてない！」

それを神崎は冷めた目で見た後、「立てるか？」と質問した。
「当然です」
そう言って立ち上がった城山に次の瞬間叩きつけられたのは無情な言葉だった。
「んじゃあお前、その窓から飛び降りろ」
これには流石に城山を含めた全員が固まった。
あまりにも酷なその言葉に男鹿の表情が変わる。
「おいおいどうした？やっぱり立つのが精一杯で移動はできねーか。しょうがねーな。男鹿、最初の仕事だ。このデカブツを外に叩き落とせ」
ニヤニヤしながら神崎が男鹿の肩に手を置く。
数瞬の沈黙の末、男鹿がとった行動は。
「お前が飛んでけ」
神崎の顔面に男鹿の右ストレートが入る。そのストレートは神崎を窓を突き破って外にぶっ飛ばした。
外から聞こえる戸惑いやら驚嘆やらの声。
そしてそれは、この教室でも発生していた。

最初に気づいたのは誰だったか…。
コツン、コツン
ーーー硬いものと硬いものがぶつかり合って反響しているような……。
「お……い…。窓…」
神崎の手下の1人がそう言った。その顔に恐怖を滲ませて。
ーーーその音は少しずつ大きくなっていく。
ガン、ガン
「窓? 窓がどうした」
「じゃなくて、窓……割れて…」
「……あ…」
ーーー最初些細だったその音は、次第に近づいてきて、大きくなる。
廊下の奥から、だんだんの迫ってきたその音は、突然に止まった。
そう、ここ3—Aの前で。
「一度しか聞かねえぞ。そこの窓ガラスを割ったのは誰だ」
悪魔が、降臨した。

『さ、佐々木!?』

突然背後からかかった声に３―Ａ全員が入り口から距離をとった。中には身構える者さえいる。

しかし同時に彼らは考える。鬼のような形相の彼は今１番誰に怒っているのかと。それは先ほどの質問にもあった、『窓を割った人物』である。

佐々木は基本的に喧嘩には寛容だ。「学生のうちはそんぐらいしとけ」とは佐々木の談。しかし、これにひとたび学校の備品などが絡むと豹変する。これまで備品を壊して無傷だったやつを見たことがない。

ならば、自分たちは安全だ。ここで一言「男鹿がやりました」と口を揃えて言えばいいのである。

しかし、またこれにも問題がある。それを言うということは完全に男鹿を敵に回すとこと同意義だ。ましてや、彼らは先程の神崎のやられっぷりを見ている。その事実が判断を鈍らせていた。

沈黙する3―A。佐々木はその様子を一通りみると、「そうか」と言って口を開く。
「それじゃあお前らみんな同罪だ。安心しろ。殺しはしない」
『こいつです!!』
佐々木がそう言って拳を鳴らし始めた瞬間3―A全員が男鹿を指差した。彼らは既に後のことなど考えている余裕はなかった。
中心の男鹿は汗だくである。
佐々木の鬼、というかもう般若になりかけている顔がゆっくりと男鹿を向く。
「てめえか…男鹿。」
男鹿は汗びっしょりで沈黙である。それは肯定を意味していた。
「喧嘩結構抗争結構。傷つくのはてめーらだ。その責任を負うのもてめーらだ。俺はそんなこと知ったこっちゃねえ。しかしな、校舎を壊して困るのはてめーらじゃなくて全く関係ないやつらなんだよ。」
と、そこで一区切りつけて佐々木は言う
「話は後だ。まずは反省させる。職員室についてこい男鹿。」
これはもはや死刑宣告だ。確実に無傷じゃ済まない。しかしついていくしかない。3―Aのメンバー達は切実に思う。『よかった勢いに乗じて窓壊さなくて…』と。彼らがもし同じ状況で佐々木に「ついてこい」と言われたら血の涙を流しながら頷くしかな

い。
　しかし
「い、いやだ…」
「……あ？」
　その答えに３―Ａ全員が驚嘆する。男鹿はたった今、この死刑宣告を拒否したのだ。
「嫌だって言ったんだよ」
　男鹿は大玉の汗をかきながらも拒否の意を示す。
「…ならしょうがねえ。力ずくで連れてくしかねえな」
　佐々木が袖をまくる。
「んなあからさまな地獄に、誰がついていくかよ」
　男鹿が構えを取る。といっても型などない適当なものだが。

　いつの間にか３―Ａの外に人だかりができていた。大型ルーキー男鹿ｖｓ．最強の呼び声高い佐々木の戦いは石矢魔生徒ならば誰でも見たがるものである。
　どちらが勝つのか。
　やはり佐々木だろうか。
　いや、男鹿もなかなか。

ところどころからそんな会話が出始める。
誰も彼もがこの戦いの始まりを待ちわびた。

しかし、勝敗は一瞬で決まった。

「ッッラァッ!!!!」
男鹿の渾身の突きが佐々木の鳩尾に綺麗にクリーンヒットする。周りのギャラリーは一瞬遅れて男鹿が佐々木に一撃を入れたことに気づいた。あまりにも速すぎて目で追えなかったのである。
男鹿は内心驚嘆する。
(吹っ飛ばす気で殴ったのに……微動だにしねえ)
数々の猛者を沈めてきた一撃。今放ったのはそれのさらに上位互換である。
「確かに俺はやんちゃはしょうがねえといったが、教師をぶん殴る奴があるか」
「!?!!」
しかし。倒れない。

男鹿の渾身の一撃が、全く効いてない。男鹿は瞬時に距離を取ろうとするが
「!!」
手首をがっしりと掴まれてしまっているせいで離れられない。
佐々木が拳を振り上げる。
「反省しろ馬鹿野郎」
「ガハッ!!」
そしてそのまま男鹿の顔面を殴り抜いた。
壁際まで吹っ飛ぶ男鹿。しかし、その体が激突寸前でピタリと止まった。
「あぶねー、校舎の壁粉々にするところだった」
見ると、男鹿の足を佐々木が掴んでいた。
周りが唖然とする中、白目を剥いた男鹿を佐々木は背負い教室の出口に向かう。が、教室を出る前に佐々木は足を止め、近くにいた古市をみる。
「おい古市。お前はこいつの親友なんだろう」
「というよりかは腐れ縁ですけど」
さまざまな思考が渦巻いている中で佐々木に返答できた古市は流石というべきだろう。
長年男鹿とつるんできたが、その男鹿がこうもあっさりやられるところなど初めて見

た。
「なら古市。最低限でいい。こいつが校舎を壊さないように見張っててくれ」
「はあ……。ま、まあいいっすけど、そいつの手綱を握るのは俺には無理だと思いますよ。」
「なに、完全にやめさせろとは言ってない。ただ、気づいた時に注意してくれるだけでいいんだ。」
「まあ、それなら」
「頼んだぞ」
簡単な言葉を交わし、今度こそ佐々木は退室した。
職員室に向かうまでの道のりで、たくさんの生徒が佐々木が白目を剥いた男鹿を背負っている姿を見た。
この日より、石矢魔の大部分で”佐々木＞男鹿”の勢力図が出来上がった。
しかし、それでも生徒たちは安心できない。
石矢魔の統一に教師である佐々木は無関係。
佐々木の下についている奴等もいるが当の佐々木に統一する気がないのではどうしようもない。
ならば、生徒の中で男鹿よりも強い奴がいなければ……。

生徒達の懸念は続く。

そして、先ほどまでの光景をどこからか眺めていた女が1人。
「あの男。あの強さ。……調べてみる必要があるかもしれんな」
激突は間も無く。

ＶＳ．ヒルダ

尊敬、と言うと少しちがうかもしれない。
その男は唯一、少年が憧れた男。
究極にまで洗練されたその圧倒的暴力は、当時まだ５年生だった少年をいともたやすく魅了した。
万人がその男に立ち向かっていっては綺麗な放物線を描いて殴り飛ばされる。その光景を少年はただただ見ていた。
そして同時に、少年にある価値観が人生で初めて芽生えた。
『かっけえ…』
その男を表す言葉なら数多あるだろう。
「一騎当千」　「天下無双」
しかし少年のその言葉がもっともシンプルにその男の本質を表していた。
今も記憶にこびりついているのは背中の３本の傷。その日から少年は、その傷に『最強』の文字を見出した。

「貴様が佐々木か」

「……はあ…どいつもこいつも…。先生をつけろってんだよタコ助野郎」

ある日の昼下がり、職員室にて2人の男女が対峙していた。男の方は今名前の出た通り佐々木だ。左手に資料を持ち、右手にコーヒーを持っていたことから資料の整理中だったことが伺える。

「んでさっきの返事だが、確かに俺は佐々木であってるぞ。」

とりあえず両手に持っていたものを机に置き、座っていた椅子ごと体を女の方に向ける。

女の見た目は金髪の西洋人がゴスロリ衣装を着ているような感じで、ここ石矢魔でもそうそう、というかまず見かけない格好だった。

「それで？何の用だ。つかお前誰だ。俺が受け持ってるクラスの生徒じゃねえよな？」

佐々木は自分が受け持っているクラスの生徒は全員名前と顔を覚えるようにしていた。しかしこの女は見覚えがない。というか、こんな自己主張の激しい外見なら去年1年間でも受け持ったらまず目につくはず。

ーー1年生か…。

佐々木はそう結論づけた。

「私が誰かはどうでも良いことだ」
対する女はそういうとうっすらと笑みを浮かべる。そして
「重要なのは、貴様が誰かということだ」
「あ？」
次の瞬間には佐々木に肉薄していた。手にはいつの間にか剣のようなものが握られている。
女は自分の剣のリーチに佐々木が入るやいなや、剣を振り上げ上段から振り抜いた。
常人ならば今の一連の動作を目で追うことすらできないだろう。ましてや、かわすことなど。
「おいこら。一体どういう了見だ。場合によっちゃ生活指導が入るぞ」
しかし、振り下ろした先に佐々木はいなかった。すこし体を逸らすことによって女の一撃を完璧にかわしていた。
この時点で、佐々木が常人であるという仮定は女の頭から消えた。
（なるほど。わかってはいたが、この男やはり強い）
女ーヒルダが思い出すのは先日の佐々木と男鹿の一戦。
色々と足らないところはあるが”強さ”というその一点において、男鹿は規格外といってもいいほどのものを持っていた。少なくとも、ヒルダが今まで見た中で男鹿ほど

の実力を持つ人間はいなかった。しかし、それを打ち破ったのがこの男。
男鹿の渾身の一撃をまるで意に介さず、逆に圧倒的一撃をもって男鹿を沈めた。
ーー上限が、見えない。
ヒルダがその時の佐々木を見て真っ先に思ったことである。
そしてそれは、今現在も変わらない。
「っち」
ヒルダは迅速にバックステップを行い、体勢を立て直す。
そして、間髪入れずにもう一度攻撃を仕掛けた。先ほどよりも数段速いスピードから繰り出される刺突。
「おい、まず要件を話せ」
が、当然のごとく回避。これまた体重移動だけで佐々木は逃れていた。
（これもかわすか……。ならば）
ヒルダは刺突のエネルギーをそのまま横への薙ぎ払いに転換した。体の捻りも加え、さらに攻撃のスピードが増す。
ズパンッ！
今度こそ何かにクリーンヒットした感触を覚えるヒルダ。しかし、同時に違和感が芽生える。明らかに手応えが軽すぎる。少なくとも人間を切り裂いた時の重みではない。

急いで振り抜いた先に目線を合わせると、積み上がっていた資料がバラバラと崩れ落ちた。対する佐々木は当然のごとく無傷である。

資料は佐々木の机に積み上がっていたものだ。何枚かは無傷かもしれないが、大半は無惨な状態になっていた。

その光景を間近で見て、やれやれとかぶりを振る佐々木。

「最近の不良ってやつは喧嘩に真剣を使うのか」

もちろんそんなわけはない。いくら天下の不良校である石矢魔でも、喧嘩に真剣を用いたりはしない。まず持っていない。

それでは不良ではなくヤクザの喧嘩だ。というか抗争だ。

がしかし、補足をするならば、真剣を使う輩はいないがチェーンソーとナイフを使う輩ならいる。

「これ以上はやめておけ。学校の備品が壊れるかもしれねーだろ。その紙束の件は許してやるから」

佐々木の机の上の資料くらいなら、また佐々木がプリントすれば済む話だ。それにめんどくさいと思うことはあれど、怒りはしない。

しかしもし学校の備品が先程の資料のように無残に細切れになるということになれば、佐々木は己の憤怒を抑えつけられる自信がなかった。

故の忠告。
しかし。その言葉に対してヒルダは剣を構えなおすことで答えた。
「はあ、石矢魔の生徒ってのはなんでこうも聞き分けがわりい奴が多いんだ…。」
再びヒルダが突進する。三度見たその光景。佐々木相手に、いや、たとえ誰が相手であったとしても、同じ攻撃を3度もすれば流石にパターンがつかまれる。ましてや、今相手にしているのはあの男鹿を赤子扱いする佐々木である。1度通用しなかった攻撃が、3度やったからといって通用するわけがない。そんなことは誰でもわかる。
そう、もちろんヒルダにも。
激突寸前、佐々木の目の前で傘が開く。
一瞬、佐々木の視界は全て傘で覆われた。必然、ヒルダの姿が視界から消える。
そしてその一瞬をついてヒルダは佐々木の左後ろに移動する。
最初の攻防で佐々木相手に真正面からやっても無意味ということは理解していた。それでももう1度同じパターンで仕掛けたのは、全てこの時のための布石。
馬鹿の一つ覚えのように突っ込んでるように見せて、一瞬の意表をつく。
それがヒルダの戦法だった。
（とった…！）
死角からの上段切り落とし。確かに佐々木の反応速度は尋常ではない。どんな攻撃

も見てから対応できる。
しかし、見えていないのなら話は別。反応のしようがない。
故にヒルダは確信した。勝利とはいかないまでも、確実に一太刀はいれられると。
が、その考え自体が甘かった。
「っち、女に手をあげんのは趣味じゃねえんだけどな」
今度こそヒルダは驚嘆で言葉が出てこなかった。かわすのならまだわかる。いや、それでも十分異常だが、勘でかわしたというのならばまだ納得はしないが理解はする。
しかし、この男はどうだ。
人差し指と親指だけで器用に刀を白刃どりなど、人間の所業ではない。つまり、あの一瞬のうちにヒルダの気配を察知し、体勢を変え、自分に向かってくる刃を正確に掴んだということになる。
(バカなっ！あの一瞬でここまでできるはずがない！)
二本指とは思えないほど強固に固定される剣。いくらヒルダが信じられなくともそれが真実。
「はあ、いくら話を聞こうと思っても耳も傾けねえしなあ。」
佐々木がゆっくりと拳を上げ、手を手刀の形にする。
(!?まずい！)

それを見てからのヒルダの判断は迅速だった。咄嗟に剣を離してその場から離脱しようとする。

しかし、

「とりあえず落ち着きやがれ」

異常なスピードで振るわれた手刀はヒルダがその場から離脱するよりも早く彼女を捉える。その手刀はヒルダの剣をいともたやすく折り、そのままヒルダの首へ叩き込まれた。

「ぐっ!!」

メシメシと首から伝わってくる衝撃に、ヒルダはあっけなく意識を手放した。

「さて……職員室片付けねーとな…」

男のつぶやきは、誰に聞かれることもなく職員室に響いた。

「おい、聞いたか?とうとう姫川まで男鹿にやられたってよ」

「もちろんだ。神崎に続いて姫川まで…。男鹿のやつまじに石矢魔とりきてんのか?」

「まさか…。仮にそうだとしても石矢魔にはまだ東邦神姫のうちの2人がいる。邦枝は

神崎と姫川とは別格の強さだし、東条に関しては別次元の強さだ。」
それに、と言って男は付け足す。
「石矢魔には奴がいる。今最も最強に近い、佐々木がな」
「でもその佐々木は石矢魔統一には興味ねえんだろ？大丈夫かよ」
「……こまえけぇこたぁいいんだよ！とりあえず神崎と姫川の入院中に勢力がだいぶ動いてる。俺たちもさっさと身固めねえと…『おい…』っ!?」
突如、喋っていた2人の背後から声がかかる。重くのしかかる低い声。もちろんこの2人にも聞き覚えがあった。というかトラウマになりつつある声。
もう誰かは見当がついている。あとはその答え合わせだ。
己の予想が間違っていることを心の中で願いながら、2人はゆっくりと振り返る。
「さ……佐々木…」
彼らにとっては残念なことに、予想は完璧に的中していた。もはや叫ぶ気にもなれない。そんなことに気を回している場合ではなかったのだ。
即座に自分の身振りを振り返る。ここ最近、佐々木に目をつけられることをした覚えはない。学校の備品を壊したわけでもない。授業妨害をしたわけでもない。
ならばなぜ…
「そこのお前」

「は、ははははははい!!俺!?っすか!?」
思考が答えに行き着く前に中断させられる。
佐々木に指さされた方は半泣き半漏らしで応えた。おまけに何故か敬礼付きで。
もう一方の男はただひたすらに胸を撫で下ろす。
「今、姫川やら入院やらと言っていたな。」
「は、はぁい！言ってましたであります！」
「それはちょうどいい。おい、お前が姫川について知ってること、全て話せ」
「了解であります!!」
男は号泣しながらそう答えた。

「ここか」
先日男に聞いた情報によると、姫川は男鹿に喧嘩を売り、物の見事に敗れ、その時負った怪我で入院したらしい。場所は市でも有名な病院。佐々木は今日そこに来ていた。
詳しく聞いたところによると神崎も一緒に入院中とかで、佐々木は２人ぶんのお見舞いの品をこさえて来た。
「４０２号室です」

受付に部屋番号を聞き、佐々木は部屋へと向かう。

「まじかこりゃ」

部屋番号の下の名前欄を見て佐々木がそうこぼす。まずは姫川の方から見舞いをしようと思ったら、姫川の文字の下にしっかりと神崎と書かれていた。

しかし佐々木は少し考えたあと、何事もなかったかのように扉の取っ手に手をかけた。

要は考えようである。多少びっくりしたが見舞いの手間が省けると思えば気にすることなど特にはない。

室内からは多人数での話し声が聞こえてくる。

どうやら神崎も姫川もそこまで深刻な容態ではないようだ。

扉を横にスライドする。

「よう」

途端に病室に静寂が訪れた。

「さ、佐々木!?」
「な、なんでてめーが!」
　一瞬たって、やっと思考が回復した神崎と姫川がベットから上体をかなりの勢いで起こす。側には夏目と城山もおり、両者とも目をひん剥いている。夏目に関してはなかなか見ない顔だ。
「ん?ああ…。神崎と姫川。お前らが重症で入院しているって聞いてな、見舞いに来たんだが…。元気そうで何よりじゃねーか。教師に向かって『てめー』だの、呼び捨てだのできるぐらいには回復してるらしいな。」
　佐々木の額に青筋が浮かぶ。
　それと同時に神崎と姫川の顔色がみるみるうちに青くなっていく。
「敬語の使い方から教えてやる」
「ちょっ!タンマタンマ」
「ま、まて!いくらだ!?いくら出せば…」
「問答無用」
　２人は頭にチョップをくらった。

『クイーンが帰ってくる?』

「そうみたいなんだよねー。なんでも北関東を制圧し終わったとかで」

夏目の話によると、烈怒帝瑠(レッドテイル)現総長、邦枝　葵ー通称クイーンが近いうちに帰ってくるとのこと。

それを聞いた神崎と姫川の反応は似たようなもので、あまりよくは思ってないように伺えた。

「まあ、お前らどっちも邦枝に負けてるしな」

そう。この2人、以前どちらも邦枝に敗北経験があるのだ。姫川に関して言えば特にひどく、さんざん舐めた態度で言い寄った挙句、手痛いどころでは済まないしっぺ返しをくらった。そのことを細かく知っているのは佐々木だけである。しかし、噂はだいぶ広がっていた。

指摘された2人だが、それが事実であるのと、指摘したのが佐々木なだけあって反論しづらい。というかできないので、お互い気まずそうに目をそらす。

「まあ、奴ら最近ずっと欠席してっからな。そろそろ忠告しなきゃダメだと思っていたところだし、ちょうどいいっちゃちょうどいいな」

「あははー、クイーンに対してそんなこと言えるの佐々木先生ぐらいだよ」

「あたりめーだろ…。俺以外ほとんど教師いねーんだから…」

「そういう意味じゃ無いんだけどねー」と笑って流す夏目。
石矢魔がいくら天下の不良校と言われていても、留年制度や退学制度はしっかりと存在する。出席日数が大幅に欠けるということは、即ち留年の危機を意味していた。
なので佐々木はそろそろ電話してでも忠告しようと思っていたのだが、帰ってくるのならば都合がいい。その時に知らせに行くことに決めた。

「んじゃあ、俺は帰る。お前らもだいぶ回復してきたようだしな。近いうちに復帰もできんだろ」
あれから少しばかり会話し、日が沈みかけてきたところで佐々木は席を立った。
「とりあえずお前ら、戻ってきても問題は起こすんじゃねえぞ。喧嘩結構だが、くれぐれも校舎を壊すことは…」
「わかった、わかったよ！」
何故か殺気が漏れ始める佐々木を神崎は必死で帰らせた。

　その頃、某所にて。
「姉さん。お疲れ様です。これで最後の勢力も潰し終わりました。」
「ふうー、案外大したことなかったわね。寧々もお疲れ様。」
「はい。それで、終わって早々悪いんですが、」
「？どうしたのよ」
「いえ、石矢魔のことで」
「石矢魔か……なんか久しぶりな気がするわね。佐々木先生も、元気でやってるかしら」
「うっ、あの人外教師っすか…」
「寧々は佐々木先生苦手よね」
「ま、まあ。いえ、そんなことはいいんです。問題なんですが、最近石矢魔で幅きかせてる男がいまして」
「……男…？」
「はい、名を、男鹿辰巳と…」
烈怒帝瑠（レッドテイル）が帰還の狼煙をあげる。

烈怒帝瑠、帰還

「石矢魔に女子が、帰ってーーー」
「キタアアアアアアアア!!」
「うぜぇ…」
　男鹿にそんなことをいわれようが知ったことではない。古市は今、廊下を行き来する女子に猛烈に感動していた。
　というのも、古市達が、つまり1年生がこの高校に入学して以来、女子達は全学年纏めて姿を消していたのだ。
　必然、今日初めて古市は石矢魔の女子をめにするわけで。
「ふおおおおお!!」
「うるせえよ!!」
　そして、古市がここまで感動しているのにはもう1つ理由がある。
「だってクイーンだぞ!!石矢魔に入ってきてからずっと小耳に挟んでいたあのクイーン!!大和撫子のクイーンが!今!この石矢魔に!いるんだぞ!」
　そう、烈怒帝瑠(レッドテイル)現総長である邦枝　葵、またの名をクイーンの帰還であった。

入学してからずっと気になっていたクイーン。そのクイーンが今同じ高校にいるとなれば古市のとるべき行動は1つであった。
「よし、見に行くぞ男鹿」
「行きたきゃ勝手に行け。なんで俺がそんな」
「いいから来い！」
「うぉおい!!」
早速実行に移す。思い立ったが吉日である。

クイーンが帰還したという噂は瞬く間に校内を駆け巡り、2年校舎の廊下には一目見ようと多くの生徒が集まっていた。その真ん中を歩くのは葵以外にもう2人、ほぼ側近の寧々と千秋だ。
「ったく、相変わらず胸糞悪いねここは」
朝からずっと不快な視線に晒されて、寧々はかなりのストレスと苛立ちからそう吐き捨てる。実際その視線のほとんどが自分ではなく葵に向いているものなのだが、寧々は逆にそちらの方が何倍も頭にくる。
「気にしないの寧々。こんな奴らにいちいちイラついてたって時間の無駄よ。どうせな

にもできやしないんだから」
　言動からかなり寧々がイラついてることがわかったのか、葵がそう諭す。それにより寧々の気分はいくぶんか落ち着いた。
　しかし、それと反比例するように周りの男共の機嫌はみるみる悪くなっていった。
　普段心の底で女子を見下している彼等にとって、女子が幅を利かせている現状は不快で仕方がない。ましてやその女子に「こんな奴ら」や「なにもできやしない」などと言われて我慢できるはずがない。
　が、行動を起こすものは1人もいなかった。
　普段直情的な彼等がそうまで言われてそれでもなお行動を起こさない。いや、起こせない。それほどまでに関東最強のレディース、烈怒帝瑠（レッドテイル）の名は石矢魔に大きな影響をあたえていた。
　しかし、何事にも例外はつきもの。それがここ石矢魔となれば、なおさらだ。
　ほとんどの男達が何かしてやろうと思い、寸前のところで思いとどまる中、群衆の中から悠々たる足取りで、真正面から葵に向かっていく男がいた。
「やあ葵ちゃん。グッナイ」
　グッドナイト下川の名で恐れられる、2年連合の下川である。葵や寧々とは同級生ということになる。

「……下川…。なんのようかしら？」
「なんのようかとはつれないなあ。ほら、前の約束のことだよ」
前の約束と言われて葵は数瞬思案してみるが、なにも思い出せない。というか、自分とこの下川になにか接点があったかすら怪しい。
「悪いけど覚えてないわ。私なにかあなたと約束したかしら？」
「おいおいおいおい、きっちりしたでしょ。俺と葵ちゃんで勝負して、俺が勝ったら葵ちゃんと付き合うって、さ」
「あぁ!?」
葵と下川が付き合う。それを聞いて真っ先に反応したのは葵ではなく寧々だった。
眉間に何本もの皺ができ、これでもかというほど鋭い目つきで下川を睨む。
「なんでうちの姉さんがてめえみてーな小者と付き合わなきゃいけねえんだ？あぁ!?」
女とは思えないほど低い声と覇気をだす寧々。石矢魔の男でも怯んでしまいそうなその迫力に、しかし下川は平然としていた。
「あー、君は確か寧々ちゃんだったかな？君もなかなかいいけど、残念。嫉妬してくれるのは嬉しいけど俺は葵ちゃんにしか興味がないんだよね。」
キラキラの笑顔で「ごめんね？」という下川に対して、ブチっという音と共に寧々の中で何かが切れた。

「なるほどな。てめーが死にてえってことはよくわかった。こいよ、姉さんが出るまでもねえ。私が殺してやる」
　寧々が自身の武器である鎖を構える。
「ふー、やれやれ。嫉妬もここまでくるとめんどくさいね。」
　対する下川も寧々の喧嘩をかうらしい。
　すこし身構えたあと、両者が地面を蹴る。
　そしてお互いの攻撃が相手に迫り、あとすこしで当たるというところで、２人の攻撃は強制的に中断させられた。
　他でもない、葵の手によって。
「いい加減にしなさい２人とも」
　両者がぶつかる寸前、その間を葵は木刀で一閃した。圧倒的なまでのその速さに、２人は行動停止を余儀なくされたのだ。
「下川、あんたの目的は私でしょ？約束とやらは覚えてないけど、仕方ないから相手してやるわ」
　木刀を振り抜いたままだった姿勢を戻し、葵は硬直状態の下川にそう言った。
「……え。い、いやー。ちょっと今日は急用を思い出したかな。いやー葵ちゃん、今日は会えてよかったよ。いやーほんとね。でも帰んなければならなくなってしまった。

いやー残念だなー。いやーほんとに」

少ししてやっと思考能力が回復した下川はえらくアタフタした状態で後ずさり、踵を返して速足で何処かへ消えてしまった。

「なんなのよ…」と思いながら暫く下川の後ろ姿を見ていた葵だが、姿が消えると寧々の方に向き直った。説教タイムである。

「いい寧々？私の為に怒ってくれたのは嬉しいけど、いちいちあんなのに噛み付いてたらきりがないでしょ？」

「……はい」

先程まで、まるで全てに噛み付かんとする狂犬のようだった寧々が、今はその姿は見る影もない。飼い主に怒られシュンとなっている忠犬のそれだ。

「私達の目的はただ1人のはずでしょ？言ってみなさい」

「男鹿辰巳っす…」

「そう！男鹿辰巳！」

普段ならば、葵は寧々が誰と喧嘩しようと介入するつもりはない。寧々は介入されたことに文句は言わないだろうが、それ以前に介入する意味がない。

しかし、ならば何故今回はわざわざ介入したかといえば、それは今しがた会話に出た通り、「男鹿辰巳」の存在が絡んでいた。

佐々木の存在が男鹿の蛮行をある程度抑圧してはいるが、それでも男鹿が石矢魔に入ってきてから起こした問題は数知れない。それこそ、遠征中だった葵の耳にも届くほどに。

最初は「まあ、生きのいい1年もいるだろう」と考えていたが、日に日に報告される事件の数は増え、先日等々東邦神姫である神崎と姫川が討たれたという知らせが耳に届いた。

そうなってしまえばもはや野放しにはできない。

葵は石矢魔の、主に女子生徒の為に一刻も早く男鹿に制裁を下す必要があった。

「あんな凶悪な男を野放しにしていいはずないわ！一刻も早く見つけ出して…」

固く拳を握り、己の胸中を宣言しようとしていた葵の裾が誰かに引かれる。

見ると、そこには先程まで黙っていた千秋がいた。

「？なに千秋。どうかしたの？」

その問いに対し千秋はゆっくりと手を挙げ、廊下の向こうを指差した。

「男鹿辰巳が来たらしいです」

「なあ!?」

葵の反応は当然のものだろう。自分達が見つけてやると意気込んでいた男が、まさか自ら自分達に挑んでくるとは。これは間違いなく喧嘩を売りにきている。

周りの反応からして、男鹿辰巳が来たというのは本当らしい。
葵はその事実に怒りのボルテージが急速に上がっていくのを感じた。
「へえ、そう。東邦神姫である私を倒そうってわけね。随分なめた1年ね…」
口調は穏やかであるが心中は全くの正反対。
葵は決めた。調子に乗って自分に挑んで来る1年を八つ裂きにしようと。そして、2度と調子に乗れないようにしようと。
神崎と姫川を倒したというのは本当らしいが、事実神崎と姫川程度ならば葵は問題なく倒せる。神崎と姫川を倒して天狗になっている1年ならば、余裕で倒せる自身が葵にはあった。
「上等じゃない！男鹿辰巳！今日があんたの命……日…？」
もうすでにそこまで来ていた男鹿に対し、木刀を突き立て宣言する葵。
しかしまたしても、それは途中で遮られた。
男が2人いるが、子連れ番長という名から判断して、黒髪の男が男鹿で間違いない。なので、そこは問題ではないのだが、問題は……
その男が以前に公園で会ったことがある男と同一人物であったこと。

葵の思考が一瞬止まり、そこから急加速を始める。

（え、あれ。どういうこと？この男が男鹿辰巳ということ？いやまあそうなんだろうけど。えっとどうしようかしら。めっちゃみたことある顔なんですけど。ていうか本当に同一人物？悪い奴には見えなかったけど）

この間普通に１０秒。

葵は噂で聞いた『男鹿辰巳』と自身が公園で会った『男鹿辰巳』の不一致さに混乱していた。公園で見た限りでは悪い奴ではなかった。というか、少しいい奴とも思っている。

故に問答無用で制裁はとても下しにくいのだが、それはそれで問題である。

周りがざわざわとざわつき始める。ここで急に踏みとどまれば、周りからは『男鹿にビビった』と判断されるだろう。そうなってしまえば東邦神姫としての自分の名に傷をつける。それはイコールで石矢魔女子の危険度が上がることにつながる。

そして何より、自分の後ろでは部下である寧々と千秋が不安そうにこちらを見ていた。

もはや引き返すことはできない。葵はそう腹を括った。

「赤ん坊を下ろしなさい男鹿辰巳。それじゃあ戦えないでしょ？」

葵は戦うことに決めた。多少心は痛むが掛かっている天秤の重さが違う。

対する男鹿は急な宣戦布告に対し、慌てた様子は一切なかった。

自分の頭の上に乗っているベル坊と葵を交互に見た後、そのまま構えをとる。
「必要ねえ。このまま相手してやる」
その言葉で葵の中で何かが吹っ切れた。赤ん坊を盾にしているのか、自分を舐め腐っているのか。
どちらにしても、ぶっ飛ばさなきゃ気が済まない。
葵は地面を蹴り一瞬のうちに男鹿に肉薄した。そしてそのまま腹にめがけて突きを繰り出す。常人では動きすら追えない。何もわからぬうちに沈むだけだ。
しかし、
「はえーな」
男鹿は見事に無傷だった。制服であるシャツは破れているが腹にそれらしい傷は一切ない。つまり、ギリギリでかわされたのだ。
(なるほど、確かに強いわね。神崎と姫川をやったってのも納得だわ)
しかし余裕でかわされたのにもかかわらず、葵や戦いを見ている寧々と千秋に焦りはなかった。
(なら、これはどうかしら)
その技で沈むと、確信があったから。
(心月流抜刀術　弐式　百華乱れ桜)

身体中のすべてのバネを使い、縦横無尽の斬撃を繰り出す。それはまるで暴風の中を舞う桜の様に、四方八方全てから襲いかかる。

過去に一度もかわされたことのない葵の技。

寧々も千秋も、この技で沈まなかった相手を今まで見たことがない。

（嘘でしょ…）

故に、信じられない。

（全て……かわしている…）

校舎の壁や床が大破している中で、目の前の男は、どこまでも無傷だった。

加えて制服には、命中はおろか掠った気配すらない。葵も手応えを一切感じていない。

となれば、男鹿が全てをかわしたというのは疑いようもない事実。

「!?」

これには余裕をこいていた寧々や千秋も驚嘆せざるを得なかった。

男鹿は何を思ったか、しっかりとした足取りで葵との距離を詰めた。

葵が咄嗟に構え直そうとするが、先程の一件の衝撃により反応が遅れてしまい、結果男鹿に両肩を押さえられる。こうなってしまえばもう葵に取れる手段はない。

甘くみていた。油断していた。舐めていたのは自分の方だった。

様々な後悔が葵を襲う。
しかし、予想に反して男鹿からの攻撃はなかった。疑問に思った葵は伏せていた目を男鹿に向ける。
そこには、顔面蒼白で葵のやや後ろを見て硬直している男鹿の姿があった。
そこで初めて気付く、周りの異変。
先程まで自分と男鹿を中心に取り囲んでいたギャラリー達が、1人もいない。そして何処と無く感じる、妙な重圧。
葵はこの空気を知っている。この光景をよく知っている。長らく石矢魔を離れていたせいで、すっかり忘れていた。
「覚悟は、できてんだろうな」
この高校には、決して怒らせてはいけない男がいたことを。

その声は、唐突に千秋の背後から響いた。
『!?』
あまりの突然さだったが、流石は葵の側近を務めてるだけあって千秋の反応は迅速かつ正確だった。

しかし、的確ではなかった。
千秋は足のホルスターからエアガンを引き抜く。
「っ!!やめなさい!ちあ…」
咄嗟に制止した葵の声も虚しく、千秋は振り返りざまに正確にその男の顔面めがけて引き金を引く。
千秋のエアガンは改造により、もはやエアガンとは呼べないものにまでなっていた。
法の下にそれはありなのかという疑問はあるが、石矢魔において法などなんの意味も持たない。
秒速２００メートルの弾丸が、男の顔面に向けてまっすぐ飛んでいく。
軌道的には男の眉間を正確に貫くはずのその弾は、
「……また問題児か」
その男に、難なく掴まれていた。
『!?』
「「やめなさい千秋!」」
驚嘆した千秋が己の最高である４丁拳銃へと手を伸ばした時、今度は葵と寧々から叫びにも近い制止の声が飛んできた。伸びかけていた手を、ゆっくりと戻す。
「なんでですか。この男は絶対危険です」

何故自分を止めたかわからないといった様子で、千秋は2人に尋ねる。視線は男から離さないまま。

「そうだった。千秋は1年だから知らないのも無理ないわね。」

そう言ってから葵は体勢を男の方に向け、ペコッと頭を下げた。

「あの、お久しぶりです。佐々木先生」

佐々木。

その名を聞いて千秋の目が見開かれる。

確かに姿は見たことなかったが、名前なら何十回も聞いている。石矢魔において、その名を知らぬ者はいないと言われている男。

カースト制度の外側。実力は最強とまで言われる。

そんな男が目の前に立っている。般若のような顔をして。

「挨拶なんてのは今はいい。それより、覚悟はいいかと聞いている」

そういえば、と、千秋はいつか聞いた佐々木の話を思い出した。曰く、喧嘩には寛容だが、校舎を壊すと一変。人間ではない何かに豹変するとのこと。

視線を葵の方に向けてみればそこには大破した校舎の壁。

ーーこれはまずい…。

千秋は本能的にそう悟った。

「い、いやあのですね。これには訳が」
「んなもんねえだろ。それに、あったとしても関係ねえ。壊したことは事実だ」
拳を鳴らしながら葵へと近づいていく佐々木。そこに、待ったをかける者がいた。
「っ寧々。何してるの」
佐々木の前に立ちはだかる寧々。冷や汗を額に浮かべながら佐々木と対峙した。
「ぜ、ぜってえ。ぜってえ姉さんは殺らせねえぞ！」
「いや別に殺される訳じゃないと思うけど!?」
己を鼓舞するように叫んだ寧々に、佐々木の般若顔がゆっくりと向く。
「ひっ」
これには寧々であろうと怯む。
「どけ、大森。庇い立てすんならてめーも同罪だ」
「っ、やるんなら私を」
「寧々！」
寧々が何か決心しようとした時、横合いから葵が叫ぶ。
「先生、今回の件やったのは私です。覚悟はできています」
「ね、姉さん…」
葵のその言葉に佐々木は無言で応える。そして寧々の横を素通りし、葵の前で拳を構

える。

「これに懲りたら、もうアホな真似すんじゃねえぞ」

そして葵の脳天に拳骨が突き刺さった。

数分後、まだ痛みが取れずに脳天を抑えている葵と、寧々と千秋が正座していた。目前には腕を組んだ佐々木が3人を見下ろしている。

「だいたいお前ら、いくらここが不良校の石矢魔だからって、しっかりと留年制度や退学制度は存在するんだぞ。お前ら、欠席日数かなりやばいからな。」

「「……はい」」

「北関東征圧?それもいいがお前らこのまま卒業できなくていいのか?」

大体の内容は以上の通り説教だ。

3人とも全く反論もできないのでバツが悪そうに目をそらすことしかできない。

しかし、その状況がすこし気に入らなかったのか寧々が口を尖らせて多少の抵抗を試みる。

「別に、私らの勝手だろ。てめーは関係ねギャフンっ」
「佐々木先生だタコ助野郎。」
　しかし一瞬で制圧される。
「何が関係ないだこの野郎。お前らが好き放題校舎壊したり落書きしたりしてんの、いったい誰が直したりしてると思ってんだ？先月なんて窓の修理費半額俺の自腹だぞ。」
「え…」
　先月の話は寧々たちには関係ないが、要は石矢魔の生徒としての話だと佐々木は付け加えた。
「いいか、教師にはお前らガキの面倒を見る義務と責任がある。私らの勝手ってのはな、もっと成長してから言うもんなんだよ。」
「「……」」
「それがわかったら校舎を壊すのをやめるように。それとしっかり出席するように。
　特に大森、お前は少しあぶねーからな。しばらくは毎日登校しとけ。じゃねーと……」
「な、なんだよ…」
「家に電話するぞ」

「ひっ。わ、わかったよ！」

「それがわかったらさっさと授業行け」と言われて３人はそそくさと自分達の教室に戻る。が、その後の授業でしっかりと佐々木と遭遇した。

男鹿ｖｓ．邦枝

最近、石矢魔では所々で奇妙な光景が見受けられる。
「おいこらてめえ、どこみて歩いてやがんだリーゼント」
「あぁ!?てめーがぶつかってきたんだろうがモヒカン野郎」
廊下にてぶつかる生徒２人。相手に道を譲るという思考がないからこそ起きるトラブル。
２人はメンチをきりあい、やがて。
「コロス」
ここまではもはや恒例行事。モヒカンはポケットからメリケンサックを。リーゼントは背中からバットを取り出す。
そしてそのまま激突するかと思われたそのとき、
「いくぜ」
「ああ」
２人は揃って同じ方向に歩き始めた。お互いに警戒することなく、ある特定の場所を目指して歩く２人。彼等はわかっているのだ。お互いが攻撃しないことを。ここで喧

嘩を始めたら、下手をしたらただでは済まないことを。
やがて2人がついたのは校庭だった。
それもなるべく校舎から離れたど真ん中。
そこで2人はやっと武器を構え合う。
「「死ねや！」」
かなりの時間をかけて、2人はようやく激突した。

また、ある時。
「あーまじたりーわ。」
「オメーいつもそれ言ってんな。いっそのこと死ねば？」
「それはあるわ」
「あんのかよ」
階段の前でたむろする不良グループ。東方神起や2年連合ほどではないが、彼等もカースト制度の上位陣である。故に階段を利用しようとする生徒のほとんどは彼等を見て黙って踵を返す。
「次の授業なんだったけか？」
「何で俺がお前のクラスの授業しってんだよ。知らねーよ。俺次の授業サボるし」

そこで授業開始の鐘がなる。
「あ、鳴っちまったー。しょうがねえ俺も今日はサボるかー。次は、確か物理だったっけかー？」
男はそう言いながら呑気に大の字に寝そべる。しかし、周りの男達の表情はみるみるうちに青くなっていく。
「お、おい。お前次の授業物理なのか？」
「あー？そうだけど？何だよお前ら」
流石に男達の表情が気になったのか、寝そべっていた体勢を戻す。
その男を見て、１人が言った。
「お前、物理の担当って……〝あいつ〟じゃなかったか？」
「……え」

空気が、凍った。
厳密にいうとその男の時間だけが一瞬止まった。
しかし、それはほんの一瞬。
己の置かれている状況を瞬時に理解すると、人間の出せる最速を持って男は飛び上がった。

「間に合えええええええええええええ!!!」

余談だが、この時の男の速さは人生で最速だったという。

ちなみに、だが。

「うおおおおおお遅れましたあああああ!!」

「おせーよボケ」

「ぐっはあ!!!」

間に合うことはなかった。

明らかに校舎での喧嘩を避けるようになったり、特定の授業だけ絶対に参加する生徒達。

これらのことは長い石矢魔の歴史をたどってみても初めての事だった。

これらの変化は、一様にある男によってもたらされたもの。

「あー、そろそろ家庭訪問行くやつ絞らないとな」

しかし、当の本人にはまったく自覚がない、それ以前にどうでもいいことであった。

「千秋、どう思う?」
「はい…」
どう思う、とは先程との男鹿の一件のこと。
先日葵が男鹿と闘って以来、葵の様子がどこかちぐはぐだ。牙を抜かれた…というよりかは、牙を使うべきかわからないと言った様子。どうしたのか、と聞いてみても返ってくるのは曖昧な返事ばかり。
葵は男鹿との衝突以来、男鹿という人間に対して改めて考えた。実際男鹿は自分に対して危害を加えたりはしなかった。チャンスはあったのに、だ。その事実が葵を惑わす。本当にこのまま頭ごなしに制裁を下していいのかと。
葵の身に何が起こったかわからない以上、確実に関与しているあの男、男鹿を排除すればいいと寧々は考えた。そこで冒頭に戻るわけだが、葵を抜きにして自分と千秋だけで男鹿と接触し、そこで排除してやろうとした。
しかし対面してみて思ったのは、存外悪い奴ではないのでは、というものだった。結局は闘うこともなかったし、終始男鹿のペースのまま何もできず終わってしまった。
そして一緒にいた千秋は男鹿に対してどう思うかと、先の質問の意図はそれであった。

「悪い奴では、なかったように思います」
やはり、同じ場にいた千秋も同じ感想のようだ。
「少々聞いてた情報と不一致だったのは確かだね。」
入学当初から暴れまわり、既に東邦神姫を2人も下した。まるで石矢魔統一を目指しているかのようなその所業。それはまるで…。
「石矢魔が1年生に統一されたのは過去1度きり、伝説の不良神龍(ナーガ)の手によってだけ。最初男鹿辰巳の噂を聞いた時はまた神龍(ナーガ)のリスペクト野郎かとも思ったけど、どうやらそういうわけでもなさそうよね」
実際寧々が石矢魔に入った当初もそういった輩はいた。それも割とかなりの数で。
止むを得ない事情で石矢魔に入った者以外は、大体は中学の頃にその学校の番を張っていた者ばかりだ。そしてそういった輩は必ずといっていいほど神龍(ナーガ)に憧れている。故に意気込んでくるのだ。伝説の不良が成し遂げた偉業を自分も成し遂げてやると。
しかし男鹿を見る限り、どうやらそれらと同じ系統ではないように思える。
しかし、と寧々は付け加える。
「まだ判断するには早いわ。もしかしたら狡いタイプで本性を隠してるって可能性も」
「その通り」
寧々が言いかけた言葉は何者かのそんな声と、同時に頭部を襲った衝撃で遮られた。

殴られた箇所に強い衝撃、次いで来る鈍い痛みに千秋と寧々は意識を手放した。
「男鹿は極悪人だからなぁ」
薄れゆく意識の中で、そんな声を聞きながら。

まず真っ先に感じたのは後悔。次いで湧き出る、溢れんばかりの怒り。きっかけは必死の形相で自分の所に駆け込んできた、１年生の女子の言葉
「葵姐さん!!寧々さんと千秋さんが……男鹿に!!」
ひたすらに甘かった。目下には保健室のベッドで力なく横たわる千秋と寧々。２人とも明らかに喧嘩の範疇を超えた傷を負っていた。まるで、いたぶられたかのような。
「私のせいだ…」
ーーー私が男鹿と戦うことを避けてさえいなければ。
なんだかんだ言ってもしかしたら男鹿は悪い奴ではないのかもしれないと思っていた先程までの自分を、葵はひどく呪った。
「男鹿辰巳……っ!!!!!」

愛用の木刀を握りしめ、すべての憎悪の対象の名を呟く。そして、葵は駆け出した。
２人の仇をとらんとするために。

あれから十数分後。暴風と共に雷鳴が轟く中、２人は屋上にて対峙していた。
保健室を出た後、葵は校内に張り巡らされた情報網を駆使し、ものの数分で男鹿へとたどり着いた。そして出会うがいなや木刀の鋒を向け決闘の申し込みをしたのである。対する男鹿も断る性分ではなく、思考せずに了承した。
そして今に至る。
「あなた……。あんなにボロボロになるまで、２人に何をしたの」
２人、とは寧々と千秋のことだ。
決して喧嘩だけではつかない傷。何故そんなことをしたのか。そこまでする必要はあったのか。葵の質問は暗にそれを意味していた。
今にも爆発しそうな怒りを抑えながら問う葵。それに対して、あっけらかんと男鹿は言い放った。
「別に。突っかかってきたからテキトーにぶっ飛ばしただけだ。」
瞬間、抑えられていた怒りが許容量を超え爆発。葵の怒り任せの一振りを合図に決闘

のゴングが鳴る。

葵が恨みを晴らすかのように木刀を振るう。対する男鹿はそれらを避ける、受けきるなどはしても反撃は一向にする気配がなかった。

そうしている間にも葵には疲労が、男鹿には痛みが着実に蓄積していた。

もはや終幕は近い。

そう思わせるようなその様子を、少し離れた所で観察しているものがいた。顔面を喜色で染めながら。

「上手くいきましたね美破さん。」

「そうね。まさかここまで上手くいくとは思ってなかったけど、流石私。自分でも惚れ惚れするような手腕だわ～」

美破。と、その部下に当たる碇。

この決闘が始まる原因にもなった先程の男鹿と葵の問答。実はこれには多分な語弊

というか、すれ違いがあった。

葵の質問の『２人に何をした』とは言うまでもなく寧々と千秋のこと。男鹿が寧々と千秋に危害を加えたと、そう信じて疑わなかったが故の質問。

それに対して、男鹿の言った『適当にぶっ倒した』とは、以前衝突した神崎と姫川のこと。男鹿からしてみれば『２人に何をした』と言う質問に該当するのはこの２人だけである。つまりは男鹿は寧々と千秋には何も手を下していないのだ。

ならば、誰が寧々と千秋を必要以上に痛めつけたのか。それは今もなおニヤケ面で戦いを観戦している美破と、その部下のＭＫ５が手を下した。

現烈怒帝瑠（レッドテイル）総長の女王（クイーン）と大型ルーキーである男鹿を衝突させ、機を見て２人とも潰す。これが美破の作戦だった。そしてその作戦も、今まさに終わりを迎えようとしていた。

「破岩　菊一文字!!」

その声と同時に、およそ喧嘩では鳴らないような巨大な音が屋上に響く。

視線を音のした方に向ければ、そこには疲労により片膝をついた葵と、地面に倒れ伏す男鹿の姿があった。決着はついた。そして一拍遅れて屋上に駆け込んでくる姿がもう１つ。

「葵姐さん!!私と千秋をやったのは男鹿じゃありません!!美破です！全て美破に仕組ま

れたことだったんです！」
　急な寧々の登場と、想像もしてなかった事実に葵の思考が一瞬止まる。
「寧々、それはいったいどういう」「その通り」
　状況がイマイチ飲み込めずもう一度寧々に聞こうとした葵にそんな声がかかる。声のした方を見れば、そこには他でもない美破がいた。そしてその瞬間、葵は全てを理解する。自分が完璧に美破の掌の上で踊らされていたことに。
　全く関係のない男鹿を、一方的に攻撃したことに。
「今のあなたなら苦労せずに倒せそうね。全く、自分が勘違いしているとも気づかずに、馬鹿な女ね」
　美破が未だ動けない葵に迫る。咄嗟に寧々が動こうとするが、身体に走る痛みによりその行動は阻害された。寧々とて軽傷ではない。本来ならまだ安静にすべき様態である。加えて、屋上まで全力で駆けてきた寧々の身体はもはや限界であった。
　美破が葵目掛けてゆっくりと拳を振り上げる。手には凶悪なメリケンサックが握られており、くらったら今の葵ではひとたまりもないだろう。
「葵姐さん!!」
「死んでちょーだい」
　寧々の悲痛の叫びも虚しく、美破の拳がふりおろされる。

「死ぬのはてめーだ」

が、その攻撃が葵に当たることはなかった。

突如側頭部に走った衝撃に抗う暇もなく、美破は地面へと頭をめり込ませた。

葵は美破の頭を未だに掴んでいる手の元を辿り、驚嘆する。

そこには、先ほどまで地面に倒れ伏していたはずの男鹿が、ピンピンした顔で佇んでいた。

「お、男鹿!?なん」「ちょっとおおおお!!なにすんのよ!」

「あ?」

葵が疑問を口にするより早く、埋まっていた美破が顔面を起こす。

存外元気そうなその姿に男鹿が意外そうな顔をするが、やはりノーダメージとはいかないらしい。歯は何本か折れ、目には涙が浮かんでいる。

「何なのよあんた!さっきまで瀕死だったじゃないのよ!!だいたい平気だったとしても普通今出てくる!?空気読みなさいよ!」

美破は顔面を起こした勢いそのままに、男鹿に猛抗議を開始する。

「あぁ?何喚いてんだ?」

「ゴフッ！」
　が、再び男鹿によって地面に叩きつけられる。
「ゴラアアアアアア!!まだ人が話してる途中でしょうがあ!!てか私の頭から手放しなさいよ!!髪の毛のセットがみだれちゃゴフッ!!」
「なんだこいつうるせえな」
　そしてまた顔面を起こしては猛抗議。
　以後これを何度か繰り返し、やっと屋上に静寂が訪れた頃には美破は上半身ごと地面に埋まっていた。
「さあ、続けようぜ」
　やっと邪魔者がいなくなった屋上で、男鹿は再び葵に向かい合い再戦を突きつけた。多少の茶々入れはあったが、男鹿にしてみればこれはベル坊を押し付ける一世一代のチャンス。その程度でやめるわけにはいかない。
「私の負けよ…。……いえ、そうじゃないわね。ごめんなさい。」
　が、どういうわけか相手方はもう終わる気満々のようだ。まだまだ続くだろうと意気込んでいた分少々拍子抜けしたが、それでもこの展開は男鹿の望み通りのものだった。
「私、貴方に一方的な暴力を…」
　しかしそんな男鹿の胸中など知る由もない葵は激しい後悔に襲われていた。自分は

今回に関して何の罪もない男鹿を責め立て、挙げ句の果てに無抵抗の男鹿を一方的に痛めつけたのだと。

事実今回の件男鹿は特に何もしていない。側からみれば勘違いした葵が無実の男鹿を一方的に攻撃した構図となる。

しかし、

「じゃあ、はい。」

どうやら勘違いしていたのは向こうも同じらしい。

男鹿が背負っていたベル坊を葵に差し出す。一体何が「はい」なのかわからない。

「えっと……。それは、どういう」

「???いやだって、お前の攻撃耐えきったらベル坊を引き取ってもらうっていうルールだろ?」

葵の質問の意味が逆にわからないといった風な男鹿。当然のことながらそんなルールを決めた覚えはない。しかし何をどう勘違いしたらそうなるのか、男鹿はそういったルールがあると認識していたらしい。

「い、いやいや、なんの話よ。というか、自分の子をそんな引き取らせるなんてどういう要件よ」

「いや、まず俺の子じゃない」

「!?」

これには葵だけでなく側にいた寧々も驚嘆した。いつも連れているあの赤子が実は男鹿の子ではないなど、何か複雑な事情があるのではないかと勘ぐってしまうレベルだ。

しかし、次いで男鹿から放たれた言葉に2人はさらに驚嘆することになる。

「押し付けられて嫌々育ててるだけだ。」

決して嘘ではないその言葉と葵の性格も相まって、葵の中のヒルダの印象は「自分の子供を無理やり押し付けて育てさせる悪女」というものになった。

「このドブ男が。貴様には失望したぞ」

「ああ?」

そしてタイミング良く、捉え方によっては悪く、その場に現れるヒルダ。言うがいなや男鹿からベル坊を取りあげあやし始める。

そんなヒルダを射殺さん勢いで睨みつける葵。

実はこの2人、初対面ではない。最近、いや、本当につい先程。千秋と寧々が保健室に運ばれ、葵の下に報告がいく寸前まで葵はヒルダと試合っていた。といっても、その実葵の実力を知るためにヒルダが一方的に仕掛けたものだが。結果は着かず仕舞いであったが、それでも真正面から突き合った葵だからこそわかる。

――強い……

まだ底が見えない。自分より一歩も二歩も先を行く強さ。葵がここでヒルダに勝負を仕掛けたところで、結果は先ほどの二の舞だろう。こちらの行動を手玉に取られ、じきに、敗北する。

「あなた、そんなことをしてて恥ずかしくないの？」

故に訴える。産んだ責任はないのかと。

「ふん。言いたいことがあるなら実力をつけて出直してこい。」

しかし、ここは法も倫理も通じぬ石矢魔である。いくら葵の言ってることが常識に伴ったものだとしても、石矢魔においてはヒルダの言ったことこそ真理なのだ。

即ち、強さこそ正義。

葵が再び睨みつけるが、ヒルダはどこ吹く風

といった様子でベル坊を男鹿へと返した。

「貴様が傷つくのは構わんが、坊っちゃまにかすり傷の1つでもつけたら、、殺す」

そして、それだけ言い残すとヒルダは屋上から飛び降り、次の瞬間には姿を消していた。

「なんだあの野郎。言いたいことだけ言って帰りやがった」

まるで嵐のように、訪れてその場を荒らし去っていったヒルダ。そのせいで場には再

び沈黙が流れる。
が、それをいち早く破ったのは葵だった。
葵は男鹿を見据えると、再び頭を下げる。
「ごめんなさい男鹿。今回の件、全部私のせい。私の勘違いが招いた結果だわ。」
「いや、別にいいけど。こっちもベル坊を押し付ける気満々だったしな。」
全く責め立てる様子すらない男鹿に、葵は一瞬ポカンとした顔になる。それは寧々も同じだった。
「変わってるのねあなたって。」
そしてその言葉とともに薄っすらと笑みをこぼした。

主犯である美破はボロボロで倒れ伏し、男鹿と葵のわだかまりも消えた。
これにて、男鹿と葵の決闘は幕を閉じた

かに思えた。

ガン、ガン、ガン

一歩一歩、何かが近づいてきている。1歩きごとに、校舎を揺らしているかのような錯覚を覚える。

まるで死のカウントダウンを思わせるそれは、屋上と校舎をつなぐ階段の奥から聞こえてくる。

男鹿と葵、そして寧々の全身から嫌な汗が溢れ出る。ゆっくりと下に視線を向けると、そこには決闘により散々な状態になった地面があった。この時点で、3人は察した。察してしまった。

その間も鳴り続ける足音。そして、

「おいてめえら。随分と勝手なことしてやがるじゃねえか」

その音はとうとう屋上に鳴り響いた。

瞬間の3人の行動は全くといっていいほどシンクロしていた。グギギギと、錆びつい

たブリキ人形のように声のした方を見る３人。
そこには、もはや見慣れるほど見た怒り顔の佐々木がいた。
怒気がオーラとなって吹き荒れる光景を幻視する３人。もはや、逃げ道は残されていない。
佐々木がゆっくり、しかししっかりとした足取りで３人のもとへ向かう。その一歩一歩が、葵達には死の宣告のように感じられた。
「３秒以内に答えろ。この有様は誰が引き起こしたものだ？」
この有様、とはもちろん屋上の破損のこと。
それを聞いて少なからず寧々はホッとする。
屋上の傷は寧々が訪れる以前についたものが大半だ。男鹿が美破を沈めた時にできた傷もあるが、どちらにしろ寧々には関係のないものだった。
が、その安堵もつかの間、すぐに寧々は事の重大さに気づく。
ーーこのままでは、葵姐さんがやばい。
そう、寧々が関与していない言うだけで、なにも葵も関与していないと言うわけではない。これは、寧々にとってかなり深刻な問題だった。寧々にとって葵は自分かそれ以上に大切な存在。しかし現状を見る限り、その葵もただではすみそうにない。他の誰かなら歯向かってただろう。しかし、相手は”あの”佐々木……。

そう思った寧々の行動は早かった。
3人の中から震える足で一歩前に出る。
そして、佐々木の目を見据え口を開く。
「わ、私がや」「寧々」
しかし、寧々の言わんとしたことは葵によって妨げられる。ゆっくりと肩を抑えられ、寧々を下がらせるように今度は葵が前に出る。
「そんなことしなくていいわ寧々。それに、嘘なんてついてもどうせすぐバレるわ。」
そう言った葵は寧々から視線を外し、しっかりとした面持ちで佐々木を見る。
そして
「すいませんでした。」
頭を下げる。
佐々木からはつい最近注意されたばかりだ。それなのにこの体たらく。葵の謝罪の言葉は真に胸の内から湧き出るものだった。
「またてめーらか。何遍言ったら学習すんだ。」
「……すいません」
葵の態度に佐々木はため息をもらす。
そして、横にいた男鹿にも目を向ける。

「おめーも、女が正直に頭下げてんのにいつまでも黙ってんじゃねえ。さっさと名乗り出ろってんだよ。」
「ガッ!!」
　そして男鹿のおでこ目掛けてデコピンを放つ。たかがデコピン。されど”佐々木の放った”デコピンだ。それをもろに受けてしまった男鹿は3メートルほど吹っ飛び、そこからズザーという音を立てながら地面を滑っていった。
　その光景を間近でみていた2人の顔色が瞬く間に青くなっていく。考えたくもないが、次は自分の番なのだと。
「おら、お前も歯食いしばれ」
「っ!!!!」
　そしてその流れで今度は葵のひたいにもデコピンを放つ。男鹿同様真正面からくらった葵は、しかし体を弾かれたように大きく仰け反らせ2、3歩後退するだけにとどまった。
　葵は理解している。頭が割れるほど痛いのには変わらないが、それでもやはり男鹿や他の奴らの時よりは手加減してくれていると。死ぬほど痛いが。
「っ!?てめえ佐々木なにして」「先生、だ」
「……佐々木先生…。姐さんになにしやがる」

若干勢いが削がれたが、それでも寧々は佐々木に噛み付く。
「一応言っとくが屋上立ち入り禁止だから」
「っ!!～～～～っっ！」
が、佐々木の繰り出したチョップを脳天に受け、その場にしゃがみこむ。これも痛いのには変わりないが、男鹿や葵よりは幾分か軽い一撃だ。
「屋上で決闘とかに憧れる気持ちはわかるが、これっきりにしろよ。次はねえぞ」
それだけ言うと佐々木は未だ倒れ伏している男鹿と、地面に突き刺さっている美破と碇を回収。最初より多少軽い足取りでこの場を去っていった。
気づけば、空はいつの間にか落ち着き、雲の間からは光が射し込んでいた。それは、本当の意味で事が終了したことを葵達に感じさせた。

ちなみに、このあと目覚めた碇と美破が佐々木の重い一撃を受けたとかなんとか。

最強の起源

1学期もそろそろおわり。

夏休みが近づいてきたことも相まって校内の雰囲気は学生特有のうわついたものとなっていた。

しかし、そんな雰囲気に釘をさすように、最近また新たな噂が流れ始めた。それも、過去最大級に危険な。

噂の発端はどこからだったか…。

『夏休み、問題の多い生徒には佐々木がじきじきに家庭訪問するらしい』と。

たまったものではない。と、その噂を聞いたものたちは直ちに己の行動を改めた。せっかくの夏休み。自由な時間が増え、学校からも佐々木からも解放される1年で1番楽しみな時期……に、その1番関わりたくない佐々木に会うことになり、さらに家にまで来られるなど最悪もいいところだ。

それからの生徒達はある意味凄まじかった。

たるんでいた生活態度を改め、言葉遣いを改め、心なしか姿勢まで良くなった気がしないでもない。生徒達の行動だけ見ていれば都内でも有数の名高校と言われても違和

感ないほどである。見るものが見れば本当にここは石矢魔かと錯乱するレベルかもしれない。

それほどまでに、彼らは真剣(マジ)だった。謂わば、夏休みまでの期間限定更正プログラムである。

「第一回!何としても自宅訪問避けるべしの会!!」

「またしょうもない…」

ドンドンパフパフと1人で盛り上がっている由加を尻目に、寧々はため息をつく。

由加が突拍子もなく意味不明なことを始めるのは何も今に始まった事ではない。覚えてる限りでも、確か前回は『第一回、万が一校舎を壊してしまった時の謝り方の会』であり、その前は『第一回、万が一校舎を壊してしまった時の逃げ方の会』だったか。毎度毎度第一回なのは、すべての会での結論が「結局無理」に落ち着くからである。

「何言ってるんですか寧々さん!謂わばこの会はウチらの生き死にを分ける今後を決めるものといっても過言じゃないんすよ!」

過言である。と、言いたいが、彼女の顔は見るからに真剣そのもの。冗談の色など含んでいない、正に必死の形相であった。

「だいたい、家庭訪問なんて言われてるけど、それも確固たる証拠ないんでしょ？石矢魔で問題のある生徒なんて挙げたらきりないわけだし、ていうか全員だし、ガセかなんかじゃないの？」

事実、入学した当初は本物の噂に紛れて明らかに嘘が混じったような、根も葉もない噂もまことしやかに囁かれていた。寧々も何度か騙された被害者である。故に今回も多少の疑いは捨てずにガセである可能性を説く。

しかし

「うーん、残念だけど多分今回のはガセじゃないわ。事実、夏休み私の家には来るみたいだし」

その可能性は寧々が、いや、校内の女子のほとんどが最も信用している人物によって否定される。ヒョイっと手を上げてそう言ったのは誰であろう葵だ。そして葵の放った言葉に一気に全員の雰囲気が変わる。

「え、ええ!?何でですか葵姐さん！」

「!?」

「マジかよ……」

「!?姐さんそれ大丈夫なんすか!?」

「ぱ、ぱねえ!!やっぱり噂は本当だったんスよ！」

これにはいつもどこか落ち着いた雰囲気をまとう薫と涼子と千秋も盛大に体勢を崩した。寧々に関しては葵に詰め寄る始末である。

「何でって言われても、この前の男鹿との一件あったじゃない？あの時立ち入り禁止の屋上に入って、尚且つ盛大に地面とか柵とか壊したのが決定打になったらしいの。ほら、私以前から結構やらかしちゃってるから。」

「そ、そんな……。あの鬼が葵姐さんの自宅を……。」

困ったように笑う葵だが、寧々の表情は葵と対比してみるみるうちに青くなっていく。

そして、何を思ったかその顔に決意の色を浮かばせ呟く。

「かくなる上は、なんとかしてあいつの標的を私に……」

「ちょ、ちょっと待ちなさい寧々！」

フラフラと教室を出て行きそうになった寧々を必死で止める葵。寧々は何故かいつも彼が絡むと思考能力が著しく変な方向に働くのだ。何をやるかだいたいの検討がつく葵はとりあえず寧々を嗜める。

「ほ、ほら、私は別に気にしてないから。しかも、結構やらかしちゃったって言ったけど、これでも私1年生の頃はそれなりに真面目だったの。だから多少なりとも信用はされてると思う。だから、大丈夫」

「……はい」

葵の言葉に寧々は納得したように頷く。

「そうっすよ寧々さん！何があろうと葵姐さんは大丈夫ッス！それより問題はなんの信用もないウチらの方っすよ！」

「うーん…」

由加がここぞとばかりに本題に戻す。つまり、何としてでも自宅訪問を避けたいのだと。自宅訪問の件が本当だとわかった今、寧々達としては確かに何としてでも避けたい所存だ。特に寧々は自宅訪問＆親との三者面談などやられた日には完全に終わりである。故に、由加の言ったことを先ほどのように流すのではなく、それぞれ真剣に考え始めた。

「……」

しかし、なかなか案が出てこない。思えば寧々達には単純に情報が足りていなかった。

「……」

次第に眉間にシワがよってくる寧々達。脳内で何か案が出る度に、そのどれもこれもを不可能といって切り捨てる。そして改めて思う。容易な敵ではないと。ここまで烈怒帝瑠の面々を唸らした敵は創設時から見ても稀である。

「……あ」

しかし、そんな沈黙もやがては終わりを迎える。きっかけは、この会の主催者である由加が発した声だった。全員（葵以外）長らく思考に没頭していたせいで、その声は教室によく響いた。必然、由加に視線が集まる。

「出たっすよ。最強の案が…」

期待はしていない……というと嘘になる。由加は頭の弱いキャラとして知られているが、今の由加からは頼もしい何かを感じる。真剣な表情と共に溢れ出る自信に満ちたオーラ。

これはもしや……と寧々でさえ思った。

そう、この全員の期待が集まった状況。それを由加は

「お色気作戦っす!!!」

いともたやすく裏切った。

割と豊富で知られる己の胸を腕を組むようにして最大限強調しながらそう言う由加。しかしそこには色気の”い”の字もない。

これに寧々が大きくため息をつく。

「期待した私が馬鹿だったわ…。大体あんたねえ、相手はあの人間とはかけ離れた人外よ?そんな作戦通用するわけが……」

「……いや」

しかし、寧々が否定的な意見を言おうとした時、それは新たに発せられた声で遮られた。

「割と、効果あるかもしれねーぞ」

「なっ」

淡々と由加に賛同した涼子に寧々が疑問の視線を向ける。それに対しても涼子は淡白に答えた。

「実際烈怒帝瑠のやつらとも普通に話してんの見たことあるし、女子に対しては割と穏和ってのは聞いたことあるしな」

「ああ、それなら私も聞いたことあります」

実際はそんなことはない。ただ、何故か女子の一部が頻繁に声をかけ、それを受け答えているだけなのだ。男子生徒が声をかけてもおんなじ対応をするだろうが、男子生徒はまず震え上がって近付こうともしないのでそれは起き得ない話である。

だからかは知らないが、割と一部の女子では”そこまで怖くない、いや、もしかしたらいい人なのでは”という噂も出始めているとか。

「やっぱり鬼といえども中身は男なんすよ!!こんなリアルＪＫ目の前にしてずっと鬼の皮被ってられるわけないんすよ!」

「うーん、まあ、流石に顔面パンチされたりしたことは一度もないわね。ほら、なんだかんだいってあの人って優しいから」
「つぐ」
　涼子、薫、由加、とどめに葵と畳み掛けられたことにより流石の寧々も口を閉ざす。
「となると、お色気作戦が今の所最善手か…」
　これには全員苦々しい顔をする。確かに最善手。確かに効果はあるかもしれない。しかし、あの人外相手にお色気作戦……。考えただけでも血の気が引く。この場で乗り気なのは間違いなく由加だけだ。
「なにブルーになってんすか！このままじゃウチらの家に悪魔が降臨することになるんすよ!?」
　今まで、これ以上の究極の選択があっただろうか。要は今寧々達が迫られている選択とは、ＪＫという武器を活かしたお色気という名の籠絡作戦を実行し、家に来させるのをなんとか阻止するか、はたまたそれをしないで家に悪魔を降臨させるか、というものである。
「すんません。私はパスで」
　この難題に、意外にも即決したのは薫だった。当然のごとく寧々が反応する。
「え!?あんた、あいつが家に来てもいいってわけ!?」

「まあ、いいか悪いかって聞かれたらそりゃ嫌ですが、うちは別に私が不良ってこと隠してないんですよ。だからまあ、来てもそんなに困ることじゃないかなって。流石の鬼も親の前なら多少は大人しいと思うんですよ」

確かに、と寧々は思う。日頃散々鬼だの人外だの化物だの恐れられてはいるが、それでも行動の節々から奴はまぎれもなく”教師”なのだと実感する。そんな奴が、親の前でも堂々と生徒を殴るなんてことは、ない……はず。多分十中八九きっとないはずである。

しかし、この選択は寧々の取り得ないものだ。親に不良ということを隠している寧々にとっては、そもそも自宅訪問自体が死活問題。バレてしまっては最悪どうなるかわからない。故に、寧々としてはこの作戦に参加するしかない……のだが…。

「つぐ」

なかなかに『やる』とは言い出せない。

「……オレは……やる……」

「な!?」

決断に迷う寧々を追い込むように、次は涼子がそう言う。これにも当然寧々が反応する。

「うちも別にオレが不良ってことを隠しちゃいないが、それでも家に来られるのは……

嫌だ」

言いながら涼子の顔が青ざめる。

「後は寧々さん!!どうするんすか!!」

「ぐっ!!」

寧々は奥歯を噛みしめる。

言うことはもう決まっているのだ。後はこの強情な口が開けば…。

「さあ！寧々さん！」

「グギギギ！」

……

……

……

…

昼休み。

教師にとっても生徒にとっても、午前の４時間という山場を超え、残るは２時間のみ。

今はその間の小休止といったところだ。

しかし、職員室にいる佐々木の手が止まることはない。もともと在籍している教師の数が極端に少ないここ石矢魔において、1人の教師が受け持つ仕事の量はかなりのものになる。

今佐々木が手をつけているのもその仕事の一部。1学期終了に向けての生徒の成績処理である。

「東条は……相変わらずかなりやべーな。陣野は……ふむ、まあ悪くはねーか。」

いつも通りコーヒー片手に作業する佐々木。

誰もいない職員室にただただペンの走る音とコーヒーを啜る音だけが響く。佐々木のかなり好きな時間であった。

が、

「さ、佐々木……先生はいる…いますか」

それは唐突に訪れた来客により中断させられることになる。その声とともに開かれた扉の前には、最近やけに目にすることの多くなったれっどている。その中でも中心に位置するメンバーである千秋、涼子、由加、そして寧々がいた。

「ああ。つか此処にはほとんど俺しかいねえよ。」

佐々木としてはなるべく時間を割きたくない、というのが本音である。しかし、重要な案件である可能性もあるので無下にはできない。

ーーそうだな。考えにくいがこのメンバーなら邦枝に何かあったとかか？

非常に低い可能性ではあるがなくはない。

故に佐々木は一旦作業を中止し、４人に身体を向ける。

対する４人はというと、由加を先頭にし、その後ろに３人が続くような布陣を敷いていた。そして、その布陣を維持したまま佐々木の目の前まで歩いてくる。その不可思議な行動に佐々木の眉間にシワがよる。

「あん？んだよ、要件があんならさっさと……」

催促をしようとした佐々木だったが、その言葉は途中で遮られることとなる。

見ると、佐々木の手に由加の手が重ねられていた。そして畳み掛けるように左に千秋、右に涼子、後ろに寧々が半ば体重をあずけながら佐々木に寄り添う。

「佐々木先生……うちら…」

そして、由加が自らのワイシャツの第２ボタンに手をかけたその時、

「おいお前ら。あんまり奇行が目立つようなら、、、まとめて家庭訪問すっぞ」

凍てつく空気。この瞬間、確かに寧々達の時間は止まった。しかしそれも数瞬のこと。

漸く状況を理解した寧々達４人はというと、その顔を熟れたトマトのように赤くし

「す、すいませんしたあああああ!!」

逃げるように職員室を後にした。
自宅訪問がないとわかって安堵2割、じゃあ自分達がしたことはなんだったのかと羞恥8割で寧々達が撤退したのはお察しである。
「あいつら、結局なんのようだったんだ？」
まあ、察してないのもいるにはいるが。

「おかしい……」
「いや、おかしいのは最初っからお前だ。」
「なんでどいつもこいつも駄目なんだいベル坊君!!!」
男鹿の必死の叫びが校舎に反響する。対するベル坊は目を合わせようとはせず、大きなため息をつくように「ダブ～～」と安定の反応を示した。
「だからいくら石矢魔といえどもお前以上に凶悪かつ強え奴なんていないんだよ」
「まあ……ね」
「いやだから褒めてねえよ!!」
頭を抱える古市とは対照的に男鹿は上機嫌である。もはや予定調和。いつもならここで古市が引き下がって終わりだが、どうやら今日は違うらしい。

「いやー2人は今日も元気だねー」
唐突に2人のやや後方からかかる声。咄嗟に試験を向ければそこにはどこかでみた顔、夏目が佇んでいた。
「……誰？」
「ほら、神崎……先輩と一緒にいた」
「あー」
足音もなく現れた夏目の登場はさておき、男鹿は真っ先にそう言い放った。すかさず古市が説明を入れる。フォロ市である。
「あははは、これでも割とあってるんだけどねー、校舎とかで」
「んなもんいちいち覚えてんのかよ…」
「もちろん。男鹿ちゃんはもう石矢魔でも五指に入る有名人だからね」
有名人？と古市が小首を傾げる。確かに男鹿はルーキーとしてそれなりに名が上がっていたが、そこまでのものだっただろうか、と。
「最近倒した3人いたでしょ？神崎君と姫ちゃんとクイーン。あれ、石矢魔では東邦神姫って呼ばれる4大勢力なんだぜ」
東邦神姫……。そういえば、と、古市は何ヶ月か前の記憶を呼び起こす。確か、入学時に聞いた名だ。それが、あの3人。

「それを1人でまとめて倒しちゃったんだから、そりゃ有名人にもなるよ。これで東条を倒せば、正真正銘石矢魔のてっぺんだよ」
「東条？」
「東邦神姫最後の1人、東条英虎。間違いなく東邦神姫の中で最強は彼だろうね。」
「興味ねーよんなもん」
　男鹿はどうでも良さそうな態度をとるが、やはり最強という言葉に思うところがあるらしい。微妙にだが反応している。
「いやー、でも本当に東条を倒したら、それは偉業だね。なんせ、石矢魔を1年生で制覇したのなんて、今まで【ドラゴンヘッド】ただ1人だからね。」
「ドラゴン…ヘッド」
　しかし、その言葉を聞いた瞬間男鹿の雰囲気が変わる。持っていた空き缶を握り潰し、踵を返してどこかに行ってしまった。
「あれ。どうしちゃったの男鹿ちゃん」
「いや、あいつにとってそのドラゴンヘッドとかいうものは特別なんすよ」
「特別？」
　はてなマークを浮かべる夏目に対し古市は一瞬話そうか戸惑うが、特に問題はないだろうと思い話し始める。

「実はあいつ、昔ドラゴンヘッドに会ったことがあったらしくて」
「へえ？」
古市から発せられた意外な事実に珍しく夏目が目を開く。
「いやまあ、あったと言っても直接顔を見たとか話したとか、そういうことじゃないんですけど」
「？」
「俺も男鹿から間接的に聞いたんで、詳しくは知らないんですけど。なんせ俺と男鹿が会う以前の話なんで」
そう前置きをして、古市は話し始める。
▼▼▼▼▼
男鹿がまだ、クラスで１人浮いていた時の話。
「えーっと、姉貴が言ってたやつはどれだ？」
学校からの帰り道、男鹿は近場の本屋に寄って姉の美咲から頼まれた本を探していた。
携帯のメールと睨めっこしながら指定された名を探す。
「これか」
手に取ったのは『新進気鋭！最強から最弱まで不良グループ１００選！』という厳め

しい本。試しに1ページ目を開くと『１００位！ウルフファング！』というデカデカとした文字の下に、そのグループであろう写真と紹介文が書かれていた。続けて次のページを見てみれば『９９位！ブラッディピエロ！』とこれまた似たような内容。

ーー間違いなく、これだわ。

割と正面にあったためいつもより早く見つけられた。これで今日は蹴り飛ばされることはないだろうと男鹿は安堵しながら美咲の元へ向かう。

「姉貴。これ頼まれてたほ…」

「おせーよ!!!」

「つぐっはあ!!」

しかしそんなことはなかった。美咲が番を張るレディースーー烈怒帝瑠（レッドテイル）のアジトに訪れた途端に蹴り飛ばされる男鹿。普通ならば異常な光景だが、もはや見慣れたレッドテイルのメンバーは特に反応しない。

「ってーな」

この姉弟にとって、これ程度のことはスキンシップの延長線上だと知っているから。

かなりのスピードで吹っ飛んだはずの男鹿が特に応えた様子もなく立ち上がる。

「んで、頼んでたもんは？」
間髪入れず美咲にそう言われ男鹿は舌打ちの1つでもしてやりたい気分だったが、その後起こるであろう惨事を考え思いとどまる。
「ああ、これ」
「ん、サンキュー」
ランドセルにしまってあった雑誌を美咲に手渡す。美咲は適当なソファに腰をかけ、キラキラした眼差しでページをめくり始めた。やや後方から雫と春香が雑誌を覗く。男鹿は特にすることもないので美咲同様近場の椅子に腰を下ろした。
「ああ、そういえば辰巳。お前もう今日は帰っていいぜ」
「あん？」
咄嗟に美咲を見るが、美咲の視線は未だに雑誌に向いたままだ。何気なく発せられたその言葉に男鹿がはてなマークを浮かべる。
「え、お楽しみ会は？」
「だからないって言ってるだろ」
ますます意味がわからない。と、男鹿は混乱する。今まで1度たりとも自分が御使いだけをして帰ったことなどなかったのだ。いつもなんやらかんやらついでにお楽しみ会……改め、喧嘩、あるいは抗争に参加する。

「え、今日は喧嘩しねーの？」
そんなはずはないのは男鹿が1番よく知っている。事実この場にはレッドテイルのメンバーが勢ぞろいしている。この状況で喧嘩がないと言う方が無理があった。
「いや、そういうわけじゃねえ」
「ならなんで」
なかなかに食い下がる男鹿に美咲は短くため息を漏らす。そして、ソファの目の前に置いてあった机に持っていた雑誌を放り投げた。
ページは開かれたまま。必然、男鹿の目にそのページが映る。それは、最終ページだった。
ーー確か、あの雑誌は順位の低い順に乗っていたはず…。
つまり、それが示すことは
「神龍（ドラゴンズクロウ）の爪痕。突如彗星の如く現れ、その実力は最強とまで言われる。未だに敗北はなく、どこまでも底が知れなくて、そして」
室内の空気が引き締まるのを感じた。
「今日のあたしらの相手だ。」
ページに他とは比較にならないほどデカデカと表示される”1位”の二文字。
いつになく真剣な美咲の顔に男鹿は気圧される。

「時間だ。」
呆然としていた男鹿に美咲のそんな声が届く。見ると、レッドテイル全員が美咲に視線を向けていた。
「みんな。今日相手するのは間違いなく〝最強〟。正直、勝負になるかもわからない。けど、」
そこで一旦切り、美咲が大きく息を吸い込む
「あたしら烈怒帝瑠（レッドテイル）の意地、見せてやろうじゃない!!!」
『はい!!』
美咲はうし！っと言って気を引き締め、アジトから出て行く。それを皮切れに続々とレッドテイルメンバーも後に続いた。
「な、なあ！」
「？なんすか坊ちゃん」
今迄に見たことのないレッドテイルの気迫にまたしても呆然としていた男鹿だが、ふと気を取り戻すと近場を横切ったレッドテイルメンバーに話しかける。
「俺も、俺も連れてってくれ！」
「いくら坊ちゃんの頼みでもそれは……。総長がダメって言ってるんで…」
彼女らにとって確かに男鹿は大事な存在だが、それは美咲が総長という前提のもと成

り立つ。その美咲がＮＯと言っている今、男鹿を優先するのはかなり抵抗があった。
「頼む!!ゼッテー参加しねえし、見てるだけにするからよ!」
しかし、だからと言って無下にできるかと聞かれれば、それはこの男鹿の表情を見る限り難しかった。興味本位と片付けるには、余りに壮大な、そんな感情を胸に秘めているような瞳。彼女らはもちろん女だが、この表情、この瞳を知っている。
これは、紛れもなく『男の顔』だ。
「……あたしの後ろに乗って下さい。バレないように最後列につくんで。」
「っ!!さんきゅう!!」
ならば、行かせてやるのが道理だろう。そのレッドテイルメンバーは男鹿にヘルメットを渡しながらそう言った。

目的地に着くのにそう時間はかからなかった。きたのは男鹿の家からもそう遠くはない河川敷。徒歩でくるとなるとかなり辛いが。
ついて真っ先に男鹿は近場の木の陰に身を隠す。そして、レッドテイルが向かい合っているグループに目を向けた。

ーーっ！これが、神龍の爪痕（ドラゴンズクロウ）！

そのグループはレッドテイルと比べて圧倒的に人数が少なかった。レッドテイル自体ルーキーの中ではかなりの数と規模を誇るチームとなってきてはいたが、それ以上に相手方の人数が少ない。数えようと思えば数えられる数である。

「分かってると思うけど気抜くなよみんな!!こんな人数比相手には関係ないと思え！」

向かい合った両者のうち、美咲が一歩前にでて声高々にそう言う。それにレッドテイルは気合の十分に篭った返事でもって答えた。

対してドラゴンズクロウから出てくるものはいない。どこかにリーダーはいないのか、男鹿は密かに視線で探し始める。ここからでは顔は見えないが、男鹿は強者に対しての鼻はそれなりに効いた。

ーー全員、一線を画して強え…。

そこらへんの不良、もしくは男鹿がよく相手をする奴らとは壁を何枚も超えた存在。それが、少数とはいえ1つのチームをなしている。それだけでも十分に恐ろしいことだが、それでもリーダーはさらに異次元の強さを持つという。さっき見た雑誌情報だ。

しかし、

ーーそれっぽいやつが、いない？

男鹿の見る限りこの強者達の中でさらにズバ抜けた存在はいない。未だに前に出て

こないことから判断して、いないのか。はたまた存在自体が嘘なのか。
「っち！行くぜみんな!!」
とうとう痺れを切らしたのか、レッドテイルが美咲の掛け声と共に相手に突撃する。
その激突寸前、ドラゴンズクロウの誰かが呟いた。
「ボスから、今バイト終わったってメールが来た。」
『うおおおおお!!』
次の瞬間にはレッドテイルの怒号により聞こえなくなったが、確かにその呟きは男鹿の耳に届いていた。しかし、意味がわからず整理ができなかった。
しかし、その意味を知るのは意外とすぐだったりする。

１０分ほど経って、戦況は変化していた。
レッドテイルのメンバーが半数になったのに対し、相手方は未だに５人もダウンしていない。それも、全員美咲が沈めたものだ。この人数比で、美咲の男鹿以上の規格外さを持って、未だに劣勢。
ー圧倒的。
実力は噂通り、いや、それ以上だった。

「お前ら、レッドテイルと言ったか？」
男鹿がその光景に呆然としていると、ふとドラゴンズクロウの1人が相手している美咲に対しそう言った。
「あぁ!?なんだ、興味ないと思ってた…よ！」
美咲も会話に応じるが、手は休めない。
「基本的には興味ないが、うちのボスが喧嘩の流儀は破らねえ方なんだ。相手の名前くらいは知らないと、な。」
「へえ、そら光栄なこって」
ーーカツン、カツン
美咲はこの年にしては異常なまでの強さを誇る。しかし、相手は2歳は年上。美咲が押しているにしても、経験の差かなかなか決めきれない。
「いやなに、皮肉じゃないさ。お前らは強えよ。少なくとも今まで戦って来た相手よりかはな。だからまあ、これからに期待だな。」
だんだんと男の捌きが緩くなっていく。
「今日はこれで終いだが、楽しかったぜ。うちのボスの気が向けば、またやろうや」
「あぁん!?なんだあ、白旗あげてんのか!?それともやっぱ舐めくさってんのか？」
ーータン、タン

美咲の渾身のフックが男の顎を狙う。
しかし、
それは男の片手によってスレスレで止められた。
「どっちでもないさ。ただ、事実だ」
ーーガン！ガン！
「最強（ボス）がお着きになった。」
必死になって戦っていたレッドテイルが、美咲が、男鹿が気づいた。なにか、途方もなくやばいのが近づいて来ている、と。
そして、それに気づいた時にはもう遅い。
「おい、俺の相手はどいつだ」
河川敷の脇の道から見下げる男。
ー最強の降臨。
それは、この闘いの終幕を意味した。

瞬間、全員が一様に行動を停止した。そして、ドラゴンズクロウのメンバーは先程ま

での獣の如き闘いが嘘のようにその男の元へ集まる。
ゆっくりと降りてくる男。それをレッドテイルはただただ見ているしかなかった。
「ボス。お疲れ様です」
「そのボスってのやめろ。んで、相手は」
「それなりのものかと」
男はレッドテイルを見渡す。そして、ある人物のところで視線を止めた。無論、美咲である。
「久しぶりに、〝喧嘩〟ができそうだ。」
男が上半身の服を脱ぐ。曰く、正々堂々〝喧嘩〟するのに邪魔らしい。
それに、男鹿を含めたレッドテイル全員の目が開かれる。その行動に対してではない。その背中に斜めに入った龍の爪痕の如き三本の傷が、余りにも勇ましかったから。
半数になり、それでも未だ多いレッドテイルに1人向かう。ゆっくりとした足取りで。
「この場に立った限りは、男も女も関係ねえ。正々堂々相手してやる。」
未だに動けないレッドテイル。しかし。
「なにつったってやがる。さっさとかかってこい。」
『うおおおらあああ』

次の男の一言で、全員の時間が動き出した。
舐めている……などとは言えない。このプレッシャー、このオーラ。
間違いなく、最強。
拳1つが唸る度に砂塵のように吹っ飛ばされ、脚が曲線を描く度に一瞬で意識を刈り取られる。こちらの攻撃は一向に当たらず、向こうの攻撃は一撃一撃が致命的。
これが、神龍（ナーガ）…
戦っていたレッドテイルは龍の如き強さを目に焼き付けながら倒れていった。
ドラゴンズクロウのメンバーが戦っていた時より圧倒的に早いペースでレッドテイルの面々が崩れ落ちて行く。
そして、ものの数分で残っているのは美咲だけになった。
「ハア、ハア」
満身創痍の美咲。対してその男は当然のごとく無傷だった。
「てめーは強かった。楽しかったぜ。」
「お前の…」
男が拳を振りかぶった時、美咲が口を開く。
「あん？」
「お前の、名前は」

多分、これが最後。次の一撃で自分は沈むだろう。その前に、この男の名が知りたい。
それは美咲の切実な思いだった。
対する男はそれに対し薄く笑ったような気がした。
「ーーーーーー」
幕引きの言葉は遠目から見ていた男鹿には聞こえなかった。一撃と共に崩れ去る美咲。

この日初めて、男鹿は美咲の敗北を見た。
そして同時に
「かっけえ…」
無意識のうちにその言葉を呟いていた。
その目に、三本の傷を焼き付けながら。

家庭訪問ｉｎ神崎

ドラゴンヘッドが未だ伝説として語られる理由は、その成し遂げた数々の偉業にある。

幾人がその偉業を再現、または超えてやろうと意気込み、挑み、そして当然のごとく散っていった。

故に、ドラゴンヘッドの伝説は当時からまるで衰えておらず、むしろ時が経つにつれてその規格外さはどんどん広まっていった。

そんな彼の偉業に、一際目立つ物が一つ。不良界ではそのことを知っているのはもはや教養。

その名を『征天の戦い』

ドラゴンヘッドを知る者はまず真っ先にこの伝説を聞き、その尋常離れした話に胸を焦がすという。

それは、まだドラゴンヘッドがバリバリの現役だった頃、ある河川敷で行われた規格外の”喧嘩”である。

唯一にして絶対のドラゴンヘッド、その歴史上ただの1人だけ彼と渡り合った存在がいた。2人の拳は大気を割き、蹴りは地形をも変えた。まるで恐れるかのように川は2人に近づかず、雲は2人を境にして真っ二つに割れた。まるで天までもがその2人に付き従った様。故にその光景から名付けられた名は『征天』

ドラゴンヘッドの相手が男だったのか、女だったのかすらわからないあやふやな噂だが、この噂には確かに目撃者がいるとされており、不良界では不動の真実として語り継がれている。

時が経つのは早く、古市が石矢魔に入学して2度目の式典が今日行われる。所謂、夏休みに入る前の終業式である。

だいぶ石矢魔に慣れてきた古市だが、染まってはいないのでこういった式典には必ず参加する。それが常識だからだ。

しかしここは石矢魔。その常識が通じないところである。例に漏れず今回も入学時同様体育館はスッカラカン……のはずだったのだが。

ーーな、なんじゃこりゃ…。

古市は目の前の光景を見て絶句する。そこには、信じられないものが広がっていた。満員なのだ、あの体育館が。もちろん普通の価値観で言うのならば、それはいたって

普通のことである。しかし、普段の石矢魔の逸脱ぶりを考えると、この光景は異常以外の何者でもなかった。中には眼鏡をかけて髪型を七三分けにしている生徒すらおり、それがさらに異常性を助長している。

何故……とは考えるまでもない。

原因はほんの何週間か前に広まったある噂。

『夏休み、問題の多い生徒には佐々木がじきじきに家庭訪問する』というもの。終業式などくだらないと言ってサボる気満々だった石矢魔生徒は、この噂によりもれなく強制的に参加を余儀なくされたのだ。

それにしてもと古市は思う。またあの人か…と。

視線の先には舞台の上で腕を組み佇む男。無論佐々木である。石矢魔に来て度々常識はずれの体験をして来たが、その全てに必ずと言っていいほど佐々木は絡んでいる。というかもう佐々木が中心と化している感すらする。

「〜〜であるので、みなさんくれぐれも節度を持って過ごすように。以上です」

と、そんなことを考えていたら校長の話が終わったようだ。これで終業式の内容が全て終わり、出口に近い順で生徒が退出し始める。

『家に帰るまでが遠足』と同様、『体育館出るまでが終業式』を実行するが如く列をなし

て退出する生徒たち。
　そして、その足を体育館の出口から踏み出した瞬間
「FOOOOOOOOOOOOO!!」
「自由だあああああああああ!!」
「俺、俺やったよ!!」
「うおおおおキャンパスライフウウウ!!」
　外からの大絶叫。その声は総じて喜びに満ち溢れていた。先ほどまでの彼らはいつもと違いすぎて若干、いや相当気持ち悪かったが、この発言を聞く限りやはり石矢魔生徒なのだなあ…と古市は変に安心する。
　しかし、彼らの気持ちも分からなくはない。叫んだりはしないがもちろん古市も夏休みに心が踊っている次第である。学生であるのならば当然のこと。今から何をしようか計画を立て、その自由度に胸が高鳴る。夏休みが楽しみでない学生などいるはずがない…………
　はずなのだが、
　ーーまあ、何事にも例外はあるわな…。
　古市がふと横を見ると、そこには魂が抜けたように真っ白な男鹿の姿があった。男鹿だけではない。体育館のほとんどは浮ついた雰囲気で覆われているが、そこはかとなく

どこからか男鹿と似たような憂鬱な雰囲気を感じる。
「か、神崎さん！きっと大丈夫っすよ！」
「あー？城山てめえうちの事情知ってんだろ。下手したらあの人外とうちのもんが戦争だぞ」
「いくらだ……。いくら払えば自宅訪問を避けられる……？」

特に死にかけている２人もいるが。
まあ、何はともあれ、古市には関係のない話だ。また隣の馬鹿に巻き込まれるのも嫌なので、古市はそう思い割り切ることにした。
気分を変え、割れた窓から外を眺める。今年もこの季節がきた。
夏が、到来する。

さて、今日から待ちに待った夏休みだが、俺にはまだやるべきことが残っている。
散々問題を起こして来た奴らへの家庭訪問だ。

最初の５日間で神崎、姫川、邦枝、東条、男鹿の全員を回る。
俺はめんどうごとは早々に片付けるタイプなんでな。
っと、時計を見るとそろそろ時間のようだ。初日の今日は神崎の家に行くことになっている。なるべく早く終わるのが理想なんだが。

時計の針がまもなく１２時５０分を指す。いつも以上に秒針の動きがゆっくりに感じるそれを、神崎は深刻な表情で見つめていた。
ーー最悪だっ!!!
そして１人机に頭を打ち付ける。今日は神崎にとって有史以来最も最悪な日と言っても過言ではない。その最悪な日の最悪な時間が刻々と迫りつつあった。そう、神崎がこの世で最も苦手とする存在ー佐々木の家庭訪問である。
本来ならば、最悪には変わりないがもうそろそろ覚悟と諦めがついていい時間帯である。では、何が神崎をここまで追い詰めるかというと、原因は２つ。
１つは神崎の家がヤクザの一家であるということだ。内輪では仁義に厚い彼らだが、外部からの刺激に関してはそれはもう過敏に反応する。そんな彼らと佐々木が衝突した時に起こる化学反応は両方と繋がりがある神崎ですら予想できない。

ーー最悪、両者間の戦争が始まる…。
それだけは何としてでも避けなくてはならない。しかし、それを防ぐ実力が神崎にあるかといえば、ある……とは言い難いだろう。
これが1つ目の懸念。
そしてもう1つ、ある意味神崎にとってはこれが最大の問題。それはーー
「オイ一(はじめ)！急に頭ぶつけてどうした。頭でもおかしくなったか！」
今もなおうざったく背中に蹴りを入れてくる彼女ー二葉の存在である。
知ってはいた。夏休みに姪の二葉がくることは割と早くから伝わっていたし、子供の相手、特に二葉の相手は疲れはすれど嫌悪するほどのことではない。しかし、
「初日からくるなんて聞いてねえぞ!!」
夏休みに姪の二葉が来ると聞いて、まず真っ先に懸念したのは佐々木の家庭訪問と二葉のダブルブッキングである。なので、神崎は早々に家庭訪問は夏休み初日にしてくれと佐々木に嘆願しに行った。そしてそれは了承され願い通り初日になり、これで一安心……と、思っていたのに。
「いきなりでかい声出すなよ！驚くだろ！」
思ってたのと違う……。
目前には脛に蹴りを入れる生意気な姪。

時刻は１２時５４分。……あと６分。

「いいか二葉!!これから1時間!!いや３０分でもいい!ゼッテーにこの部屋から出んじゃねえぞ!」

二葉のじゃじゃ馬ぶりをその身を以て知っている神崎は、二葉と佐々木の遭遇という最悪の事態をなんとか回避すべく二葉に厳重注意をする。

「あー?なんでだよ。これから一と近場の公園いってそこにある遊具独占する予定なんだよ」

もちろんそんな予定など聞いてない。しかしもはや時間もないのでいちいちつっかかることはやめにする。

「わかった!それは後でいって」ピーンポーン

さっさと予定を取り付けてやれば大人しくなるだろうと思い、神崎がその意図を口にしようとした時、絶望を知らせる呼び鈴が鳴る。

「!?」

おかしい。先程までは後6分はあったはずだ。気づかぬうちに6分も経っていたのか。

神崎は思考をまとめる前に咄嗟に時計を見る。

１２時５５分。

（ご、５分前集合だとおおおおおおおおおお!?!?!）

神崎は失念していた。普段の学校生活では生徒を殴るなど常識から外れ過ぎた行動をするため忘れがちだが、〝あの〟佐々木も一応は社会人なのだ。そして、社会人ならば必ず守るマナー。５分前行動。

まさか佐々木がそれをできるとは思っていなかったのが神崎の敗因となった。

二葉が完全に大人しくするという確証が得られるまではこの場を離れたくはなかったが、こうなってしまってはやむを得ない。

「とにかく！部屋から出るんじゃねえぞ！」

神崎はそう言い残し、ダッシュで部屋を後にした。

「こりゃ随分とでけえな。」

神崎家を訪ねて三千里……には到底及ばないが、割と長い距離を経て指定された住所までたどり着いた佐々木は、目前にそびえ立つ豪邸ともいえる家を見てそうもらした。

真正面の門は既に開いていて、その奥に玄関らしきものが見える。横にはでかでかとした文字で〝関東恵林気会〟と彫られていた。

ーーそろそろ時間だな

佐々木は腕時計で時間を確認し、玄関に向けて歩き出す。そして、インターホンを鳴らした。

と、同時に

「おいこらてめえ!!何処の者じゃぁ!!」

「カチコミか!?あぁ!?」

門と玄関の間の空間にある庭、その先から明らかに堅気ではない人間がそう声を張り上げながら佐々木に練り寄ってくる。

「何の用じゃゴラァ!!!」

「単騎で乗り込んでくるとは大分舐めてくれるのお!!」

２人で佐々木を挟みこむように立つ。

言動や身なりからしてこの男達が所謂”モノホン”なのは確実だろう。佐々木より身長は低いものの、全く物怖じしないどすの利いた声で

佐々木を威嚇、というか威圧する。

生徒からのイメージとして、普段の佐々木は謂わば”ニトロ”だ。下手に刺激せず、尚且つ目をつけられず、静かに過ごしていればなんら問題のない普通の教師だ。しかし、一度外部から刺激を与えれば……なんてことはない、即豪腕がとんできてノック

アウトだ。その豪腕はトラウマものだという。
つまり、石矢魔生徒からすれば、両サイドから威圧されている佐々木が次の瞬間には拳を繰り出し、男２人にトラウマを刻むのは必然に思えた。
しかし
「いや、俺が用があるのは神崎武玄」「あぁ!?てめえの狙いはおやっさんかゴラァ！」
特に物怖じした様子もなく、淡々と己の目的を話そうとする佐々木。しかしそれは威圧を放っていた男によって遮られる。
この時佐々木は大体察した。
ーーこいつらは話を聞くような奴らじゃねえ……と。
そう判断するやいなや、すぐさま佐々木は思考を切り替える。
ーー話を聞かねえこいつらと話していてもラチがあかねえ。
ならばどうするか。簡単な話だ。
ーー仕方ねえ。一時的に消えてもらうか。
佐々木が左の拳を振り上げる。そして右にいた男に向かって拳を放とうとした、その時。
「ストオオオオオオップ!!!」
突如として玄関の扉が激しい勢いで開く。

必然、３人の視線がその方向へ向く。
そこには、膝に手をつき息を切らしている神崎がいた。
「はぁ、はぁ、お前ら一体、なにしてやがんだ」
投げかけられた問いは佐々木以外の２人に対してのもの。佐々木に対して”お前”などと言う胆力は神崎には持ち合わさっていない。佐々木もそれを理解している故か口を出さないでいた。
「わ、若!!いえ、こいつが単騎でズンズンとうちの組の庭に入ってきて、尚且つおやっさんに用があるとかぬかしやがるから…」
「カチコミじゃねえかと思いやして…」
神崎の様子から自分たちが何かまずいことをしでかしたと悟ったのだろう。そう言う２人は歯切れが悪い。
神崎はとりあえずまだ深刻な事態にはなっていなかったと安堵し、事情を説明しようと一度息を吐いた。
「あのなぁお前ら」「その必要はねえよ」
しかし、その声は突如として神崎の背後から響いた声により遮られる。声の主など、姿を見ずともわかる。この組において１番の影響力を持つ者。
「「おやっさん!!?!!」」

神崎武玄、関東恵林気会の組長その人が立っていた。すぐさまかしこまる2人。
「おめえら。その人は一の学校の先生で、儂の客だ。無礼を働くことは儂が許さん。わかったらほれ、早く行かんか」
武玄が手であっちに行ってろとのジェスチャーをする。2人は一瞬戸惑うも、佐々木に一礼してからそそくさと戻っていった。
「先生。うちの若い者が無礼を働きやして、すいません。とりあえず上がってください」
流石の威厳、の一言に尽きるだろう。立ち込めるオーラは確かに武玄が1つの組織の上に立つ存在だと納得させる。似たような経験を持つ佐々木は一瞬でそれを見抜いた。
が、神崎（はじめ）からすれば、父のこの堂々たる振る舞いは全て姪の二葉、つまりは武玄の孫の手前カッコつけているだけに見えている。
事実を言えば確かにこのオーラは武玄が本来持つものであり、それに飾りなどはないが、そこに『孫の前でのカッコつけ』というブーストがかかってないといえば嘘になる。
要はハリキリおじいちゃん状態なのだ。
「いやー先生、改めて先ほどはすいませんした。昨日のうちに集会で先生のことは組の者全員に伝えたはずなんですが、奴らは少し先走るきらいがありまして」
「いえ、お気になさらず。」
リビングにつき、中央においてあるソファーに座る3人。テーブルを挟んで武玄と

佐々木が向き合う形だ。無論神崎（一）は武玄の隣である。
「早速ですが先生、今日はどういった要件で」
座ってから少しの間、お茶と茶菓子を手元に少しばかりの談笑をし、本題に入る。
「はい、実は一君の卒業についてなんですが」
（その話題が来てしまったか）
横でただひたすらだんまりを決め込んでいた神崎がその内容に反応する。神崎としてはあまり触れて欲しくない案件だ。
「先生、一の卒業は……その、危ないんですかね」
「いえ、今のところはまだ平気です。しかしこのペースであと2学期過ごされますと、、残念ながら息子さんの卒業は期待できないかと」
「一、お前そんなに学校休んでどこいっとるんじゃ！多少のやんちゃは家系がら止めはせんが、卒業はしなさいといってるじゃろ！」
「お父様、一応私は教師ですので目の前で堂々その発言は困ります。しかし、確かにそれは私も気になります。プライベートに首突っ込む気はさらさらありませんが、あまりにも欠席が多い、それも親にも伝えていないとなるとそれほどの頻度でどこに行くかは聞いておきたい。」
両者からの圧がかかる。どちらも芯にあるのはかなり似通っていると言っていい。

武玄は自分がヤクザという立場から、佐々木に関してはよくわからないがこの２人は学生のうちのやんちゃ、というか素行の悪さには理解がある。しかし、

ーーい、いえねえ!!学校サボってメダルゲームにふけてるなんて言えねええ!

かなりしょぼい理由なのだが、それでもこの空気で言える内容ではない。

「……」

なので、神崎はただ黙して耐える。普段の石矢魔での神崎を知る者が今の神崎を見たら目を丸くし口をあんぐりと開けるだろう。

普段の威厳というか圧は見る影もなく、そこには２匹の蛇に睨まれた１匹のカエルがいるだけだった。

「むぅん。先生、これ以上待っても…」

「そうですね。まあ、私は残りの期間しっかり学校に来ていただければそれで結構ですし、これ以上の追求は止めておきましょう。」

緊張を解く２人。それに神崎は内心でガッツポーズをする。

（ククク…。なんかよくわからねえが乗り切っちまえばこっちのもんだ。なんだ、佐々木が来るからもっとやべえかと思ったが、黙ってれば終わる話し合いで案外ちょろかったぜ）

完全に勝ち誇る神崎。二葉も現れないしこれで佐々木が帰ってくれれば何ら問題は

ない。

（遠路はるばる来てもらって悪いが、話し合いはしめーだ。とっとと姫川のところでも行きやがれ）

駄目だ、まだ笑うな。心はそう言うが頬が若干吊り上がるのを感じる。後は黙っていれば勝手に話し合いが終わるだろうと思い、神崎が顔を上げたその時、

スー。

神崎の正面、佐々木の背後にあった襖が静かに開く。佐々木と被っているせいでしっかりとは見えないが、今度はその襖が閉まる。

いくら佐々木の身長が高いとはいえ、あの襖から大の人間が入ってくれば顔は見える。

誰かが襖をただ開け閉めしただけとも考えにくい。

もし犯人がいるとすれば、それは幽霊か、または、あまりにも低身長すぎて佐々木に被って入って来るのが見えなかったか。

神崎の心当たりは1人しかいない。

（ふ、二葉が……。二葉が入ってきやがったあああああああああ!!）

例えるならB級パニック映画である。反射的に立ち上がってしまいそうになるのを必死で止める。

（落ち着け！落ち着いて餅つけ！なぁに…心配はいらねえ。どのみち佐々木はもう帰るんだ。鉢合わせしたところですぐに帰らせりゃ無問題よ）

そう、どのみち話し合いは終わりなのだ。じっとしてれば嵐はすぎる。と、神崎はそう淡い期待をしていた。

が、

「では、もう一つ。私にとってはこれも同じくらいに重要な話なのですが」

「なんでしょうか」

（まだ続くのかよおおおお!!）

その期待はあっさりと折られる結果となった。佐々木が醸し出す明らかに”これが本題なのですが”という雰囲気と、武玄が出す真剣な雰囲気。それはこの話し合いが長引くことを神崎に確信させた。

「実は息子さんは以前から問題ばかりを起こしていまして、これについてお父様と少しお話がしたく。」

「なるほど。確かにこいつは昔っから小中と問題ばっかり起こしてます。しかし先生、儂はこうも思うのです。大人になったら自由より圧倒的に縛られる時間の方が増える。こいつらが自由にできるのは子供の今だけなんです。だから儂はできる限りヤンチャな部分は寛容でいてあげたい。まあ、儂が昔そうだったてのもあるんですがね」

「それについては私も同意見です。このくらいの歳では色々とやりたいこともあるでしょう。なので私もそこらへんはできる限り寛容でありたいとは思うのですが、それが周りに迷惑をかける行為ならば容認はできません」

「迷惑をかける行為、ですか？」

武玄の目つきが鋭くなり横にいる神崎を見る。対する神崎はどこから二葉が奇襲を仕掛けて来るか気が気でそれどころではない。

「例えば喧嘩ならば、それはお互い反りが合わないということで発生するものであり、拳で解決するのも私的には構いません。時にはそういうのが必要なこともあるでしょう。しかし、例えば校舎破損、例えば善良な生徒へのカツアゲやいじめは全く関係のない人が被害を被ることです。息子さんの場合は校舎破損に当たります」

佐々木が色々言っているが、神崎は視線を動かし二葉を早急に発見することに尽力する。

そして、それは唐突におこった。

佐々木の座るソファーの少し横、神崎だけが見ることのできるその位置にヒョコっと小さな手が覗く。次いで出てくる、見覚えのありすぎる顔。

二葉が、とうとう現れてしまった。

（ふ、二葉あああ!!よりによってなんで佐々木（そいつ）の横にいいい!?今ならまだバレてない

！いいか二葉！ゼッテーそいつにだけは手出しするなよ！）

触らぬ神に祟りなし。なんとかその旨を二葉に伝えようと神崎は佐々木と二葉を交互に見る。そして武玄と佐々木から不審に思われない程度に目を動かし、視線で帰れと二葉に指示を出す。

それをポケーという表情で見ていた二葉は唐突に表情を引き締める。そしてしきりにコクコクとうなづき始めた。

（おおお！わかってくれたか！よし、あとでたくさん公園の遊具独占に協力してやろう）

二葉はそのまま神崎にグッと親指を立ててサムズアップする。完全に安心しきった神崎。しかし、神崎がほっと胸を撫で下ろそうとした瞬間。

サムズアップしていたはずの親指がそのまま二葉の首に向かう。そして、二葉はカッと首を掻き切るようなジェスチャーをした。

任せろと、そんな声すら聞こえてきそうなほど自信に満ち溢れた表情。

（ちげええええええ!!!誰もそんなこと頼んでねえええええ!!）

神崎の必死の訴えも二葉には通じない。

シュタッと地面に降りたかと思うと、次の瞬間には佐々木の頭上に飛び上がっていた。

必然、神崎だけでなく武玄の視界にも二葉が映る。咄嗟のことにフリーズする武玄。

しかしそれもつかの間、すぐさま声をかけようとする。
が、
神崎が止めるより早く、武玄が声をかけるより早く、二葉の一譲りのかかと落としが回転を伴いながら佐々木に直撃するのは明白。
二葉がやらんとしていることはニトロに刺激を与えるようなもの。結果は必然、大爆発である。
ーー終わった。
神崎が全てを投げ出し、諦めかけた時。
直撃のその寸前、二葉の蹴りと佐々木の頭の間に急遽割り込む物があった。
パシッ
「おうガキンチョ。今大事な話してるから邪魔しないでくれるか」
明らかに死角からの攻撃だった。音もなかったはず。しかし、二葉の攻撃は佐々木の手によって遮られた。そのまま足を掴まれ佐々木の目の前までクレーンゲームのように運ばれる二葉。
と、そこでやっとフーリズしていた武玄が再起動する。
「ふ、二葉ちゃん!!」
「お孫さんですか。なるほど、初対面の人に急に踵落としとは、よほどやんちゃな子みた

いですね」

そう言いながら二葉を武玄に渡す佐々木。技を止められたのが余程衝撃だったのか、二葉は”?”という表情を浮かべたままされるがままになっていた。

「す、すいません。そうです、この子は儂の孫の二葉。コレ二葉、初対面の人に蹴りを放っちゃ駄目じゃろ。なんでそんなことしたんじゃ」

初対面じゃなくとも基本的に人に蹴りを放つのは駄目である。しかし、この場にいる全員そこに疑問を覚えるものはいなかった。

「あ? いやだって一が目配せしてきたんだよ。こいつを殺れってな。」

ふん、と胸を張る二葉に対して、神崎は突如落とされた爆弾に気力を持ってかれていた。

(とんでもねえ飛び火の仕方しやがったぞ!!)

「なるほど、つまりこれは神崎くんの指示だと」

佐々木の眼光がこちらへと向く。

これは神崎からしてみれば由々しき事態だ。

ただでさえ神崎は学校での数々の蛮行により佐々木に目をつけられている。今日もそれ故の家庭訪問だ。それらに加えて姪に佐々木を攻撃させようとしたなどというありもしない事実まで追加されたら……。

考えるより先に佐々木に弁明を試みる。
「い、いやいやいやいや!!俺はそんな指示出してねー!二葉!てめーが勝手に勘違いしただけだろうが!」
「あん?こいつと私を交互に見て鋭い眼光で睨みつけてきたじゃねーか。」
「そ!れ!は!邪魔だから部屋に帰ってろって意味だったんだよ!」
「フーン、ややこしい指示出すなよな」
(こいつは……!)
鼻をほじりながらどうでも良さそうな顔をする二葉。お前のせいでやばい状況なのにそれはないだろうと神崎は思う。しかし、今は二葉より気にすべき存在がいる。
なおも鋭い眼光を向けてくる佐々木だ。
しかし、その佐々木もやがては視線を武玄の方へと戻す。
「まあ、神崎君の意思っていうのは少し考えづらいですね。」
佐々木がそう言ったのと同時に、室内の空気が少し軽くなったふうに神崎は感じた。そして、今度こそ訪れた平穏に無駄をなでおろす。
(の、のりきったあああああ!)
一番危惧していた二葉と佐々木の接触。しかし乗り切ってしまえばもう他に心配すべきことはない。あとはまた黙りこくっていれば全てが終わる。

完全勝利。
その４文字が神崎の頭によぎる。
が、
「それで、話がそれたが。一、お前学校で関係ない堅気にまで迷惑かけとるらしいの」
「え」
「それもお子さんの場合はかなりの頻度になりますね」
「ちょ」
「お前……。堅気には迷惑かけるなといつも言っとるじゃろうがあああああああ!!!」
久しく見ない武玄の大激怒。その迫力に流石の神崎もたじろぐ。
この後、佐々木の無言の圧力にさらされながら、武玄による説教は１時間にも及んだという。

家庭訪問ｉｎ姫川＆邦枝宅

「おい、これは一体どういうことだ」

広々とした室内にやけに重みのある声が響く。その声を姫川は額に大量に汗を浮かべながら受け止めていた。

夏休み２日目。大半の学生がエンジョイしている中、何故自分だけと姫川は思う。場所は某所のタワーマンション。その一室にて、姫川は佐々木と一対一で対峙していた。

机を１つ挟んで向かい合う。両者の距離は１メートルもない。当然、佐々木からの圧がダイレクトで伝わってくる訳で。

「……」

姫川は目を合わさず佐々木の顔のやや下に焦点を合わせていた。

「はあ。お前趣旨理解してんのか？家庭訪問てのは生徒を交えて親と三者面談することを言うんだよ。わざわざ学校に来てもらうのが申し訳ないからこっちから出向くんだよ。」

「……」

「それがお前、親どころか保護者も同席しねえって……、これじゃあ学校でお前と面談す

るのと一緒じゃねえか。」
　そう、今この室内には、いや、この家には佐々木と姫川の２人しかいない。姫川にとっては地獄のような状況であり、佐々木にとっては無意味な状況である。即ち、誰も得をしない。
　しかしこれは当の姫川からしても想定外のことであった。というのも、元々は姫川の父親もこの日はフリーにしていた。しかし、流石は大財閥の統括。その身はもちろん多忙を極める訳で、前日の夜に姫川に「すまないが明日は行けそうにない」という旨の電話が入った。
　所謂ドタキャンというやつである。普通の社会人ならばかなりの粗相だが、なにぶん姫川の両親は普通とはかけ離れているため、しょうがないといえばしょうがない。
「っち、まあいねえもんはしょうがねえ。うだうだ言うのはやめにするが。」
「親父から謝礼金を渡すようにと言われた。好きな額を言ってくれ」
　言うと同時に姫川はテーブルの上に２０センチはあろうかという札束を乗せる。姫川のなんでも金で解決しようとするところは明らかに親譲りであった。そこらのサラリーマンの平均年収を優に凌ぐ額。公務員とは言っても年功序列制の教師で、なおかつ若手の新人とくれば喉から手が出るほど欲しい額。さらに要求すればこれ以上の額を出すと言う。なかなかない、いや一生に一度もないその機会を佐々木は

「いらねえよ」
一瞥しただけで断った。これは『金が全て』を信条としている姫川には理解できないものであった。たまらず姫川がソファから立つ。
「はあ?い、いらねえって、いくらあると思ってんだ!いや、いくらでも出すって言ってんだぞ!」
「関係ねえよ。世の中には金で買えねえもんがある」
そんなものはないと、姫川は声を大にして言いたかった。しかし、こちらの目を真っ直ぐと見据える佐々木の眼光に一瞬怯む。
「だ、だとしてもだ!あって困ることはねえだろ!」
佐々木の意見を肯定したとしても、イコールで目の前の金がいらないと言うことには繋がらない。ゆえの反論。
「確かにな。だがそれは、その金が自分のしたことに対する対価ならの話だ」
「……っ!」
「俺の働きに対して付けられた値が高すぎる場合には喜んで受け取るさ。それが相手方が示した俺の価値だからな。だが、今回の場合はどうだ。こんな押し付けられたに等しい金、俺はいらねえよ」
きっと佐々木は、これまでもそう生きてきたのだろう。その瞳には揺るぎない意志を

感じた。これには流石の姫川も口を閉じた。当然である。全く価値観が違うのだから理解できはずもない。姫川はまだ金で買えないものなど知らないからだ。

戸惑う姫川に佐々木はそれにと付け加える。

「金なら昔やってたバイトのおかげで腐るほどあるしな。あれがなかったら流石に俺の給料だけで石矢魔の修繕費は補うことはできねえ。」

「……バイトやってたのか」

姫川にとって佐々木がバイトをしていたというのはかなり意外だった。制服を着てコンビニバイト、ファミレスバイト、喫茶バイト、色々考えてみるがどれもこれもが全く佐々木のイメージと合致しない。というかまず接客業は無理だろう。今教師をやっているわけだし、バイトも家庭教師とかだろうかとも思ってみたが、一対一で佐々木のこのプレッシャーを受けきれるものがいるわけないのでそれも却下。

「なんだよ。俺がバイトしてたのがおかしいってツラに書いてあるぞ」

「……いや…」

いや、とは言ったものの態度から滲み出る明らかな肯定。佐々木はそれを瞬時に見抜く。

「俺にあった割りのいいバイトだった。別に人と接するのは苦手でもねーし嫌いでもねーが、四六時中笑顔振りまくような仕事は俺には向いてねえ。」

これには姫川も全力で同意する。四六時中笑顔を振りまくどころか、笑ってるところさえも見たことがない。そんな佐々木が最低限の笑顔を必要とする仕事など、できるはずがない。

「……の割には、身につけてるものはあんま高価に見えねえが…」

金は腐るほどあるとは言うものの、見た目にそれが反映されていない。お家柄ブランド類にはだいたい精通している姫川から見ても、佐々木が身につけているものはいたって普通の庶民的なものであった。

「まあな。もともと服装やらなんやらは気にしねえタイプだからな。金はいざって時しか使わねえよ」

金はあるのに良いものを着ない、身につけない。何故……とはもう考えるまでもない。つくづく姫川と佐々木の考えは正反対だが、もう姫川はそれを心の中で頭ごなしに否定しようとはしなかった。

「そういう考えも……あんのか…」

初めて触れる概念。まだまだ姫川には理解できないことだが、それでもそういう考えもあるということだけは知っておこうと姫川は思った。

それからは特に雑談することもなく、ある程度の時間が過ぎた。

「んじゃ、長居しても仕方ねえし俺はそろそろ帰るぞ」

「あ、ああ」
時計を見れば1時間も経っていない。その割には姫川には濃密な時間に感じられた。
「これじゃあお前と学校で面談すんのと同じだ。とんだ無駄足だったな。」
確かに佐々木からして見れば無駄な時間だったが、決して自分にとっては無駄ではなかったと、終わってから姫川は思う。決して口には出さないが。
帰ろうとする佐々木に、形式上玄関まで見送る。そして佐々木が玄関の扉に手をかけたと同時に、それと、と言ってつけ加える。
「今日は見逃すが、お前夏休み明けまでに敬語覚えとけよ。」
「……は…い」
最後にとんでもないプレッシャーをかけられたのち、姫川は解放された。

「葵。わしは言ったな。やりたいことをやりなさい。レディースなんやらも認めると」
「……はい…」
「だが同時に注意もしたはずだ。覚えとるか?」

「……学業は疎かにしないこと」
「そうだな。その通りじゃ。なら問うが、今日行われる家庭訪問とやらは、一体何について話すんじゃ？」
「…そ、それはちょっとな～、私にもわからないかも…」
「ほお、葵にもわからんか」
「……」
　現在時刻は１２：３０。某所にある神社内を沈黙が支配する。山の上に建っているだけあって蝉の鳴き声がやけに多く、沈黙した室内にこれでもかと響く。
「……ごめんなさい…」
「うむ」
　やがて沈黙を破ったのは、申し訳なさそうな葵のそんな一言だった。気まずそうな顔をしながら、それでも目は逸らさず謝るその姿勢に葵の祖父の一刀斎もしかりと頷く。
「まあしかし、２年のこの時期まで特に何もなく、成績も上位を取り続けてきたことは事実じゃ。家庭訪問での内容がよほどひどくもない限り、責めはせん。」
　それに対し葵は少なからず安堵する。確かに今回結果的には家庭訪問を受ける形にはなったが、それは別に成績が悪かったからと言うわけではない。欠席日数はだいぶ増えていたが、というか２年１学期はほぼいなかったが、それでも受けた期末考査では１

年生の時と比べても遜色ない程度には取れている。他がやる気ないのも大いに関係あるが、それでも学年1位である。

なにより、2位に寧々が続いているものの、そこから3位への差がとんでもなく離れている。というのも、偏差値底辺の石矢魔のテストが、ここ最近難化し始めているのだ。

理由は問うまでもなく、佐々木である。

佐々木が着任してからは、少なくとも佐々木が教えている教科とクラスにおいてはテストの難易度が上がった。”誰もが解ける問題”から”しっかり勉強すれば難なく解ける問題”へと傾向がチェンジしたのである。

故に、真面目にやった人間とやっていない人間でだいぶ差が開く。

その結果が葵と寧々のダントツぶりである。

「しかし話を聞いている限りでは大した教師のようだな。教え方も上手いのだろう？」

「うん。質問したことにはちゃんと答えてくれるし、普通に学習する上で困ったことはないわ」

「今日もわざわざこんな辺境の地へ来るとは…。ふむ、なかなか見上げたやつじゃわい」

ピンポーン。

と、ちょうどそのタイミングでインターホンが鳴る。時計を見れば、確かに予定の時間になっていた。

「噂をすれば何とやら、だな。」
よっこらせと正座をといた一刀斎は、そのまま玄関へ向かう。鍵付きのスライド式の扉。
それに手をかけ、ガラガラと開ける。
「わざわざご苦労じゃ……った……な…」
「……ああ…」
そして、顔を見合わせ、互いの時が止まる。
「おじいちゃん?どうしたの?」
しばらくの沈黙。それは、不審に思った葵が居間から顔を出してくるまで続いた。
「かあっ!!」
弾かれたかのように一刀斎が動き出す。葵ですら久しく観ない攻めの姿勢。もともと心月流の無手は関節技や投げ技に特化しており、もっぱらが受身の姿勢だ。しかし葵や、それこそ一刀斎程の達人ともなれば、それはもはや型を選ばない。
掌底、襟を狙った掴み、足払い。怒涛の攻めが佐々木を狙う。還暦をゆうに過ぎた老人とは思えないほどのスピード。それに極限まで洗練された技術が乗っかってくる。
1つでもヒットしてしまったら一気に形勢が決まるそれを、相反する男は見事にかわしていた。

「……すごい…」

それは、自身でも意識したわけではない葵の呟きだった。葵も心月流の後継者ということで多くを一刀斎から学んだ。いくつかの技なら極めたと自負できるくらいに昇華させて来た。

しかしこの域には、まだまだ届かない。

それ程までに洗練された動き、技、技術。

確信できる、あの場に自分が立っていたらきっと3分も……いや、1分ももつかわからない。

が、同時に違和感も覚える。

（おじいちゃんが武術を使うのは当たり前だけど、佐々木先生の捌きも、若干テクニックを帯びている？）

葵だけでなく、石矢魔全員の総意として佐々木は強い。もちろんそれは喧嘩におけるものだが、”喧嘩が上手いか”と聞かれれば、これまた全員が首をかしげるだろう。

佐々木の強さを裏付けるのは、その圧倒的なまでのフィジカル。どんな攻撃も真正面から無傷で受け止めるタフネスと、どんな防御も戯れとばかりにねじ伏せる圧倒的暴力。テクニックなど垣間見たことすらない。

故に葵は今のこの光景をみて不思議に思う。

佐々木の捌きは明らかに技術を伴っていたからだ。
（どういうこと？佐々木先生は身体能力頼みじゃなかった？）
では何故いつもあんなパワーでねじ伏せるような方法をとるのか。
頭のキレる葵だからこそ、１つの考えが浮かぶ。
（もしかして佐々木先生は、今まで喧嘩すらしていなかった？）
あくまで仮定だが、一番しっくりくる。佐々木は喧嘩が下手なわけではない。ただ、喧嘩に相当する人物が、技術を使うまでに至る人物が１人もいなかっただけ。なんの工夫もない、ただの身体的スペックだけで全てが事足りる。
今技術を駆使しているのは、一刀斎が相手をするに相当する人物だったから。
（わからない。だけど、確信を持って言える）
――私達は、佐々木先生の実力の一端も知らない。
そこまで考えて、葵は一度自分の中で整理をつけた。そして、次にどうこの争いを止めるかについて考え始めた。

「龍一！貴様いったいこの７年間何をしとったんじゃ!!」

「色々ってやつだ。ある程度忙しかったんだよ」
「なら連絡の一つでもよこさんか！」
「携帯手に入れたのが最近でな。つかあんたも携帯持ってねーだろ」
「他にも方法はいくらでもあるわ！それに目上の者に対して”あんた”なぞ使う者ではないわい！」
「ああ悪かったな一刀斎」
「さんをつけんか」
「のじいさん」
「そういうことではないわ!!」
　とりあえず葵の努力は功をなし、居間に2人を連れてくることには成功した。が、お茶でも出そうとするまもなく今の問答が始まった。
「というか、じゃあ何故突然現れたんじゃ。心月流を真剣に学ぶ気になったか」
「そうじゃねえ。あんたんとこの孫について、家庭訪問しに来たんだよ」
「む……？まさか、お主……今現在葵の…」
「ああ、教師だな」
　普通に発した佐々木の言葉に、一刀斎が再度固まる。ゆっくり葵の方を見ると、葵も肯定するようにこくりと頷いた。

「お、お主が教師じゃと!?」
「何かおかしいか」
「おかしいことだらけだわい！あの喧嘩バカのクソガキが……よもや教師とは…」
「失礼な野郎だ。」
「お主にだけは言われたくないわ」
「あ、あのー、佐々木先生とおじいちゃんって、どこに接点あったのかなーって」
　そこで、今まで目を白黒させていた葵がそろりと手を挙げる。佐々木と一刀斎の会話では、過去にこの2人になんらかの関係があったのは明らかだった。
「まあなんじゃ。昔の教え子という感じだな。」
「お、教え子!?佐々木先生が!?おじいちゃんの!?」
「全然ちげーだろじじい。一方的にこのじいさんから喧嘩売られてただけだ。」
「あれは稽古みたいなもんだと毎回説明したじゃろ」
「あれのどこが稽古だ」
「ぶつくさ言う割には、お主も毎回相手になったでないか」
「売られた喧嘩は買うのが俺の主義だ。……昔はな。」
「ほう？今は違うと？」
「たりめーだ。今の俺は教師だ。いちいち生徒からの喧嘩を買ってりゃきりねーだろ。」

「まあ本来はありえんことだが、お主の学校ならありえるな」
「まあ、そういうわけだ。……この話はもういいだろ。だいぶ時間が過ぎちまったな。さっさと始めるか」
　結局葵はこの２人の関係を良く知ることはできなかった。が、知り合いというには近く、友達というには遠い。そんな奇妙な関係であることは理解した。

「それで、一体どういう事情で家庭訪問に至ったのかの。成績表を見た限りだと葵は一応優等生の枠に入ると思うのだが」
　お茶を一飲みして、一刀斎がそう切り出す。
「優等生っつか、学年主席だわな。一年の頃から邦枝はずっと学年一位をキープしている。まあ、1年生の最後と、2年生のはじめのテストは受けてねーんだがな。」
　ギクリと葵の肩が跳ねる。思い当たる節がバリバリあるが故の反応だろう。
　これには一刀斎の眉もピクリと動く。
「どういうことじゃ?」
「それが今日ここにきた主な理由の一つだ。一刀斎、あんたの孫、このままじゃ卒業できねーぞ。」
「なんじゃと!」

「うぐ」

一刀斎の目がくわっと開かれたのを見て、葵が思わず声を出す。

「まあ少し語弊があるがな。正式にはこのままこのペースで好き勝手やってると、普通に出席日数が足りねえ」

「1年の最後から2年の最初というと……、北関東に遠征していた時期とかぶるの」

「まさに理由はそれだろうよ。期間でいうと丸々1学期ってとこだ。3年間で合計1年分。まあ、卒業は無理だわな」

その事実に葵はさらに気まずそうに、一刀斎は手をワナワナ震わせる。

「葵！いくらいい成績をとっていようと、卒業できなくては意味がないではないか！」

「うっ……すみません……」

「もしこれからも遠征だなんだで度々学校を休むようなら烈怒帝瑠は解散させるし、メンバーの稽古も今後一切する気はないぞ！」

「も、もう大丈夫だから！勢力争いも一区切りついたし、今後は長期休みの時とかに行くようにするから！」

「……ふむ…。とりあえずそういうことなら延命処置じゃ。暫くは様子を見ることにしよう。」

両手をアタフタと動かし、なんとか一刀斎をなだめようとする葵。その甲斐あってか

ひとまず一刀斎は納得したようだ。そしてそれは、対面で座ってた男も同様。
「話がそれでまとまったんなら俺から言うことはねえ。まあ今回は忠告みたいなもんだ。気をつけろとな」
「とりあえず今は葵を信用するとして、それで龍一よ。わざわざそんなことを言うためだけに来たわけでもあるまい。まだ何かあるのだろう?」
　言うと同時に室内の空気が若干重くなったと錯覚する一刀斎。重圧の元はもちろん目の前の男から。
「ああ。というか俺からすりゃこっちの方が問題だ。邦枝が学校に戻ってかなり短期間で、既に二ヶ所の校内破損がおこっている。それもどちらも大破と呼べるほどの壊れっぷりだ。もちろん原因はあんたんとこの孫だ」
　佐々木から伝えられた事実に、今度は一刀斎は「ふむ」と言って腕を組む。
「なるほどな。つまりはその修繕費の話をしに来たというわけだな」
「いや、金のことはいい。幸い使い道のない金なら腐る程もってるからな。」
「!?お主、まさか学校の修理費に自腹を切っておるのか!」
　もしそうだとしたら、一刀斎としては示しが付かない。話を聞いただけでは破損の規模は具体的には想像できないが、”大破”と言っているのだから相当なものだろう。それを壊した当人ではなく、その担任が修理費を払っているのだとしたら……、とても

スルーできる事実ではなかった。
「そいつは今どうでもいい。」
「どうでもよくないわ！大人の世界では”ケジメ”というもんがある。孫が犯した馬鹿な行動を、その保護者が責任も取らないとあっては示しがつかんじゃろ！」
「生徒の責任を負うのも教師の役目だ。」
「だとしてもお主のはやりすぎじゃ。教師の負う責任とやらに今回のは含まれんじゃろ」
　なかなかに引き下がらない一刀斎に佐々木は小さく溜息を吐く。そして数舜の沈黙後、再び口を開いた。
「ならじいさん、こうしよう。あんたは孫がこれから学校を破壊しないように厳重に注意しとけ。次また大破なり何なりをやらかしたら、そん時は責任を負うのはあんたの番だ。それでどうだ？」
　お互い目を合わせて黙る。葵はこの間どうしようもない居心地の悪さを感じていた。
「……ふん、頑固さは昔から変わらんな。だいぶ甘い処置じゃの。だがわかった。引き下がる様子もないし今回の件は納得するとしよう」
　一刀斎のその一言で室内の重圧が霧散する。
「葵がまさか学校でそんなに問題を起こしていたとは…」

「……ごめんなさい…」
「まあ石矢魔だからな。多少のことには目をつむる。だが関係のない生徒にまで迷惑をかけるような行為は控えろよ。つかやめろ。」
「は、はい…」
　余程一連の話し合いが効いたのか、葵はすっかり意気消沈モードである。
「……だがまあ、それを抜きにすればお前は
　石矢魔でもトップクラスの優等生だ」
「……え？」
　普段の佐々木からは想像もつかない、まるでフォローのような発言に葵が顔を上げる。
「授業も真面目に聞いてるしリーダーシップもある。あとは学校での振る舞いは気をつけることだな。」
「あ……は、はい！」
　佐々木が誰かを褒めるという行為を目にするのは、葵にとっては初めてのことだった。余程珍しいことなのか一刀斎ですら目を見開いている。
「んじゃあ今日のとこはそれで終いだ。俺は帰るとする」
　胡座の状態から立ち上がると、礼もせずに玄関へと向かう。

「あ、あの、ありがとうございました」
　それは修繕費を肩代わりしてくれたからか、甘い処置で済ませてくれたからか、はたまた褒められたからか。自分でも思考がまとまらないまま、それでも感謝の意を伝えようと葵は頭を下げた。
　それに何の反応も示さないまま、佐々木は玄関から出て行く。
「まったく、親しき仲にも礼儀ありという言葉も知らんのかアイツは。」
　その後すこしの沈黙が室内を支配する。
「葵」
「ん? 何おじいちゃん」
　が、唐突に発せられたその声に、葵はすぐさま反応した。
「わしは常々言っておったな。お主の婿は強くなくては認めんと」
「うん」
　一刀斎はすこし遠い目をすると、どっこいせと立ち上がり退室しようとする。
「んん!? ちょっとおじいちゃん!? 何でこのタイミングでそんなこと言った訳!? ねえ!! ちょっと!!」
　境内に響くその声を、多数の蝉の鳴き声が掻き消した。

家庭訪問ａｔ東条

「う、うぅ…」
「バケモノ……」
灼熱の太陽の下、何百という単位の者達がおよそ２００メートルにわたって地面に倒れふす。本来路上を所狭しと埋めつくしそうな人数の彼らは、しかし道路の真ん中のラインには1人も伏してはいない。故意に避けているかのように。
その道は、例えるならば獣道。獣が道を進むのではなく、進みたい方向に道を作ることでできる道。障害物を薙ぎ倒すことでできる道。
「ありやりや、こりゃまた随分と派手にやっちゃって」
その道を悠々と歩く2人の人影。
「出門頭、　硬破流徒、うおっ！武頼漢までいる！今回は大分徒党を組んだな」
「塵がどれだけ集まろうと意味はない。」
「いやでも流石に今回のは多すぎでしょ」
いつもの様子で軽く会話を交わす彼らは、一見するとこの連合を2人で蹴散らしたようにも見える。確かに、この2人は自他共に認める手練れではある。並みの不良ならば

片手であしらわれ、かなりの実力者でも拮抗することすら難しいだろう。
実際彼ら2人が手を組めばこの大群相手に勝利するのはできない話ではないかもしれない。
しかし、この死屍累々を作り上げたのは彼らではない。彼等はこの惨状を作り出した本人を知っている。たった1人で、欠伸をしながら猛威を振る人物。
それは、この道の終点でうちわを仰ぎながら寝そべっていた。
「それで、多少骨のある奴はいましたかい？」
声をかけられ、うちわを仰ぐ手を止める。
そして顔だけこちらを振り返る。
「いや、1人もいなかったな」
「まあそうでしょうね。あんたと対等に渡り合う奴なんか見たことないっすからね。東条さん」
虎を思わせる目つきに丸太のような豪腕。
ー東条英虎。東方神起最後の1人であり、東方神起の中で別次元の強さを誇る。
「庄次もかおるも悪かったな。この分じゃ海の家のバイトはクビだ」
「まあまあ、それはまた探せばいいじゃないっすか」
「焼きそば……食いたかった」

東条があまり悪びれずにいう言葉に庄次は笑って返したものの、かおるはすこし不機嫌顔だった。

「しかし散々だ。バイト中断して喧嘩おっぱじめてみりゃ、骨のある奴は1人もいねえ」

言うと同時に東条は空を仰ぎ見る。

「どっかに奴みてえな化け物はいねえもんか」

そして思い出す。それは1年前。自分がまだ2年だったころ。忘れもしない、圧倒的敗北の記憶。

『おい、東条が久し振りに顔を出したらしいぜ』

『やっとか、腕がなるぜ。奴には前回痛い目見さしてもらったからな。今度は俺のばんだ』

当時から石矢魔で頭角を現していた東条は、やはり神崎姫川と比べても頭1つ抜きん出て恐れられていた。当時の3年を抑え、最強の呼び声すら上がってきていた彼に、それでもなお挑もうとする輩は多かった。

その日も例に漏れず、東条が久し振りに登校するとそこには打倒東条を掲げる生徒が徒党を組んで待ち伏せていた。

『こんちは東条くん。殺しにきましたー』

各々手には武器やらなんやらを持っており、臨戦態勢に入っているのは明らかだった。

ならば、東条の返答はすでに決まっている。売られた喧嘩は買う一択なのが東条のポリシー。

そこからは、一方的な虐殺だった。

『ぐあー！』

『がふっ！』

たった1人で大衆をなぎ倒していく様はまさに獣。それでもなお怯みなくかかってくる相手を歯牙にもかけず圧倒的実力差で潰していく。

東条が死屍累々の中1人立つのに、10分とかからなかった。

『おい』

今回も自分に匹敵する奴はいなかったと思う東条の背に声がかかる。まるで声そのものが物理的な重さを持ったと錯覚するほどの威圧感。反射的に東条は振り返って距離を取る。

『てめーは…』
灰色の髪をした長身の目つきの悪い男だった。この状況でもまったく物怖じしない目。
それは久しく見ぬ、強者の目。
ーー強えな。
強者に対する鼻が特別効く東条は、瞬時に目の前の男がそこらの有象無象と違うことを感じ取った。
出方を伺う東条に、男は一度息を吐き告げる。
『つくづく石矢魔の奴らは礼儀ってもんを知らねえ…が、まあ今はいい。実はな、人を探してるんだ』
この惨状を見てなお目の前の男は平然と人探しをしてると言う。その異常性をうすうすながらも東条は感じ取っていた。
『人？』
『ああ、東条っつー奴はどこだ？』
その一言で東条は全身の血が滾るのを感じた。なるほど、この強者も俺を打ち倒さんとする奴だったか、と。
ーー最後の最後でとんだ大物が釣れやがった。

ならば、これからすることは1つ。
東条は一瞬にして足に力を込め、男に飛びかかった。
『俺がその東条だ』
拳を振り上げ顔面めがけて振り抜く。
ーー初撃はもらったぜ。
直後、スパァン!!という音が男の顔面からした。クリーンヒットと笑う東条だが、違和感に気づく。
男の顔面が微塵も歪んでいない。さらに殴った拳の感触もおかしい。
すぐさま確認すると、なんと男の顔面と拳の間のすれすれの隙間に、男の手が割り込んでいた。
(まじかよ…。いつの間に…)
東条ですらどのタイミングで受け止められたのか理解できない。
ーーこいつは想定以上の相手かもな。
『やるなお前。こいつは久し振りに本気を出しても良さそうだ』
東条は一度バックステップで距離を取る。そして、
『いくぜ』
初撃以上のスピードを持って男に向かっていった。移動速度を拳にそのまま乗っけ、

さらに加速して突き出す。が、男はそれを顔を少し背けるだけで回避。東条も動きを止めずすぐに別の攻めへと転じる。

殴っては受け止められ、蹴りを放っては回避される。東条の集中力もますます上がっていき、攻防は苛烈を極めた。が、そんなやりとりも終わりを迎える。

『ツラァ!!!!』

一層力を込めた拳が東条によって放たれる。

この攻防の中１番の威力と速さを持った拳。己の今届く最高峰のその拳を、

ダン!!!

男は何の苦労もなく受け止めた。

『はあ……。しょうがねえか』

そして、初めて男が拳をあげる。今まで避けるや受け止める一択だった男の初めての攻め。ゆっくりと拳を振りかぶる。

（あれをくらったらやべえ!!）

東条の本能が警報を鳴らす。避けるしかない。まともにくらうは論外、受け止めるのも自殺行為。残された道は回避の一択。

すぐさま距離を取ろうとする東条。しかし

ーーは、はずれねえ!!

受け止められた己の拳が、男の手から離れない。どれだけ足に力を入れてもピクリとも動かない。

――どんな握力してやがんだ！

奮闘する東条に、しかし時は無情にも時間切れを知らせた。最後に見た光景は迫り来る死を体現した拳と、

『落ち着け』

そんな言葉だった。

「あいつは俺が今まで出会ってきた中でも最強ランクにつええ奴だった。あのレベルの奴を俺はアイツと、もう1人しか知らねえ」

「でも東条さん。あんな化け物がそこら辺にいると思えないっすよ。それにいたとしてもそんな奴とは遭遇もしたくないですし」

やれやれといった調子でいう庄次に、東条は至って真面目な表情で返す。

「いや、そうでもねえさ。強者同士ってのはいずれ引かれ合うんだよ。」

そして、庄次とかおるのやや後ろ側を見る。

「そうだろ？佐々木」
　瞬間、庄次とかおるが振り返る。いつからいたのか、そこにはいつもの通り目つきを鋭くした佐々木が立っていた。石矢魔で夏休み中決して出会いたくないランキング堂々1位の人物である。
「はあ、佐々木先生だ。何が強者は引かれ合うだ。今日の家庭訪問におめーがこの場所を指名したんじゃねえか」
「いや、この場所を指定したのは俺のバイト先が近かったのと、ここなら伸び伸び出来そうだったからだ」
「あ？」
　東条の意味深な物言いに佐々木は眉を上げる。それに対し、東条はニヤリと口角を上げる。
「佐々木先生。喧嘩、しようぜ」

（これはちょっとやばいかも）
　佐々木と東条の視線が交差したのを見て、その2人に挟まれてる庄次は心中でそう呟く。

石矢魔生徒の中でも実力で言えばかなりの高さを誇る庄次だが、その庄次からしてもこの２人は化け物のランクに入る。激突すればその規模は先程の東条対連合軍とは比にならないものになるだろう。

しかし、庄次の懸念はそこではない。

１年前１度負けてるとはいえ、そこからさらに急成長している東条。対し、不動の最強が囁かれる佐々木。その２人が激突することはつまり、

（石矢魔の勢力が一気に傾く危険性だってある…）

基本的に勢力図なんてものに無関心な庄次だが、それでも佐々木と東条のいる位置が頂点にかなり近いということはわかる。どちらが勝つにしろ、それがトリガーとなり戦争が始まる可能性は極めて高いことは明白。

（止めた方がいいんだろうけど……なー）

自分が立ち入る隙はない。それはかおるも分かっているのか黙して事の成り行きを探っている。

（一か八か口出してみっかな）

このままでは少しまずいと判断した庄次が満を持して口を挟もうとする。が、

「何馬鹿なこと言ってやがる」

佐々木のその一言により張り詰めていた空気が霧散する。というか、佐々木が無理矢

理解いたというべきか。
「俺がお前と喧嘩するわけねえだろ」
　この話はやめだと示す佐々木だが、それにも東条は食い下がる。
「それは生徒と教師という立場故か？それとも……実力差がありすぎて喧嘩にすらならねえからか？」
「……んな無駄話をする気はねえ。さっさと面談始めんぞ」
　一瞬の沈黙。それは呆れからくるものか。それとも、確信をつかれたが故のものか。
「ほう？いいのか、こんな場所で」
　見渡せばそこら中で虫の息の不良どもが転がっている。見る限り特にくつろげそうな場所もない。第一、家庭訪問なのに家庭でないと言うのが１番大きな問題だった。
「まあ本来は生徒側が場所指定なんてアホみたいな真似許可しないんだがな。お前んちの事情は一応理解してる。だからお前に関してはもともと一対一で面談する気だった」
　家庭訪問とは名ばかり。つまり、東条に関しては佐々木はもともと家庭で親も交えての面談はする気が無い。確かにそれが理想といえば理想だが、佐々木は東条の家の事情を知っている。それを踏まえ、東条だけは特別処置でもいいと言う結論になった。
「そいつはありがてえ。じゃ、喧嘩すっか」
　瞬間、空気が凍った。およそ先程までの話のくだりを理解してればまずでてこない言

葉である。これには流石のかおると庄次も固まる。そしてその２人ほどではないが、佐々木も呆れながら後頭部をかく。

「……お前話理解してんのか？しねえって」「男なら拳で語れってやつだ。それに拳でしか伝わらねえこともあんだろ」

佐々木の発言に東条が被せる。先の会話で東条の闘争心が萎えたかと思いきや、むしろ俄然やる気を出していることに再び庄次が焦る。が、

「ねえよ。言葉っつーもんがあんだから会話すりゃいいだろ」

「……」

佐々木の速答により東条が撃沈した。頭の弱い東条の弱点として、正論で返されると何も言葉が出なくなる。もはや東条には何も言い返せない。普通ならばこのまま面談へと移りそうなものだが、庄次の表情は晴れない。何故なら庄次は知っている。己の苦手分野で追い詰められた東条がどんな行動をとるか。

即ち、

「ええい御託はいい!!喧嘩だ喧嘩！」

自分の得意分野で強硬手段に出る。

ーーあちゃー……。

こうなってしまっては庄次とかおるは見ることに徹するしかない。

御託を言っているのは完全に東条の方なのだが、そのことを指摘する間も無く東条は拳を振り上げ佐々木に特攻する。
「おめーは俺の持った生徒の中でもトップクラスの問題児だな」
「そいつはどうも！」
一瞬にして東条は距離を詰め、微動だにしない佐々木に対して拳を放つ。圧倒的なスピードを持った拳は空気を裂きながら佐々木の顔面に向け真っ直ぐ飛んで行く。しかしそれでも佐々木は動かない。さらに進み、もはや当たる必須の距離。
直撃寸前、妙にスローモーションに感じる世界で、その危険性に感づいたのは東条だけだった。
東条が強引に拳を引っ込め、そのままバックステップで距離を取る。豪腕により生まれた風が佐々木の髪を僅かにたなびかせた。庄次には、何故東条が攻撃を無理やりとも言える動きで中断したのか理解できなかった。
「どうした。素直に話し合う気にでもなったか」
「そんなんじゃねえ。今拳を出していたら前の二の舞を踏むと思っただけだ」
そういえば、と庄次は以前東条から聞いた佐々木との対決のことを思い出す。確か、拳を受け止められ、一撃で沈められたと言っていた。つまり、今の拳を出せば受け止められ、そのままとどめを刺されると東条は判断したわけである。

（今の一撃が止められる？俺には単純に佐々木先生が反応できてないだけのように見えたけど）

事実、佐々木は動揺こそしている風には見えなかったが、あそこまで拳が接近していて動く気配すらみせなかった。あの寸前で拳と顔の間に手を滑り込ませることができるか……。少なくとも、庄次ならば無理と即答する。とはいえ、庄次は未だ佐々木の実力は正確には把握していない。佐々木と一度ぶつかったことがある東条がそう言うのだから、考えすぎと思うのは愚考だろう。

「本当に……。聞き分けのねえ生徒ばっかで嫌になるぜ。そのまま拳を収めてくれりゃあ、俺的には嬉しいんだが」

「そいつは聞けねえ……なっ！」

再度、東条は佐々木に突っ込む。が、もう一度真正面から馬鹿正直というわけではなく、やや斜めから回り込み、胴に向けて鋭い拳を放つ。が、今度は寸前の佐々木のバックステップによりその蹴りは空を切った。

「もともと長期戦は覚悟の上だ。1時間だろうが2時間だろうが付き合ってもらうぜ」

「おめーの中に人と話すって選択肢はねえのか」

「なんども言わせんなよ」

佐々木の問いに対して東条の答えは当然否。

己の行動でもってその意思を表そうと、東条はさらに佐々木に追い打ちをかけようと思い、
「そうか」
出来なかった。
足は踏み出したまま、拳は振りかぶった状態で、東条は行動停止を余儀なくされた。
具体的にどうこうというわけではない。決して目に見えない何か。その何かが確かに東条を縛っていた。東条はこの正体を知っている。以前にも一度浴びたことのある、佐々木からの圧。そばで見ていただけの庄次とかおるにさえ影響を及ぼす、規格外のプレッシャー。
「俺の目的はおめーとは真反対なようだ。俺は1秒でも早く面談を始め、1秒でも早く帰宅してえんだよ」
言うと同時に佐々木が腕をまくる。瞬間、庄次やかおるも含め、東条ら3人は己の動悸が激しくなるのを感じた。
「そのためには、仕方ねえ」
石矢魔着任当初と比べ大分なりは潜めたものの、今でも佐々木がその武力を行使することは多い。故に、それは石矢魔生ならば大半が知っている。
曰く、佐々木には構えがない。

構えとは何も武術に富んだ者だけが取るものではない。それは少しの労力で攻守を補うと同時に、明確な戦意を表す。故に、ただの一般人であっても喧嘩中に拙いながらも構えを取ることはよくある。

が、再度言うように佐々木にはそれがない。

しかしそれはなにも佐々木が臨戦態勢に入っていないからというわけではない。攻撃の意思ならこれ以上なく明確に表されている。これまた石矢魔生ならば知っておくべき常識の1つ。

佐々木がプレッシャーを放ち始めたらプライドをかなぐり捨てて全力で謝れ。

佐々木が腕をまくったら……まあ、諦めろ。

強いて言うならこれが佐々木なりの構えといったとこだろう。それが示すことはつまり、

「とうとう、きやがるか」

理不尽なまでの圧倒的力の行使。

負けるつもりなど毛頭ない。以前の自分と比べ、実力は飛躍的に上がっている。以前の東条を相手にすれば佐々木がやったように自分も勝てるだろう。が、この圧を浴びると決まって思う。

勝てるビジョンが全く見えない。

「ぐ、おおお！」

そんな不穏な考えを振り払うように東条は首を振り、無理矢理四肢を動かし佐々木に迫る。

（せめて一撃はいれてやる）

自分の全力の一撃がクリーンヒットすれば、流石の佐々木もノーダメージとはいかないはず。東条を動かしたのはまさしくその思考。

そしてその思考は、東条に今出せる最速を叩きださせた。

でかい図体からは想像もつかないほどの、切り裂くような鋭利な拳が佐々木に向かう。狙うは人体の急所とされる顎。例の如く佐々木は避けるそぶりを見せない。それが先ほどと同様余裕の現れなのか、ただ単に見えてないのかはわからなかった。が、既に東条の拳は常人なら回避不可能なまでに佐々木に接近している。ここまでくれば、後はどうでもいい。

当たれば良し。もし先ほど同様ギリギリでガードをされたとしても、そのガードごと押し込み佐々木にダメージを与えられる。

東条の拳がここに来て更にパワーを増す。

ーーくらいやがれ！

拳がクリーンヒットする直前、東条だけは見えていた。佐々木の腕が一瞬ブレるの

を。そして

ズガンッ!!!

盛大な打撃音が響く。一瞬の攻防の末倒れる結果となったのは、東条の方だった。側で見ていたはずの庄次とかおるでさえ、今の一瞬で何が起きたのか理解できなかった。が、しかし、正面からやりあっていた東条には何が起こったのか理解できた。

「あ……りえねえ…」

うつ伏せの状態で、目は虚ろのまま絞り出すように東条は呟く。

「ガードするならまだわかる。かわしたと言っても信じる。が、あの状態で逆に殴り返すなんざ、できるわけがねえ…」

東条とて、はっきり見えたわけではなかった。しかし一瞬ぶれる佐々木の腕。それとほぼ同じタイミングで感じる頬への衝撃。ここまできてはもはや疑いようもない。即ち、佐々木はあの瞬間に一瞬で殴り返してきたのだ。己の最速の拳など嘲笑うかのような圧倒的スピードで。

「そりゃ、勝てるビジョンが見えねえはずだ」

スピード、パワー、タフネスにおいてこれほど圧倒的な差を見せつけられれば、負けず嫌いの東条でさえ認めないわけにもいかない。

「まだまだ、遠い……ってか…」

紛れもなく己の全力をぶつけた。が、それを歯牙にも掛けない圧倒的実力。どれ程遠くにいるのかさえ、今の東条には把握できない。

「とりあえずこれで満足したろ。オラ、さっさと始めんぞ」

佐々木が袖を元に戻す。気付けば佐々木から発せられていたプレッシャーも鳴りを潜めていた。時間にして１０分も経たなかった攻防は、しかしかおると庄次には何時間にも感じられた。

「おい、いつまで倒れてんだ」

佐々木が足下の東条に声をかける。が、返事がない。

「……あ？」

流石に気になった佐々木は東条の容態を確認するため仰向けにする。そして顔を確認して気づく。

「気絶してやがんな」

東条は見事に白目を向いていた。佐々木とて東条の鎮静化が目的であり、意識を飛ばすことが目的ではない。なので極力手心は加えたつもりだった。が、加減を間違えた結果がこれである。

「おめーが起きなかったら面談できねえだろ。おい」

結果、東条が目覚めるまで数時間を要し、佐々木の本来予定していた終了時間を大分

オーバーして面談は終わった。

自宅訪問ｉｎ男鹿家

「辰巳いいいぃ～!!お前入学してから僅か３ヶ月ちょいでどうやったら家庭訪問されることになるんだあああ!!」

男鹿家にて、時刻は正午をやや過ぎたあたりに男鹿の父、洋次郎のそんな声が響いた。

「高校一年生にして家庭訪問最速記録更新じゃないか!!どうしてだ！説明してみろ！あ、やっぱりいい！驚くほど正確に想像つくからやっぱり言わなくていい！」

男鹿の両肩を持って揺さぶったかと思えば、自身の頭を抱えて体育座りをする洋次郎。

一挙手一投足が騒がしい父に流石の男鹿も呆れ気味である。

「それにお前言うの遅すぎるだろ！その家庭訪問ていつからだっけ？」

「今日の１３時」

「後一時間もないじゃないか！父さんがいなかったらどうする気だったんだ！」

「いやどうせ暇だろ」

「少しは反省の色を見せろ！」

実際これに関して男鹿は少しはすまないと思っている。家庭訪問を言い渡されたの

は夏休みに入る少し前のことだが、今の今まですっかり忘れていた。しかしそれは男鹿にとって何も軽いイベントだったからではなく、むしろ重過ぎで本能的に記憶から消去していたからである。

故に、確かにすまないとは思っている。が、それでも謝ることはしない。何故なら

「なに辰巳。あんた高校生にもなって家庭訪問とかくらってるわけ？成長しないわねー」

今もなお煽ってくる姉（美咲）の手前、少しも弱味を見せたくないのである。

「……るせーな。姉貴だって高1の頃色々やらかしてたろ」

「んでもあたしは1度も家庭訪問なんてされたことなかったわよ」

「それはもう何をしても無駄だって見放されたからだろ」

男鹿の主張にいち早く反応したのは意外にも美咲ではなく父の洋次郎だった。

「!!そうだよ！うちの子達の手のつけられなさは異常なはずなんだよ！それこそ先生方が見放すほどに！しかも辰巳の通っている学校はあの石矢魔じゃないか！家庭訪問なんてしようとするまともな教師がいるのか!?」

言われて男鹿は件の男を想起する。男鹿にとっては１００歩譲ったとしても”まともな教師”の枠には入らない存在だが、仕事に関してだけはしっかりとこなすという印象はある。そのことを加味すれば、佐々木が家庭訪問を行うことに関しては違和感はな

い。

「いや絶対まともではないんだが。まあ、あれだ。一言で言うとヤベー奴だな」

なんとも説明しにくい佐々木の人柄を男鹿は数瞬考え、しかし面倒臭くなって説明を放棄した。が、そんな説明をされた父の洋次郎はたまったものではない。

「ヤ、ヤベー奴……だって…？」

男鹿をして「ヤベー奴」と言わせる人物。天下の不良校の教師。

人物像がいい方向に定まるわけがない。どんな人物かを想像した洋次郎は途端に顔色が悪くなる。

「ぜ、絶対まともな人じゃないに決まってる。くそー！母さんが、元ヤンの母さんがいてくれればなあ！いやだあああ！やばい奴と顔合わして話すなんてやだあああ！せめて美咲！お前も参加してくれないか！いや、側にいるだけでいいから！」

頭を抑え情けない声を出し、果ては娘にまで助けを求める洋次郎に男鹿は呆れのため息を漏らした。

「嫌。あたし今からコンビニ行ってアイス買って、ついでに雑誌立ち読みしてくるんだから」

洋次郎の要請をバッサリと切り捨てる美咲。どうやらとってつけた用事ではなく、もともとそうする予定だったようだ。洋次郎を背にし、そのまま玄関に向かう美咲。

「待ってええ！やばい奴と辰巳と三者面談なんて嫌だあ！あとコンビニで立ち読みはやめなさい迷惑だから！」
「大丈夫ちゃんと立ち読み用雑誌読むから」
「そう言う問題じゃーー」
「んじゃ」
洋次郎の言うことを途中で遮り玄関から出て行く美咲。残されたガックリと首を落とす洋次郎と男鹿との間で微妙な沈黙が流れた。
時刻は１２：４０を回ったところだった。

ピンポーン。
インターホンの鳴る音がする。時刻は１２：５８。時間からして、例の教師であることはほぼ間違い無いだろう。
「……よし…」
すこしの沈黙の末、覚悟を決めた顔で洋次郎は立ち上がった。男鹿はというと口を噤んでやや下を向いているが、額に浮き上がった汗が多少の動揺を示している。
何があっても声だけは上げないようにしようと洋次郎は腹をくくり、玄関へと向かう。

「はーい」
鬼が出るか蛇が出るか、恐る恐ると言った調子で玄関のドアを開く。
「こんにちは。男鹿辰巳君の担任の佐々木龍一です。」
現れたのは洋次郎がやや見上げる長身。灰色の髪。切れ長の鋭い目。
「……」
「どうかしました？」
「ああ、いえ。辰巳の父の洋次郎です。どうぞお上りください」
「失礼します」
思ってたより全然まともそうな人間だった為洋次郎はすこし面を食らう。
確かに威圧感を感じる風貌だが、洋次郎としてはもっと顔に傷があったり、モヒカンだったりとわかりやすい”やばい奴”を想定していた。
佐々木は一礼をすると靴を脱ぎ、出されたスリッパに履き変えてから家へと上がる。
洋次郎に案内されるままリビングへと行き、男鹿が座っている対面に「失礼します」と一声かけて腰かけた。
「わざわざ来て頂いて早々に申し訳ないのですが、本日はいったいどういうご用件で…」
洋次郎が早々に本題へと切り込む。本来なら談笑の１つでも挟むのが普通だが、今の洋次郎には謎の緊張によりそんなことをしている余裕はなかった。

「はい。日頃の辰巳君の学校での生活態度についてお父様とお話ししたく伺ったしだいです。」

やっぱりか…と洋次郎は心の中でため息を吐く。というのも、学校の教師が男鹿について家庭訪問、又は三者面談を行うのは過去何度もあった話だ。そうして教師に対面して真っ先に言われてきたのが息子の学校での生活態度。小学校の頃はまだ子供なのだからとさほど気にしていなかったが、男鹿の素行は中学生になっても落ち着くことはなく、逆に段々と先生からの呼び出しが増えた。そして今回、とうとう高校の教師までもが家庭訪問をしに来た。内容はいつもの通り、学校での生活態度だった。

「はあ……。今度は何をやらかしたんでしょうか」

大体想像はつく。伊達に幾千の家庭訪問をこなしてきた洋次郎ではない。己の息子の学校での生活態度など今までに何度も報告されてきたことだ。

「始業式から夏休みまでの1学期間、辰巳君はほぼ毎日と言っていいほど校舎破損を引き起こしています」

「ほ、ほぼ毎日ですか?」

校舎を破損させていることは何となく予想していた。が、流石にその頻度は予想外だった。洋次郎が見るからに動揺する。

「おい辰巳!お前何でそんなに学校壊したがるんだ!学校に何か恨みでもあるのか!親

でも殺されたのか！生きてるよ！父さんも母さんも生きてるよ！」
　横で俯いていた男鹿の肩を掴み、洋次郎はガクガクと揺する。
「喧嘩ふっかけてくる奴ぶっ飛ばしたら追加で壁とか窓もぶっ壊れるんだよ。しょうがねーじゃん」
「しょうがなくない！断じてしょうがなくないよ！」
「ぶっ飛ばすだってもっとやりようがあんだろ。障害物のない方向に殴り飛ばせばいいだけだろ」
「そうだぞ！ぶっ飛ばすだってもっとやりようが……ん？」
　途端に洋次郎の手が止まる。それは、今の会話に違和感を感じてのものだった。数瞬思考を巡らせ、洋次郎はその違和感の正体を突き止める。
「あの、佐々木先生。今何と？」
「ですから、何も壁や窓がある方向に殴り飛ばすことはないと言ったのです。加減や方向を考えれば何も壊すことはないでしょう」
（いやいやいやいや！）
　そうじゃないだろうと洋次郎は思う。その言い方ではまるで喧嘩自体は咎めていないようではないか、と。
「先生。えっと、喧嘩自体は止めなくていいんですかね」

「それに関してはどうこう言うつもりはありません」

洋次郎の問いに返ってきたのは即答だった。洋次郎は驚嘆により言葉が詰まる。まさかとは思ったが、本当に目の前の教師は喧嘩については口を出すつもりも叱るつもりもないらしい。普通の教師ならまず真っ先に、物を壊す壊さない以前に喧嘩をやめろと言うだろう。

事実今までも洋次郎はそう言われてきたし、此度の家庭訪問もメインの話は喧嘩についてかと思っていた。

今までに無いタイプの教師に洋次郎は少々混乱する。そんな洋次郎の様子を察してか、続けて佐々木が口を開く。

「お父様。私は何も喧嘩を推奨しているとか、放任的考えで口出ししないと言っているわけではありません。話し合いもせず気にくわないことをすぐ暴力で解決しようとするのは馬鹿のやることですし、イジメやカツアゲなどの行為を見過ごすつもりもありません。」

しかし、と佐々木が続ける。

「まだ学生、それも高校生という若い身。お互い意見のぶつかり合いでソリの合わないこともあるでしょう。そういった時に”喧嘩”と言う手段を用い、正々堂々拳を交わすのも悪いことではないと、私は思います」

なるほど。たしかにこの佐々木という教師は放任的というわけではなくて、己の理念に基づいて”喧嘩は咎めない”と言っているのだろう。その理念が正しいかは置いておいて。佐々木の考えがあっているのかは洋次郎にはわからない。それもそのはず、洋次郎は生まれてこのかた喧嘩らしい喧嘩など片手で数えられる程しかしていない。更に拳を交える喧嘩など一度あったかどうかくらいだ。そんな洋次郎には”正々堂々拳を交わす”と言う感覚がわからない。

が、果たして自分が誰かと対立した時、意見がぶつかった時、正々堂々ぶつかったことがあっただろうか。大抵そんな面倒くさいことは避けて真正面からぶつかる前に自分か相手が折れる形で終わった事ばかりだった。それは大人になれば大事なスキルとして重宝する。しかしまだ若いうちから衝突を避けることは、正解だろうか。いじめや一方的な暴行でないのなら、そういった形の対話も無くはないのか。

そこまで考えて、洋次郎は一度コクリと頷いた。

「先生のお考えは伝わりました。正直、私はそれが正しいかどうか判断がつきません。ですが、もし喧嘩というのが先生の仰る通りのものを指すならば、任せてみても良いと、そう思います。」

「ありがとうございます」

飽くまで自分では想像できない世界での話。しかし、その世界で教師をやる男の考え

を一端知れたのなら、この家庭訪問は意味があったのだろう。洋次郎はどこかスッキリした面持ちでもう一度頷いた。

「で、話の続きなのですが、辰巳君はどうやら校舎を破損させることに一種の美学をおぼえているようでして」

「え」

男鹿と洋次郎の声が重なった。いい感じで話がまとまったので完全に終わるものと思っていたが、どうやら違うらしい。男鹿もまったく同じ事を考えてたようで、「え、終わる感じじゃないの？」的な顔をしている。

「何故か分かりませんが辰巳君は執拗に喧嘩相手を地面や壁に突き刺したがるようです。それについて、お父様も交えてじっくりとお話ししようと思っていまして」

確定した。完全に終わる流れではない。確かに時計を見てみればまだ1時間も経っていない。そんなに早く家庭訪問が終わるはずもなく、むしろここからが本題だとばかりに佐々木の目に気合が入る。

「あ……はい」

男鹿にとっての地獄はまだ始まったばかりだった。

あれから約1時間、佐々木は学校での男鹿の生活態度、主に校舎破損についてそれはもうみっちりと話した。途中”悪意があるわけではない”という洋次郎の弁明にも耳を傾けてはいたが、だからといってやっていいことではないと更に話し合いが延長した。結論は結局のところ「本人が気をつけるしかない」ということになり話し合いは終わった。

そして今、佐々木は男鹿の家を出て帰路についたところである。

「……にしても、あちーな」

近場の駅に向かいながら、佐々木はひとりごちる。男鹿の家から駅までは少し歩かなければならない。加えて、佐々木は今日スーツ姿である。

（……何か冷たい物でも買うか）

ちょうどすぐそこには道沿いのコンビニがある。飲み物でも調達して帰ろうとコンビニに近づいた時。

ウィーン

自動ドアが開き、中から1人の女性が出てくる。手には今まさに買ったであろう商品が入ったビニール袋を持っている。真正面に立つ佐々木。必然、目が合わないわけもなく。

「……あ」

女性と佐々木が目を合わせたまま停止した。が、それも束の間。女性がビニール袋をバサっと落とす。向かい合い、少しの沈黙を挟み、次の瞬間。
「てめえ今まで…」
女性の姿が掻き消えた。
「どこ行ってやがった!!龍!!」
次に現れたのは佐々木の目の前。大幅に跳躍しており、佐々木の顔面目掛けて横薙ぎの蹴りを放つ。常人では不可視の攻撃。
が、その蹴りは佐々木が顔の横に腕をもってきたことにより難なく防がれる。直撃の瞬間、ガキンッ!!と壮絶な音がなり、ガードをした方と反対側にあった電信柱にビキビキとヒビが入った。常人では考えられないことだが、その女性、美咲は蹴りによる衝撃波だけで電信柱にヒビを入れたのだ。
「随分な挨拶じゃねえか。」
スタッと地面に着地する美咲に、佐々木は蹴りを受け止めた箇所を払いながらそう言った。かなりの威力で放たれたはずの蹴りだが、佐々木に大してこたえてる様子はない。
「ったりめーだ。何も言わず急に姿消しやがって!」
「それについては悪りいと思ってる。だがそれとこれとは話が別だ」

言うと同時に佐々木はスッと手を美咲の顔の前に持っていく。より正確に言うとその額へ。経験上これから何が起こるか察した美咲は「げっ」という声とともに後ずらそうとして、

バチン!!

「先輩をつけろっての」

できなかった。

「ってぇ～～～っっ!!」

佐々木により放たれたデコピンを額にもろに受け、美咲は痛みによりその場で縮こまる。大の大人ですら吹っ飛ばす威力を持ったデコピンだが、それでも美咲をその場から動かすには足りない。それほどまでにこの2人は常軌を逸していた。

「つかお前、今は大学の夏休み中か？」

「……ああ、お陰様でな」

額を抑えながらしゃがむ美咲に佐々木が問いかける。対する美咲は一泊置き、額をさすりながらそう答えた。

「そうかよ。エンジョイできてそうで一安心だ」

「お前は私の保護者かっての」

あいも変わらずの美咲のぐーたらぶりに佐々木は溜息をついてそういう。そして同

時に、大学生活という新しい環境にも持ち前の能天気さで順応できているようで、ひとまずは良かったと思う。
「お前には昔っから手焼かされたからな」
「んだよその言い方」
「事実だろうが」
少し呆れがちな佐々木の態度に美咲は不満気な態度を示す。が、過去を想起してみても反論できる要素が一向に見つからない。故に美咲は言い返そうとはせず、しかし黙っているのもいけ好かないのでせめてもの抵抗として「ちぇっ」と小声で舌打ちをした。
今の会話からも分かる通り、この2人は旧知の仲である。それもお互いに言い合いをしていることから、多少は気心の知れた仲なのが伺える。事実、実は美咲が今の大学に入る為の受験勉強の際に、度々佐々木の力を借りた…というより教えてもらっていたりするエピソードもあるくらいだ。
「まあ、変わりねえ様で何よりだ。あんまだらだら過ごすんじゃねーぞ」
「ちょ、おい！」
言うと同時に佐々木は軽く手を上げ、背を向けて歩きだす。が、そんな佐々木のスーツの袖を掴むことにより美咲が待ったをかける。
「あ？なんだってんだ」

「……っ！んな急ぐことねーだろ。なんか急ぎの用でもあんのかよ」
振り返りそう言う佐々木に対し、思いのほか至近距離に来た顔から直ぐに目をそらし、美咲はやや早口でそう言う。
「いや、特にねーな。用ならさっき終わらせてきたとこだ」
流石にこれから用がある人物を引き止めることはできない。が、どうやら佐々木にはそれがないとわかり、美咲は密かに袖を掴んでない方の手を「しゃっ！」と握りしめた。
「そ、そっか。ならよ……ちょいそこの公園まで付き合えよ」

「はあああああああ!?」
一際大きな声が公園内に響き渡る。その声に反応し公園内の人物が咄嗟に発生源を見るが、その声を発した当の本人はそれらの視線を歯牙にもかけず言葉を続けた。
「あ、あんた今教師やってんの!?」
「だからそう言ったろ。ったくどいつもこいつも失礼な野郎だ。俺が教師やってんのがそんなにおかしいかよ」
「おかしいわよ！それに辰巳の担任て。辰巳が私の弟だとわかってたならもっと早くに

会いに来れたじゃない！」

連絡手段が無いのはわかる。このご時世にそれもどうかと思うが、佐々木の人間性を考慮すれば納得はできずとも理解はできる。が、自分と佐々木をつなぐ橋があったのなら話は別だ。男鹿が美咲の弟なのだとわかっていたのなら、美咲と再会するのにどうにでも手はあったはずだ。少なくとも、再会するのを待ち望んでいた美咲にとっては容認し難いものである。

「疑惑はあったが確信に変わったのは今日お前とあった時だ。前々からアイツとお前はどこか似ている気がしていたが、住んでる地域が同じだったことでようやく確信したんだよ」

なるほど。確かに言ってることは通るし、嘘は言ってないだろう。しかし、

「つってもやっぱりこれまでなんの音沙汰もなかったのは納得できねー」

どうしようもなかったのは理解している。佐々木に勉強を教えてもらうときは大抵図書館だったし、それ以外の場所にしてもファミレスや喫茶などの公共施設が主だった。故に佐々木は美咲の家を知らず、また同様の理由で美咲も佐々木の家を知らなかった。

受験が終わる少し前に佐々木から「少し忙しくなるからあとは頑張れ」という旨を伝えられ、大変不服ではあったが渋々納得したのを覚えている。「あれ、じゃあ次会えなく

ね？」と事の重大さに気づいたのはそれから3日後のことであった。
「だからそれについては悪かったつったろ。」
　当時多忙を極めてたとはいえ、受験中の後輩を中途半端なタイミングで放置したのに多少の後ろめたさはある。故に佐々木はこの案件に対し素直に謝罪した。
「言葉で無く態度で示して欲しいんだけど」
　しかし返ってきた返事はタダでは許さないというもの。普通態度と言えば頭を下げたりするものだが、そこそこ付き合いの長い佐々木は、美咲の言う態度がそういった類のものではないということを知っている。そう、美咲という人間が言う態度とは、即ち己のメリットになるもので返せと言うこと。
「はぁ、わかったよ。何すりゃいい？飯でも奢るか？焼肉と寿司ならどっちがいい」
「ああ、それなら焼に……じゃなくて！お前は私をなんだと思ってんだ！」
　花の１９歳。今を生きる乙女に対し食い物を提示する奴があるかと美咲は不満を言う。それに対し佐々木は美咲の思考を読み間違えたことに割と本気で「あ？違うのか」と混乱をあらわにしていた。
「じゃあ何がいいんだよ」
「な、何がいいってそりゃ…」
　これまた珍しく言い澱む美咲に佐々木は首をかしげる。美咲の性格上こう行った場

面でハッキリ物を言わないのはらしくない。が、いかに佐々木がこういった美咲を初めて見るにしても、今急かすべきでないことぐらいはわかる。故に美咲が何かを言うまで待つ。

「あ、あのよ」

「あ？」

少し経って、美咲は先程より随分音量の下がった声でそう呟く。そしておずおずと言った調子で携帯を前に差し出した。

「れ、連絡先。おしえ…ろよ…」

「なんだ。そんなことでいいのか？」

佐々木としてはもっと物的なものを要求されると思っていたが、蓋を開けてみれば逆にそれくらいのことでいいのかと問いたくなるくらい単純なものだった。

「い、いいんだよ！はやく！」

「んだよ。急かすんじゃねえよ」

佐々木がポッケから携帯を取り出すと同時に美咲がそれを少々強引に奪い取る。そして慣れた手つきでお互いの連絡先を登録した。

「へへ。メール無視しやがったら殺すかんな」

「お前はもうちょい言葉遣いどうにかしろ。しねえよんなこと」

「な、ならいいんだよ」
　そっぽを向きながら、しかしその頬を朱色に染め美咲が携帯を返す。と同時に、先程までの行動に対する恥ずかしさが一気に押し寄せ、美咲は「そんじゃ」と一言いい早足でその場を立ち去ろうとする。連絡先は手に入れたし、これで会おうと思えばまた以前のように会える。この場に固執する意味は無くなった。故に一目散の退散を試みた美咲だったが、その背に声がかかる。
「おい待て」
「あ？」
　振り向いた瞬間、美咲の頭に僅かな重みがかかる。
「遅くなったが、よく合格した。頑張ったな」
　どんなに難しい問題を解いた時も、佐々木が作成した小テストで１００点を取った時も、ここまで褒められたことはなかった。ここまで嬉しく感じたことはなかった。今、頭の上に置かれたこの手が、合格して良かったと思える１番の出来事になった。
　故に美咲は最高の笑顔で応える。自分の先生に。自分の先輩に。自分の好きな人に。
「おう!!」

「〜〜〜♪〜〜♩」

男鹿家のリビングにて夜、風呂上がり妙に機嫌良さげな美咲が家族により観測された。鼻歌を歌い、今にも軽く踊り出しそうな勢いである。それもそのはず、美咲の手に持つ携帯には短く一文で『ああ、近い内にな』の文字。たった今佐々木と2人っきりの食事の予定を立てたところである。と言えば聞こえはいいが、実際は祝勝会を兼ねたものであり、行き先も焼肉とロマンチックのカケラもないような所である。とはいえ、美咲からしてみれば一対一のご飯など今まで考えられもしなかったイベントである。受験勉強で一対一など頻繁にあったが、これが食事となると一気に毛色が変わる。故に美咲はご機嫌なのだ。

が、そんな事情などまったく知らない男鹿からすれば、この状況は天変地異の前触れかと疑うほどに異質だった。これにはヒルダも若干の戸惑いを見せる始末である。別に姉は感情を表に出さないタイプではない。むしろ逆で姉ほど分かりやすく感情を表すタイプも珍しいだろう。だからこそ、今まで見たことのない様子の美咲は異質と言えた。一体何があったら姉はこうなるのだろうと。

気にし出したらどうにも止まらない男鹿は、ついに聞いてみることにした。

「姉ちゃん。あのよ……。なんつーか…なんかあった？」
「んー？別にー」
「お、おうそっか」
〝別に〟な訳ないのは一目瞭然なのだが。
まあ姉が特に話す気もないなら食い下がるようなことでもない。男鹿は大人しく引き下がり、そそくさ部屋に戻ることにした。
「そういやさー」
が、そんな男鹿に美咲が何とは無しに話しかける。
「あんたって神龍（ナガ）に憧れてたっけ？」
姉から久し振りにその名前が出たことに男鹿は目を見開く。男鹿の雰囲気がいつものふざけた様子とは一変したのをヒルダは感じ取った。
「わかりやすいわねあんた」
「なんで、今その名前が出んだよ。姉ちゃんの様子と何か関係あんのか？」
「いや、あたしはいつも通りだし。別に関係ないわよ。ただ」
美咲は冷凍庫からアイスを一本取り出し、リビングの扉に手をかけながら振り向く。
「もしかしたら近い内に会えるかもしれないわね」
「それってどういう!!」

そしてそれだけ言い残すと続く男鹿の言葉に耳を貸さず部屋へと戻っていった。残された男鹿は姉の様子以上に気になる爆弾を落とされ気が気でない状態であった。

最強

その日見た光景を、彼等は生涯忘れないだろう。
拳1つが唸る度に砂塵のように吹っ飛ばされ、脚が曲線を描く度に一瞬で意識を刈り取られる。数多の人間が殺到しては、その圧倒的な力でねじ伏せられる。
その光景はまるで”嵐”。そう、唯の人では決して抗うことのできない、正しく”天災”。
その光景を見た人物は、あまりの猛威に言葉を失う。しかしその目だけは、しかと逸らさず。やがて彼等も、その天災の中心へと駆け出していく。
その不可解な行動は恐れからの投げやりではない。
尊敬、憧れにより、居ても立っても居られなくなったからだ。

「葵姐さんから召集?·もちろん応じるけど、こんな深夜になんでまた」
突然鳴った電話に応じてみれば、自分達の元トップからの招集があるという。といっても、葵は既に烈怒帝瑠の総長という看板を下ろしており、メンバーを集める権限は

持っていない。なのでこの召集も本来「手を貸して欲しい」くらいのお願いだったのだが、烈怒帝瑠のメンバーに断ると言う考えはない。

故に涼子としても二つ返事で了承するつもりだが、それでも理由は気になる。総長を退いてからというもの、葵が烈怒帝瑠のメンバーに何かをお願いすることなどなかったからである。

『ああそれがね。男鹿と東条がとうとうぶつかるみたいなんだけど』

この時点で涼子は少しではあるが驚いた。入学してきたばかりの1年がもう石矢魔トップと対決とは、早すぎると。

しかしそれだけならば烈怒帝瑠は関係ない。問題はその後。

『なんか雲行き怪しいのよね』

「なるほど。これは確かに大事だわ」

その後迅速に準備を済ませた涼子達烈怒帝瑠の面々は程なくして集合した。早々に石矢魔に乗り込もうと歩を進めてみれば、石矢魔に近づく程にその異常性が良く理解できた。

「なんて人数差。私はてっきり男鹿対東条と思ってたけど、これじゃまるで男鹿対石矢魔ね」

ため息混じりに寧々がそう吐く。
男鹿1人とプラスαを囲むように陣取る石矢魔生。男鹿の規格外な強さを持ってしてもその光景は多勢に無勢と言える。そしてその様子を見て、葵が口を開く。
「みんなごめんね。急なお願い事で集まらせて。今からでも無理に参加することはないわ。私は烈怒帝瑠を退いた身だし、無理してわざわざーー」
「何言ってんすか姐さん。誰も無理して来てなんていませんよ。たかだか1年に上に立たれるのが嫌なだけでこんな大勢で袋叩きにしようとしてる、その根性が気に食わないんすよ」
が、それは寧々によって遮られる。それに、と言ってさらに寧々は続ける。
「伝説の不良ドラゴンヘッドは1年生の時石矢魔生全員を相手にして打ち勝ったって言うじゃないですか。なのに奴らはそれと真反対なことをしてる。腹たつんですよね。そういうドラゴンヘッドの偉業を侮辱するような行為は」
葵が周りを見渡すと全員が寧々と同じ目をしていた。葵は彼女等も寧々と同じ気持ちなのを理解した。途端に葵はそれが可笑しくなる。
「ぷ、あはは」
「ちょ、なんで笑うんすか姐さん！」

なぜ笑われたのかわからず、不本意だとばかりに寧々がそう訴える。
「ごめんなさい。変な意味じゃないのよ。ただ、なんだかんだ言ってやっぱり貴方達ドラゴンヘッドのこと大好きよね」
「なっ」
その一言に寧々は思わず声を上げる。
「な、何言ってんすか！いや今のは好きとか嫌いとかの話ではなく！ただ奴等の伝説の存在をコケにするような所業が気にくわないだけで！ていうか私はドラゴンヘッドはただ不良として尊敬しているくらいで！いえ、もちろん葵姐さんが1番すけど！」
「はいはい」
両手を忙しなく動かしながら、いつもの二割り増しで早口でまくし立てる寧々に対し、葵は軽く笑いながら相槌を打つ。
「本当にみんな、ごめん……とはもう言わないわ。勝ちましょう。私達は私達の戦いに」
『はい！』
石矢魔の誇りだとか、譲れないものだとか、そんな崇高な理由で戦うわけではない。彼女達が掲げるのはただ1つの理念。
即ちーーただ気にくわないやつをぶっ飛ばすだけである。

「はあ、最悪だ」

家庭訪問が一通り終わり、ようやく俺の夏休みが幕を上げる、と、そんな時だ。校長からメールが入ったのは。

内容は夏休み中に石矢魔生徒が起こした問題に対する関係各所からのクレームの処理だった。夏休みに入ってまだ1週間程しか経っていないのに、その量は膨大だった。おまけにそれらの処理をする教員が俺以外いないときたもんだ。どうやらあいつらは学校外でも人に迷惑をかけなきゃ気が済まないらしい。夏休み明けに会うのが楽しみだ。

そう言った経緯で、俺はわざわざ夏休みに学校まで出向き、深夜まで書類仕事をしている……訳だが…。

『うおあああああああ!!!』

『ぐがっ!!』

『おらあああ!』

気のせいか、先程から喧しい声が外から聞こえる。なんだ、外で抗争でも起こってるのか。夏休みに、わざわざ校庭まで来て。……いや、まさかな。どうやら連日馬鹿どもの対応をして、長時間書類仕事に打ち込んだせいで気付かないうちに大分疲れていた

様だ。幻聴が聞こえやがる。

ドゴォォン!!

今度はそんな爆音と共に校庭で大きな花火が上がった。俺がこんなに書類仕事に弱いとは思わなかった。とうとう幻覚まで見えてきた訳か……。

「っち」

んな訳ねえだろ。何やってんだあの馬鹿共。夏休みにわざわざ学校に集まってやることといったら喧嘩か。他にやる事ねえのか。

本当なら文句の1つも言ってやりたいが、どうやら誰も校内には侵入してない様だ。器物破損の恐れがない状態で、喧嘩する場所として校庭を借りているだけなら止める理由はない。石矢魔の校庭は周りの住宅地からは若干離れているからな。騒音被害になることもないだろう。花火はグレーだがな。

集中の切れた俺は再度作業に戻る為にイヤホンで音楽を流すことにした。元々何日かかけてこなす書類を1日かからず終わらそうとしてるんだ。油を売っている暇はない。この調子でいけば、明け方には終わるか。

数時間後、ひたすらに作業に没頭していた佐々木は突如イヤホン越しにもわかる程の爆音を聞いた。そして直後、謎の浮遊感と衝撃がその身を襲った。

「ついに！男鹿が東条を倒しやがったあああ！」

多くの石矢魔生徒は倒れ伏し、朦朧とする意識の中で、うっすらとそんな声を聞いた。

男鹿が東条を下した。やりきれない気持ちは大きかったが、それ以上にやはり衝撃が勝った。1年にトップに立たれる訳にはいかないと集った彼らだが、その実これはある種のデモンストレーションの様なものであった。この人数を相手に、そしてそれを超えたとしても東条を相手に勝てる筈などないと、そう高を括っていた。

しかし、結果は予想だにしないことの繰り返し。次第に圧されて行き余裕が薄れた。男鹿が東条との一騎討ちになりなけなしの余裕が消えた。そして、東条と互角の勝負を繰り広げる男鹿に焦燥感が生まれた。

結果は、先程聞いた通り。本当に勝ってしまった。烈怒帝瑠や東条以外の東邦神姫の助力があったとはいえ、男鹿は紛れもなく石矢魔の天下に立ったと言える。

動けるものは、疲労した体を動かして男鹿に視線を向けた。

そこにあったのは、伝説の不良神龍（ナーガ）の偉業の一つを再現した男の勇ましい立ち姿。

ーーなどではなく、
「さっきから腕がもげそうなんですけど！」
ありえないほど腕が肥大化し、情けない面を浮かべる男鹿だった。
男鹿は直後、その腕を振り上げそこらに叩きつける。
瞬間、轟音が辺りを包んだ。

それは、校舎が激しい音とともに崩れ去り、その全てが瓦礫となった後で、静かに、本当に静かに起こった異変だった。
驚嘆で口も塞がらない男鹿達の眼前に積もる大量の瓦礫。その一角が、僅かに動いた気がした。静かなその変化は、しかし静寂が辺りを包んだこの場ではやけに視線を集めた。
グラ

激しさもなく、瓦礫がズレて何かが姿を見せる。
それは、人の手だった。
「!?」
それを目にした生徒達が息を飲む。いつのまにか烈怒帝瑠のメンバーも合流しており、その光景を見ていた。
やがて、もう一つの手が這い出てくる。この時点で、何人かの生徒は最悪の想定をしていた。
思えば、奴はいつもそうだった。少しでも備品を壊せばどこからともなくやってくる。
それが何処だろうと、いつだろうと、必ずやってくる。なんで、など考えるのはとうにやめた。学校の備品を壊せば必ず怒りの鉄槌を下しに来る。わかっているのはそれだけでいい。
それなのに、学校そのものを壊しておいて、来ないはずないのだ。奴が。
あの、化け物が。
ゆっくりと瓦礫から這い出てくるその光景は、彼等からしてみれば地獄の使者のそれだった。すっかりボロボロになったシャツを辛うじて身に纏い、背を向けて上体を起こす佐々木。瞬間、生徒達の気持ちは満場で一致した。即ち、逃げなければ死ぬと。

これまでの経験から、佐々木が何で1番怒るかは痛みと共に身体が知っている。
今回のこれは、紛れもなく過去の中でも最上位でやばいことである。
後ずさろうとする彼等を、次の瞬間強烈な重圧が襲った。これも知っている。佐々木と対面したものならば、これが佐々木の出している単なるプレッシャーだと言うことがわかる。
だが、今回のこれはあまりにも異質。
「ぐっ……」
呼吸が乱れ、立っているのもやっと。
ーーやばい、過去一で超怒ってる。
彼等が出した結論は同じだった。
そこでようやく、佐々木が口を開いた。
「てめえら全員、死ぬ覚悟しろよ」
今度こそ全員が逃げようとして、しかし、足を止めた。本能が警鐘を鳴らす中、それでも彼等は足を動かすことができなかった。その視線は、ある一点に向けられていた。
「…え……」
風が一陣。ボロボロのシャツが飛ばされる。彼等の視線を釘付けにしたのは、傷。
その背に刻まれた、勇ましいまでの3本の傷。

紛れもなく、伝承と変わり無いその姿。
そして十分に説得力のあるこの重圧。

誰かが、振り絞るように呟いた。

「ドラゴン…ヘッド」

瞬間、佐々木の周囲の瓦礫が爆ぜた。それと同時に近場にいた生徒達がことごとく吹き飛んでいく。

「あ、あぁ…」

言葉にならない声を出す石矢魔生達。腰を抜かすものも、涙を浮かべる者もいる。その心に浮かぶはなんだろうか。感激。憧れ。熱情。尊敬…。だが不思議と、先程まであんなにも場を包んでいた恐怖を抱えている者は1人もいなかった。

「う…そ…」

「マジかよ…」

遠目で見ていた烈怒帝瑠のメンバーも半ば放心状態で呟くのがやっとだった。思わず口から溢れた言葉とは裏腹に、しかしその心は佐々木があの伝説の不良、ドラゴン

ヘッドであるという事実を当たり前の様に受け入れていた。それは1番の関わりがあった葵だけでなく、全てのメンバーに言えたことだった。

尚も止まらぬ佐々木の猛攻は、まるで嵐。不良達にとって、この世で最も”光栄”な。

「う、うおおおおお!!!」

人の身ではどうしようもないはずの”天災”。

しかし、彼らは飛び込まずにはいられない。立ち向かわずにはいられない。全員が全員、己の胸の内の喜びを表すように。先程まで瀕死だったことが嘘のように雄叫びを上げ、佐々木に向かっていった。

一瞬。ただの一瞬。掠るだけでもいい。伝説の拳をくらってみたいと思ったのは、彼らがどうしようもなく馬鹿で、そしてその伝説にどうしようもなく焦がれていたから。

そしてそれは、ある1人の”最強”の少年にも当てはまる物であった。

「ドラゴン…ヘッド。まさか、佐々木が…」

他の様に雄叫びはあげない。尻をつくことも、涙を浮かべることも。

ただ、その目は久しく見れなかった”それ”を見るのに必死であった。あの時、初めて芽生えた感情がまた、原点を見ることで蘇る。

「つけえ…」

「…えっ」

　男鹿の微かな呟き。聞こえたのはそばに居た古市だけだった。驚いて顔を向けた古市は、初めて見る男鹿の表情に酷く動揺した。
「久しぶりだな。いや、そんなこともねえのか。なあ、ドラゴンヘッド！」
　が、直後には男鹿はその場から姿を消し、佐々木に向かって突貫していた。
　尊敬、と言うと少し違うかもしれない。ただ唯一の、少年の憧れ。究極にまで洗練されたその暴力は、１５歳になった少年を変わらず魅了した。
　別にずっと挑みたかったわけではない。何故飛び出したのか。向かっていったのか。それは少年自身にも説明のできないことだった。ただ、あの日もこうやって飛び出したかったのは、確かだった。
　しかし、嬉々として向かっていったあの男鹿でさえ、大衆と同じ扱いを受け一瞬で吹っ飛ばされる。
　その場にいる者がことごとく吹っ飛ばされていく音を聞きながら、男鹿は自身の意識が薄れていくのを感じた。
「……っぱり。……っけえな…」
　そして満足する様に意識を手放した。

語られる伝説

『ねえ知ってる？新学期からうちに転校生が来るって話。しかも集団で』

夏休みも終わりに近づき、新学期まで後1週間をきった頃、聖石矢魔学園の生徒達は各々メールなどでその話題で持ちきりだった。

『ああ知ってるよ。親に一斉送信でメールが回ってきたってやつでしょ？詳細は追って連絡するって言われてるらしいけど』

きっかけは聖石矢魔学園から生徒達の親に出されたメールによる連絡。曰く、新学期から一時的に1クラス分程の生徒達が転入してくるとのこと。それだけのことならば多少希有な例であってもそこまで騒がれはしない。問題は

『それでさ、その生徒達っていうのがあの石ヤバの生徒達らしいんだよね』

『え!?マヂ!?ちょーやばいじゃん！』

そう。これである。石ヤバ――正式名称を石矢魔。都内でも有名な天下の不良高である。学校はもちろんのこと、その周辺の治安もお世辞でも良いとは言えず、誰も寄りつこうとしない。一度足を踏み入れれば本当にここは日本かと疑いたくなるよう法外ぶりである。

そんな高校の生徒達を、一時的とは言え受け入れるという。学校側はクラス、果てはフロアすら聖石矢魔生とは分けて隔離すると言ってはいるが、生徒の親からしたらそれは安心する材料に足り得ない。

当然である。同じ学園で生活するならば接触は必須。法も倫理もない世界から来た生徒達とトラブルが起きない訳もなかった。

が、しかし。

『でも学校側は安心してくださいって。なんか特別に教師をつけるらしいよ』

『それうち知ってる。佐渡原でしょ？うちあいつ好きじゃないからやったーって感じ』

学校側は受け持つ教師が責任を持って石矢魔生を管理するとのこと。

『いやそれがね、違うらしいよ』

ただ、その教師の名は生徒の親には見慣れないものだった。

『なんか、超やばい先生がつくんだって』

「木戸先生！どういうことですか！」

生徒が夏休み中だろうが、教師は部活の顧問なり事務作業なりで学校に在籍している。その職員室で声が響き渡った。

「落ち着いてください佐渡原先生」
「石矢魔生徒は私が受け持つという話では？」
声の正体は佐渡原　巧。石矢魔が転入してくることが確定した段階で担任を受け持つことになっていた教師だ。
「連絡が遅れたことについては謝罪します。しかしこれは決定事項です。石矢魔生徒については他の先生に担当してもらいます」
「んなっ！お言葉ですが木戸先生。うちには素晴らしい先生方はいらっしゃいますが、相手は石矢魔です。普通の教師では扱いきれない！それどころか身に危険が及ぶ可能性すら！」
佐渡原は優秀だ。それは学歴のこともあるが、問題児を扱うことに関して彼は聖石矢魔1を自負している。それは驕りではなく、確かな実績に裏付けされた自信であった。が、それでも、佐渡原の言う通り石矢魔の相手は普通では無理なのだ。その程度では、まだまだ〝普通〟の域を出ない。
「承知の上です。だから、〝彼〟なんですよ。普通とはかけ離れ、ましてや異常なんて言葉では収まり切らない〝彼〟がね」
木戸の言葉に、佐渡原は一瞬詰まり、次いで思考する。彼の知る聖石矢魔の教師に、そんなものがいただろうかと。

「何者なんですか…？その”彼”は」
「そうですね。何から話しましょうか。まず、彼の名は…」

まさか夢にも思わなかった。あの馬鹿どものことだ。いつか何かやらかすだろうとは思っていたが、まさか校舎全壊だとはな。幸い死人は出なかったらしいが、それでも以前通りに授業を行うことは校舎的に不可能だ。そこで石矢魔は生徒達を何分割かし、それぞれ別の学校に一時的に転入させると言う判断をした。
まあ、何人かはかなり通学距離が伸びたらしいが、当事者は自業自得だ。問題は石矢魔でも数えるほどしかいない真面目な生徒達だ。そいつらからしたら傍迷惑もいい所だ。学校にしっかり学びにきている奴らを害するなんて、許されることじゃねえ。今回の事を起こした主犯格はしっかり再教育する必要がある。
だが幸いにも、その主犯格は纏まって転入しているようだ。ならば話は早い。俺もそこに行くだけだ。問題児を一斉に集められるなど都合が良い。今までが生温かったんだ。これからはより一層厳しく行かせてもらうとしよう。

さ い あ く だ。

石矢魔に入学した日。俺の学園生活は儚く散ったと思ったものだ。法も倫理も存在しない石矢魔高校。そこに、自分みたいな平凡な生徒が入学など、そこらの不良にボロ雑巾のように扱われ、最終的にはポイと捨てられるのは目に見えていた。

だが、この日、それを更新する最悪があるとは思わなかった。

古市は不自然に静まり返った教室を見渡して思う。聖石矢魔学園に転入して初日、腐れ縁の男鹿が同じ転入先ということで多少の安堵はあったが、それを込みでもえらい教室に迷い込んでしまったと古市は思った。

なんせこの教室。

烈怒帝瑠元総長にして東邦神姫　邦枝　葵。

烈怒帝瑠現総長　大森　寧々。

東邦神姫　神崎　一。

東邦神姫　姫川　竜也。

東邦神姫　東条　英虎。

と、石矢魔でも屈指のヤバいやつを集めて煮込んだような教室なのだ。それ以外にも一度は顔を見たことがある問題児ばかり。当然、教室を渦巻く空気は最悪なものになっていた。古市は堪らず前の席の男鹿に話しかける。

「お、おい男鹿。どうなってんだこのクラス！右見ても左見ても問題児！おっと、前もだった。って馬鹿か！お前が校舎をあんな風にしちまったせいで俺まで化け物の巣窟に放り込まれたじゃねえか！」
「んだようるせえな。捲し立てるんじゃねえよ」
「ダブ～」
　一気に喋る古市に対して、男鹿はダルそうに対応した。ベル坊も睡眠の邪魔とばかりにヤジを飛ばしていた。
「お前が黙れボケ！噂によるとここ聖石矢魔には、石矢魔でも特に名前の挙がる問題児が集められたってよ！ふざけんな！」
「じゃあお前も問題児筆頭なんだな。ハハ」
「んな訳あるか!!こちとら学校の隅で縮こまって過ごさせていただいてたわ！こんなクラス冗談じゃねえぞ！」
　男鹿と話している内に目が血走ってくる古市。この状況が死活問題の古市に対して、男鹿はどこまでも楽観的だ。この男、基本的にドラゴンヘッドが絡まないと真面目にならない。
　ドラゴンヘッドが佐々木とわかってからというもの、男鹿はどこかスッキリした面持ちで、前と比べ少しだが成長が感じられた。それは、話だけだがドラゴンヘッドと男鹿

の出会いを知っていた古市だからこそ得心がいった。たとえ一撃で終わろうとも、あの日、あの時、飛び出せなかった後悔をやっと清算することができたのだ。

なのに、

「ふぁー」

この男ときたら、相も変わらずこれである。ベル坊と欠伸をしながらまた寝る体勢に入る男鹿を見て、古市は青筋を浮かべる。なるほど、確かに問題児クラスだ。男鹿だけでなく、クラスの大半は周りに牽制するなり、寝る体勢に入るなりと統率の取れなさがえぐい。

時刻は８：２６

授業開始まで５分を切った。後５分こいつらは耐えられるのか。元々この異常集団が定刻前に来れていることが奇跡なのだ。

「疲れたな。今日はかえんべ」

生徒の１人がそう漏らす。古市はまだ何もしてないだろ！と心の中で突っ込んだ。が、彼らにとっては朝起きてここにこれただけでも大金星。重労働と呼べるものなのだ。緩い空気が伝染していき、１人、また１人と帰る準備をし出す。

それを良しとしないのは邦枝　葵だ。彼女は聡明で、自分たちの置かれた立場をよく理解している。ここにきてなお不真面目な石矢魔がどのように見られるのか彼女はわ

かっているのだ。
「ちょ、ちょっとあなたたち！」
葵が生徒を止めにかかる。と、その時だ。
ガラガラ。
教室の扉が開かれる。男子の平均身長より少し高い程度の扉ではそのまま入ることができずに、首を少し傾けながら入ってくる人物。その人物はゆるりとした足取りで教卓に向かい、持っていた教材を教卓の上に置いた。
「さて、そろそろホームルームだが、立っている奴らはトイレか？」
そして、唖然とする生徒たちに向けて男は、佐々木はそう言った。

シンと静まり返る教室。物音一つ立てず、誰かが固唾を飲む音さえもうるさいほど響く。
立っていた者たちも動き出さない。いや、動き出せない。それはそうだ。件の男が伝

説とわかった日から転校騒動で少し間が空いたものの、まだ1週間も経っていない。殆どのものについてはあれは現実だったのかすら懐疑的だ。それ程までに彼らにとってその伝説は偉大であり、信じ難いことなのだ。

「なんだ?トイレはいいのか?じゃあ席につけ。そうこうしているうちにトイレ行く時間なくなったからな」

なのに、この男は以前と変わらぬ調子。それが逆にリアリティがある。もともと彼らにとって佐々木に逆らうことがいかに愚であるかはこの3年間で嫌と言うほど教えられた。だが、ことここに至っては従うのに恐怖とは別の感情が宿る。

『はいっ!!!』

立っていたものは声を揃えて着席した。教室のほとんどが先程までのだらけが嘘のように、優等生のような出立ちになった。

特に問題児とされている何名かの生徒も、その態度に緊張が走っている。

「おう」

と、ここで開始の号令が鳴る。

「んじゃまあ、ホームルームを始めるわけだが、今日は初日ってのもあってな、いきなり授業は開始しないらしい。まあ、うちに至ってはルール確認やらなんやらだな」

他の生徒ならともかく、石矢魔生徒は今季からの転入になる。つまり校則などの一通

りの確認が入るわけだ。
「じゃあまず校則の一条目だが」
「すみません！佐々木殿！」
　佐々木が手元のノートを開いて喋り出そうとした瞬間、手を挙げ立ち上がり、それを止めるものがいた。まるで囚人のような振る舞いだった。
「あ？んだよ」
「い、いえ。あの…」
　不特定多数の視線が注目する。その視線には『い、行くのか？』という意味が込められていた。
「何もねえなら続けるが」
「いえ！」
　佐々木が再度ノートに目を落とそうとする寸前、男が続けた。
「あの、つかぬことをお伺いしますが、佐々木殿は、その、かの神龍（ナーガ）で、あっておられますでしょうか」
　全員の間に緊張が走る。別に疑っている訳ではないが、それでも本人から聞くのは、彼らにとってとても大きな意味を持つ。
　少しの沈黙。質問者と佐々木の視線が交差する。緊張から見つめられたものの喉が

鳴る。

「ああ、そんな名で呼ばれたこともあったな。昔のことだ」

やはり、と全員の表情が強張った。半信半疑、いや九信一疑くらいではあったのだが、それが１０割になった。目の前のこの男は、いやこの人は、あの伝説のドラゴンヘッドなのだ。数多の伝説を残した彼は、全ての石矢魔生の、いや、全ての不良の憧れ。

「じゃ、じゃあ!!」

「んな話今はいいんだよ。確認事項やらでやる事が沢山あんだよ。もう始めんぞ」

「うっ」

勢いよく今度は寧々が立ち上がったが、佐々木によって切り捨てられる。寧々は普段の血の気の多さが鳴りを潜め、大人しく着席した。もう質問者はいない。ただ、殆どのものがソワソワしていた。

「つーことで、まあ確認事項やらその他の連絡事項は全て伝えたな。今日やる事は全て終えた訳だが、何か質問あるやついるか?」

あれから割と長い連絡事項が多々あり、生徒は大人しく聞いていたわけだが、それどころではなく大抵のものは頭を素通りしていった。そしてきた、公式質問タイム。正

直、聞きたい事はいくらでもある。だが、何を聞いていいのか。ない頭を絞って必死に考える。と、そんな時、

「はいっスー。征天の戦いについて聞きたいんスけどー」

本当に頭がない故に、何も考えず直球勝負できる由加が先陣を切った。脳内お花畑の彼女には、烈怒帝瑠の面々は度々困らせられたものだが、今回ばかりはその能天気さが頼もしかった。

「征天の戦い？んだそりゃ」

「ほら、あれっスよ。河原で行われたとされる喧嘩っス！なんでも佐々木先生と対等に喧嘩できる奴がいたとか！」

征天の戦い。ドラゴンヘッドの、いや佐々木の数ある伝説の中で、一際異彩を放つ伝承である。他の伝説は基本佐々木の尋常離れした武勇伝だが、この話が異質たる所以は、その佐々木に唯一対等に渡り合えた者が存在するという点。この話だけが、佐々木以外の者も常軌を逸している伝説なのだ。

故に、憧れの人に会った少年の如く、聞きたい武勇伝で山ほどある中でも、彼らが一番聞きたい事はこの征天の戦いについてだった。

心の中で烈怒帝瑠の面々は『ナイス由加！』と賛辞を送った。

「それか。んな呼ばれ方してんのかよ」

「ウチらの中でも特に有名な話っス！覚えてっスか!?」
「ああ。日にちまで完璧にな」
「うおぉ。どんな感じだったんスか…」
いつかも完璧に覚えている佐々木に、ある層では『ドラゴンヘッドに対抗できるものがいるわけがない』と眉唾物として扱われていたこの話が一気に信憑性を増した。本人から伝説を語られるこの瞬間に、流石の由加も緊張が増した。
佐々木は周りを見渡し、興味深々に聞いている面々にため息1つ吐くと、気怠げに話し始めた。
「２０００年の８／３１だ。当時高1の夏休みの最終日だった。んな時河原で唐突に喧嘩売られたんだよ。俺は売られた喧嘩は買う主義だったからな。二つ返事で了承した」
本当に日にちまで覚えている。佐々木にとっても印象的な相手だったのだろう。全員はその相手とやらが気になった。まごう事なき最強がここまで記憶に残すのだ。あの東条ですら居眠りする事なく静かに聞いている。
「相手は、誰だったんスか」
あのドラゴンヘッドと対等に渡り合える人物だ。相手方が聞いた事がある不良でもおかしくはない。だが、そんな伝説的な存在は彼らの知る限りいなかった。東条は1人思い当たる節があるのか、興味深げに聞いていた。

だが、次の佐々木の回答は予想の斜め上だった。
「それがな、なんも知らねえんだよ。向こうは俺を知っていたみてえだが、自己紹介も何もせずに始めちまったからな」
拍子抜けな答え。だが、最強らしい。相手が誰かなどどうでもいい。喧嘩を売られたから買っただけ。それがどうしようもなくドラゴンヘッドのイメージ通りだった。
「だがまあ、年齢は近かったと思うぜ。眼鏡してコートを着ていたせいであんまわかんなかったけどな。妙な力を使う奴だった」
妙な力。全員は頭にハテナを浮かべたが、まあ佐々木自体よくわからない強さだし、そんなもんなのだろうと納得した。馬鹿故の飲み込み速度である。
しかし男鹿はそれに心当たりがあった。
悪魔の力。悪魔と血の契約を交わした者のみが使える異質な力。身体能力は大幅に上昇し、それどころかエネルギーの放出など、当事者の男鹿も原理がわからない力を授ける。
なるほど、と男鹿は得心がいった。確かに、相手がもし悪魔の契約者であるとしたら、あの佐々木にも対抗しうるだろうと。
「今までもあのレベルは5人もいなかった」
高1の佐々木といえば、高校3年間の中で1番荒れていたと言われる時期だ。それは

逸話の量から推測できる。実際は2年、3年と時が経つごとに異名が広がり、嘗てほど考えなしに挑むものが減っただけなのだが。

「ほへー…」

話終わり、聞いた由加も半ば呆然としていた。あの伝説が本当で、しかも憧れて止まないその本人から聞けたのだ。他の者も目を輝かせ、男泣きするものまでいた。

「つか、連絡事項の質問じゃねえのかよ。他にねえならこれで終わるが」

「じゃ、じゃあ私！あの、烈怒帝瑠（レッドテイル）初代総長と神龍（ドラゴンズクロウ）の爪痕でやりあったって聞いたことあるんですけど！」

せっかくの機会だと、寧々が続いて質問する。この質問ラッシュは、佐々木が「いい加減にしろ」と注意するまで延々と続いた。